031.2 Kl 297k

嬉遊笑覽序

人之稟質雖各異心志和乃樂樂乃笑獻笑以諸戲嗚呼飽食無所用心難矣哉夫四海之內一州則有一州之俗一鄉則有一鄉之習勿論於歲時節物於凡百伎藝亦自有小異而節物伎藝更各有戲事是故詩人藻客取戲于文勇士壯夫致謔于武或較優劣或爭輸贏上自掖庭宴游縉紳風流下迄閭閻社會小兒囉嗊要之均是戲事而所娛樂以遣興者一也況方今熙朝無事之時逸民皆無不含哺而嬉鼓腹而遊者若夫善戲謔不爲虐則足以觀太平之餘樂廼此編諧謔敖弄雖近爲虐之言然亦將慰賢乎已之歎云爾

文政十三年庚寅冬十月

筠庭信節

国立国会
26.2.23
図書館
225693

おのれ信節（ノブヨ）またの名節信（セッシン）ともいふハもろこしの潜夫論を著しゝ人を學ふにもあらず又井出の蛙のからしたるをもたりし數寄者（スキモノ）を云たふにもあらでいと等閑なる人わらへならむかしさるハゆかりある人の金（カナ）もの巧（タク）みに作れるが我に贈（トラ）するとて銅印を刻（キザ）めるに文字をうへ云たかへさまに居（スエ）たれハ改めつくらんといひしかど殊さらに作り出たる物のあたらしくをしければぜちにこひてそのまゝに用ぬたるハ行成卿のみつからなりやきとかゝれしも思ひ出られぬまた筠庭さいふとハ住る處の庭の傍にむら竹のいさゝか生たるをすふほなる心を學ふ友なれや文みるまどにひく呉竹さくちすさみてもしさるべき處もとめて文みるためにはなちいでの一間をも設けたらましかばこれをそのかたへに移し植（カカ）なましさまづあらましに號をつかむもをこがましきわざなれと今ハ世人

のならひなればやかて竹庭（タカニハ）とぞいひける文字をしも漢（カラ）めかさむとて筠庭また筠居さも書るになん幼（イトケナ）きよりよろづに拙（ツタナ）うしてたゝ物よむそのみすこし好みて有にまかせて見しうちよハふさ心づきて思ひ得るさなどもある折々に書籍に乏（トモ）しけれハ考ふべきこともあたはずいかでこれ多く集めてしがなさりさてことひ牛に汗あゆまでひかせ文庫（フミクラ）の棟木（ムナキ）にさゝへん程ならんハ見つくすべうも覺えねばたゝほほよそにもてあつかふふみさものよめかたきハ異本を得てよく校へ合せてもたらば事足りぬへしなどおもひしも力及ばざるをいかゝはせんわが家にむかしより貯ふる物とてハ古き書畫器物のみ今の身の程にハこよなう過たる物どもゝ有しをもてあそぶともなく用るともせでひめ置ぬるハいさやくなき物からかく傳へぬるをいさゝかも我好む事にかへむハ本意ならね

ばせんすべなくて蟻といふ虫の土をまろかせて塔婆くむさかいふめる
ことわさのごとく物つみて其料にせむにハ志かゞと思ひかまへて年経
るにいとふいなる事のみさしつゞひて心さし〻事もいたづらに成つ〻
かの塵はかりもはふらさしとせし物までもおもはずに名残なくうせぬ
るハさるべき時にやありけむといと浅ましかゝるまぎれにすこしばか
りもたりしふみさへ半ばにたらずなりぬるハいかにかせまし今ハいよ
〻ちからも盡て文みるこゝろものうくて心にそまねば志はしハ手だにふ
れざりしかど年ころ抄書志つる反古ごも散みだれたるが志みの巣とな
らむハさすがなる心ちせられて捨もやらずまさぐりみればいとおかし
きとゞもゝまぢれるに心ぶくさみぬるハ童のたはふれになん似たりけ
るこれによておもふに世にもてあつかふとわざ繁くまた人の好みもま

ち〳〵にハあんなれどおほくハこの戯れ遊ひにひとしいでやこの反古
ともを種として其中にわきて遊興の事のはかなくなさなき又ハおほご
けさるがうかましきなどかいつめてみばやとやがてかく物するになほ
をち〳〵にのごめてかへさひ撿ふべき書もおほかれどおほらかにかい
やりて勤めてあなぐり求るも労がはしくかつハ心ゆくまで正さむさせ
ばいくばくのいとまか費えはてしふからむもわつらそしければひきゝ
りに休ぬるにこそかくて後もるやかに見出たる事あらんついて〳〵に
書くもへなむかし

ものうさにまなびし道ハふみもみすひまゆく駒のをしき物から

總目

卷一　居處　容儀　　卷二　服飾
卷三　器用　書畫　詩歌
卷四　武事　雜伎　　卷五　宴會
卷六　音曲　翫弄
卷七　行遊　祭祀佛會　　卷八　慶賀忌諱　方術
卷九　娼妓　言語
卷十　飲食　火燭　　卷十一　商賈　乞士化子
卷十二　禽蟲漁獵　草木

右總計十二卷附錄一卷

嬉笑遊覽細目

●上冊

卷壹上　居所
むろ　堀立　内室作り　虛室　やぐら　穴藏　地突　千本突　淺草砂利　ぎう突　木やり　てこの者　とびの者　あなふ築　棟上ケ餅　手斧初　下ヶ墨　宇津保柱　みつばよつば　幸種　水視　閣漏　宮殿高くなりしこと　中門　平門　妻戸　棟門　はこだち　もろをり戸　上土門　冠木門　中門の廊　廊の連子　實撿の窓　侍　遠侍　武家構　玄關　書院　主殿　客殿　出居　對面所　附書院　出し文机　佛壇床　床　押板　棚　間木　置床　ゆか　くれをこ　あぐら　盜竹　板じき　ねだ　疊　かもしとね　石だゝみ　深緣差筵　ござ　高麗緣　座敷　飾物　眞の飾　褻居の床　ひたひ突　塗籠　納戸　別納　納屋　土藏　天井　くみれ　局　部屋　切かけ　さゝらこ　垣　鰭板　駒よせ　部屋○（以上自第一頁至第廿四頁）　杉障子　やり戸　左甚五郎　猿戸　狐戸　風戸　衝風　ふんざし　かけがね　かすがひ　釘かくし　狐格子　京格子　江市屋格子　釘貫　忍ひ返し　矢來　もがり　さかもぎ　ふゝがき　放出　めだう　緣がは　入がは　馬頭　ひたの工　めを見する○屋根　卷かや葺　屋形　まくざ　四阿　まや　のし葺　板葺　草葺　こけら　とり葺　瓦葺　組押樽　襲木　檜皮　非繩の事　地葺　とぢふき　蠣殼葺　火の見　屋根番　烏飛　屋根

板　のち　三階作　瓦葺　ぬりたる○（以上自第廿四頁至第四十八頁）
くれそぎ　榑　くれを切　埴生の屋　月役　琵琶の甲　ヤスの郡　こまひ　まわたし
ふたぢ　窓　櫛形の窓　恥かき窓　大和窓　引窓　突上げ窓　虫籠窓　ひしり窓　ふの
べ竹　青瑣　花ざま　日暮し門　廣徳寺の門○（以上自第四十八頁至第五十四頁）
釣殿　泉殿　透廊　千貫樋　能舞　橋殿　さじき　日蔵　ひさし　もや庇　はしかくし
長明か方丈　宗鑑か庵の額　柱かくし　鉋　まかな　錦かんな　正直　もぢ　かなば
し　三妻錐　幕所　御末　中居　臺　御臺所　御厨子　御所　大御所　逆柱○厠　ひと
のはこ　雪隠　後架　婦人小便　圊籌　草紙○（以上自第五十五頁至第六十四頁）
庭　假山　島　心字の池　立石　方位家案山　案山子　山水を作る　鴨會　假山水　野
筋　枯山水　前栽　蒔砂　まさご　いさご　まなご　すなご　島姿の様々　立砂　ふら
す　這入口　林帷　障日花舟　假山　庭石　花石綱　石燈籠　砂利薗　致忠か事　路次
植物　大江佐國　建仁寺垣　草廼　庭守　庭に松葉を散　園林　小庭　家々の名所　八
景　近江八景○（以上自第六十五頁至第八十頁）
卷壹下　容儀
盆山　大湖石　盆景　箱庭　石菖鉢假山　木假山　菊目石　釣ふのぶ　盆石飾事　砂山
鞠子石　備後砂　胡麻砂　鹿背砂　石打と云事　磐山　盆繪　水上砂繪　地上砂繪○（以
上自第八十頁至第八十六頁）

上古のさま　みづら　あげまき　髻華　結髪の詔　文身　黥面　さける利目　文身斷髪
入墨くろ　女子髪あげ　あまそぎ　深そぎ　振分髪　うなゐ　めざし　寶髻　釵子
かぶ　耳はさみ　髪のたわ　髪を洗ふ　髪上と裝着　袴着　元服　髪置　帯ときに橘を
用ゆ　たすきがけ　黒歯　粉　白粉　はらや　おしろいといふと　水銀　辰砂　玉虫
媚薬　眉作ると　黛　ふん　眉に色々の名あり　きは墨　べに　的　頬紅　つめべに
塞べに　齊澤　伽羅の油　花の露　びなんかつら　びんつけ○（以上自第八十六頁至
第百七頁）
かづら　須恵　あびかつら　かつらひげ　かつら捻　おちやない　女子髪をきること
元結　文七元結　はね元結　月代　けつしき　下食日　蚰蜒　鏝子　さかやき　野郎わ
たま　額をぬく　十河額後出　はふがみ額　唐犬びたひ　ハンカウ　半頭　茶筅髪　おつ
がみ　立髪　頬髭　作りひげ　糸髪奴　ひげ奴　ひげまん○（以上自第百八頁至第百廿
一頁）
鎌倉風　ばさら　のけえもん　後えもん　錢持首　慶長風　市女笠　總髪　撫付　散切
喝僧　一束切　だて風　奴　俠士　馬咎　笠咎　鞘當　喧嘩買　六法男達　よしや風
鶺鴒組　大小神祇組　町奴　赤阪奴　男子髪の結ひぶり　はけ　ばちびん　あはせび
ん　ぞべ本多　かき髪　文金風　まき髪　豆本多　下髪　わッち　童子の髪　喝食姿
兒姿　頭髪（カモメット）　鶺鴒やう　折柳　御うちき　髪結床　一錢職　髪結鑑札　婦人の首飾　婦

人髪の結ぶり　御所風　かうがいわげ　角ぐり　兵庫曲　島田曲　やつし島田　ゑめ付
島田　なげ島田　鴎づと　たぼさし　燈籠髪　ゑゆすびん　女髪結　ひたひ付　十河額
前出　きわ墨　片はづし　勝山　丸曲　おさふね　銀杏曲　糸巻　結び髪　わりがらこ
かつくる返し　くし巻　たにしゑやこ　めうと曲　唐人曲　おばこ結　禿　ちごわか
らこ　おとしばら　くるりおとし　髪さし　小枕　かうがい　髪掻　かんさし　耳掻
花かんざし　櫛　彫櫛　螺鈿櫛　さし櫛　政子がた　渡輪の指櫛　玳瑁　玳瑁の櫛　庵
形のさし櫛　菅原櫛　さき笄　鏡　花形　丸鏡　鏡宮椰葉を入る○（以上自第百廿一頁
至第百五十三頁）

巻二上　服飾

古服　紅袴　大口　褶　ゑひら　纐纈　十二單　素襖　闕腋　縫腋　夜着　てんとくじ
　掻巻　上下　肩衣　つぎ上下　麻上下　馬のり袴　胴肩衣　羽織　ぶつさきはふり
短はふり　ひきずりはふり　小袖　衣袖　染小袖　白小袖　はり綿　布子　一ちやうら
　木綿　綿うつ具　絹のうら付袴　法谷綿　裁縫　学をうむ　花むすひ　あはひ結　蜷
結　めなこ結　染物　さいで　紺かき　だゞめ　衣の摸様　針　すくる　まち針　播磨
針　御簾屋針　打殿　張殿　針わざを習　仕立屋　かぎざき　夜なべ　絹布丈尺○（以
上自第百五十三頁至第百七十六頁）

たちつけ　もゝはき　脚半　もゝぬき　もゝ引　立つけ　ばつち　野袴　女の脚半　け
だし　かるさん○ばつち　もゝだち　尻からげ　はしよる　ちんぢはしより　東からげ
　せたからげ○合羽　雨皮　油單　簑　坊主合羽　雨羽織　懐中合羽　女合羽　めりや
す○（以上自第百七十七頁至第百八十四頁）

頭巾　ときん　烏帽子　折頭巾　出頂頭巾　桂包　角頭巾　長頭巾　ともこも頭巾　覆
面頭巾　はあて頭巾　丸頭巾　置き頭巾　ほうらく頭巾　をかざき頭巾　熊坂頭巾　も
つかう頭巾　隠元頭巾　御高祖頭巾　奇特頭巾　氣まゝ頭巾　をくそ頭巾　がんだう頭
巾　山岡頭巾　なげ頭巾　はげが頭巾　風呂敷頭巾　袖頭巾　大明頭巾　きまゝ頭巾
頭巾に作り髭　おもり頭巾　こゑやう頭巾　袋頭巾　宗十郎頭巾○（以上自第百八十五
頁至第百九十二頁）

帽子　ゆぼうし　桂帯　綿を戴く　綿ぼうし種々　手ぼそ　うなき綿　ぼんぼり綿　澤
之丞帽子　瀬川帽子　紫帽子　やでん帽子　船綿帽子　角かくし　覆面　はゝかふり
○（以上自第百九十三頁至百九十七頁）

帯　八ッ割帯　四ッ割帯　鉢の木帯　つけ帯　かゝへ帯　鉛のゑつめ　丹前帯　組帯
名古屋帯　帯の結びやう　前帯　はさみ帯　吉彌結ひ　後帯　畳帯　昼夜帯　鯨帯　ふ
んどし　手網　はだばかま　たぶさき　下帯　ひきれび　彦帯　たふさき　手網　越中
ふんどし　もつこふんどし　早川　湯具　ゆもじ　湯巻　湯帷子　風爐ふどし　下裳○
（以上自第百九十八頁至第二百十一頁）

手拭　掃布　かつら包　三尺手拭　五尺手拭　四尺手拭　鉢まき　たすき　前垂　赤前
たれ○（以上自第二百十二頁至第二百十四頁）

衣服白色の流行　衣服の仕立　紅梅のもみ　袖覆輪　殿中流六方がへり　紋所　二ッ紋
鹿子紋　ぬい紋　そぎ袖　かます袖　鷲袖　つぼ袖　筒ッぽう　衣服流行の染色　織島
八丈　襦袢　胴着　帯　袖口　羽織　短羽織　長羽織○（以上自第二百十五頁至第二百廿頁）
れすび　かくし綿　壺裝束　衣かつぎ　綿帽子　むしのたれ衣　掻取　うちかけ　手覆
足袋　胸の護身　縫箔、ざうがん　縫物の小袖　箔の小袖　石疊小袖　鱗形小袖　地
無小袖　金糸　染色　かき繪小袖　後室もやう　紅染の抱へ帶　摸様の變遷○（以上自
第二百二十一頁至第二百卅頁）

丸盡しの摸様　繪繪　友禪　袋持　うちがひ　うはさしの袋　衣包　風呂敷　すり袋
小袖裏摸様　形木　りん　半領　袖口　そぎえり　錢くび　衣服華美を競ふ　ふのぶの
細薬　僧徒たてなる衣裳　懸香　匂ひ玉　匂袋　誰か袖　指の輪○（以上自第二百卅一
頁至第二百四十二頁）

足袋　襪　無紋の皮　ふすべ皮　熊の皮のもみたび　紫足袋　木綿たび　長崎たび　高
麗ざし　箔繪のたび　染わけたび　うねざし　コハゼがけのたび　ふとざし　略ざし
とろめん足袋　うんさいたび　すきやたび　黄色のたび　桑染のたび　綿足袋　さらさ
の足袋　皮たび○（以上自第二百四十三頁至第二百四十七頁）

履　草履　わらぐつ　爪がけ　草鞋　鼻高　挿鞋　絲鞋　わらぢくひ　こんがう　のり
もの草履　げゝ　こんず　あとつけざうり　むさやわらぢ　足半　尻切　雪踏　鼻緒
毛皮雪踏　げゞ在前　うげぐつ　緒太　爪隱し　裏付ざうり　足駄　ひら足駄　草履げた
ひより下駄　げいし　足駄重出　駒げた　馬げた　江戸塗下駄　瓢の下駄○（以上自第
二百四十七頁至二百五十七頁）

杖　旅杖　かせづゑ　檀木杖　餘情杖　化粧杖　鵜野覆の杖　ころく　與作○（以上自
第二百五十七頁至第二百六十一頁）

笠　闇笠　わしろ笠　つぼね笠　市女笠　綾ね笠　編笠　白打出笠　目せき笠　都富士笠　紙緒　燒印の編笠　熊谷笠　八所綴　編笠沿革
玉縁笠　でん中　つゞら笠　ぬり笠　薦僧笠　小あみ笠　一文字笠　法性寺笠　つゞ
ら笠前出　塗笠前出　紅の付様　菅笠前出　加賀笠　近江笠　紅葉笠　ひでり笠　阿彌陀笠
螺尻笠　桔梗笠　鉦屋笠○傘　大笠　からかさ前出　遊女の傘　雨がさ　日がさ　風流傘
長柄　紅葉がさ　蛇の目傘　青傘　女笠　三度笠　大黒傘　壺屋傘　つんぼ傘　白傘

袋　あさぎの笠袋　日でり笠○（以上自第二百六十二頁至第二百七十五頁）

刀　さすが　さやまき　糸巻の太刀　腰刀　刺刀　脇指の刀　打刀　大小野太刀　目貫
鍔柄　脇指　劔刀　長柄刀　大脇指　金鍔　立鼈柄　だんひら　なゝこ　獅子に牡丹

の金物 くゝみ きんちやう ふいご むでん○(以上自第二百七十五頁至第二百八十三頁)

巾着 縫袋 印籠 薬籠 やろう蓋 荷包 帯くるま 勘清縫 緒じめ とんぼ玉 ボタン 前巾着 浮世巾着 浮世袋 暖簾の耳 屠蘇袋 花袋 歌袋 もみち袋 糠袋 さくら袋 扭ふくさ 財布 守袋 ふうつう 打物 瓢箪根付 千なりびやうたん 鼻紙袋○(以上自第二百八十三頁至第二百九十一頁)

鼻紙 疊紙 小菊 小杉 紙入 鼻紙袋 鼻紙差 ぞんぶり 寸袋 ひきはだ はこせこ 早道○きせる 櫻ばり 水口きせる 烟袋(ラウ) 烟草入 かます烟草入 紙烟草入 繼きせる 合羽のきれたはこ入 さくら張 羊かん 田沼ばり 出世張 今戸張 らう竹○(以上自第二百九十一頁至第二百九十八頁)

扇 かはほり 末廣 中啓 扇の骨の色 櫻扇 山吹扇 ぼんぼり 檜扇 すき扇 えだあふぎ かなめ 一束一本 おゆら扇 由禪扇 烏繪扇 扇懸け 團扇 奈良うちは 判じもの團扇 溢團扇 團扇形 網代團扇 塗うちは○(以上自第二百九十八頁至第三百六頁)

楊枝 竹のやうじ 黒もじ かんぼく 白楊 ほやうじ 打やうじ ふさやうじ 平やうじ 皮付やうじ 爪やうじ 浮世やうじ 紋楊枝 そぎやうじ 楊枝さし 楊枝に靈 わりと云ふ事 かるた楊じ みがき砂 歯取唐人○(以上自第三百六頁至第三百十一頁)

枕 藤枕 茶わんの枕 括り枕 皮枕 入子枕 箱枕 夢想枕 塚枕○(以上自第三百十一頁至第三百十二頁)

卷二下 器用

舟 飛舟 舩の名 ふなたま あたけ丸 物の鳴こと 船吟 高瀬舟 をふね はしふね 平田舟 屋形舟 檜垣舟 はがせそ いさば 押廻し ぞんぐり舟 過書船 てんとう舟 けんさき 二挺立 三挺立 ちよき舟 窮屈丸 きり〳〵す やね舟 へか舟 舩の法度 屋形舟の員數 ちよろ 小早 茶船 にたり舟 競渡船 馬ふね 酒ふね 舟形手水鉢○(以上自第三百十三頁至第三百廿五頁)

車 馬車 牛車 車にゐる事 むな車 力車 溜車 車借 大八車 八葉の車 七葉の車 車長持 巻車 シヤチ 修羅 地車 へカ車○輿 輿舁 三枚肩 さしになひ 牛かひ童 白輿 力者 肩輿 網代 塵取 あんた 織部 駕籠 簀輿 山籠 四ツ手 おんぼう 竹輿 六尺 辻かご かご制禁 町駕籠員數○(以上自第三百二十六頁至第三百廿六頁)

挾竹 挾箱 辨當筥 信玄辨當 面桶 片口 長櫃 中持○樽 天野樽 人形樽 角樽 柳樽 わりご 樽破子 破子さゝべ さゝ折 頓食 さけ重 さげ食籠 重箱 折櫃 箱のふたに物を盛 餌袋 硯蓋 あさき椀 三方 衝重 四方 縁高八寸 かけばん 高坏 蝶足の膳 花足 ふご 定器 合子 引入合子 大海 内海 外

居 食籠 七ツ椀 朱漆合子 垸飯 今の飯器 金鋺 壺皿 平皿 腰高 坊主椀
○(以上自第三百廿六頁至第三百五十一頁)
さら さはり づず ちやつ ちよく へいから 手鹽 黒椀 朱器 白子合子 山折
敷 根來朱 薩摩椀 燕口 朽木の膳具 木具 金箔押の木具○(以上自第三百五十一
頁至第三百五十四頁)
陶器 瓷 茶椀 秘色 柴窯 青磁 定窯 汝窯 官窯 哥窯 龍泉窯 磁器のふくり
ん 陶器年號 饒州景徳鎮 古窯 陶器に釉水をかく 點茶ハ黒樂焼を用 建盞 天目
窯變 水滴 油滴 手瓶 臺付 南京焼 瀬戸物 藤四郎俊慶 常滑帶 祖母懐 尾
張焼 三田青磁 祥瑞 呉洲手○(以上自第三百五十四頁至第三百六十五頁)
櫨茶 古高麗 三島手 斗々屋 御本手 いらほ 井戸手焼 樂焼 萩焼 御室焼 の
んこ 玉水やき 伊末里○(以上自第三百六十五頁至第三百六十九頁)
古董 藏まはり 取賣 掘出し 法華釜 あみだ堂 ことく 土風爐 備前焼 大食窯
七寶焼 存星の盆 ちんき 剝金 沈金彫 堆朱 西皮 グリ 金絲 桂漿 キンマ
螺鈿 桔梗皿 はりぎ 十錦 瓷器を湯でゝ用 やき續○(以上自第三百六十九頁至
第三百七十六頁)
表褙 へり 巻たし 風帶 表具師 經師屋 手鑑 小倉の色紙 紙繪 書畫の七厄
黄金鷄 古錦 ツヾレ錦 撰糸絹 金紗 焼切 泊瀬の戸帳 島ちりめん 機留島 奥
島○(以上自第三百七十七頁至第三百八十三頁)
金銀 古錢 永樂錢 錢に年號を載る事 びた錢 闘化蝶 六條錢 福一玉 鳩の目
古錢減少 唐錢の多き事○(以上自第三百八十三頁至第三百八十七頁)

巻三 書畫

書 ふるひ筆 早書 蚯蚓がき はしり書 ちらし書 はなち書 おひつき書 艶書
たてぶみ 包み文 引墨〆 むすひ文 封文 捻文 禮紙 表巻 式の立文 玉づさ
息り文 懸紙 宣旨がき うちむかひ文 案じ文 口狀がき 筆たて 文章の長短 遊
女が文 封印 封じ目に印判を押 綴付 ちらし書前出 返し書 封筒 てづゝ 口づ
ゝ 文字魚蟲の體 籠字○草手 歌繪 笹の葉がき 藤の花書 つのゝ書 畫かき 花
むすひ こよりの文字 へマムシヨ入道 文字書 木筆 米粒の書畫 油畫 鞘書 浮
書 寫眞鏡 すみ繪 白繪 泥繪 金砂子 霞 源氏雲 すなかし 散し物 一筆がき
嗚呼繪 鳥羽繪 櫨木に羽 牧童騎牛の圖 カブラの圖 一畫付 より合書 わくゑ
墨だふれ ばさら繪 男繪 女繪 笑ひゑ れそくづの繪 枕草紙 笑 まくら繪
春畫 古陵の石人 角先生 大津繪 化物繪 淨土畫雙六 浮世繪 名人とも やまと
繪 ひし川 江戸繪 勝川流 歌川流 一枚繪 紅粉繪 漆繪 錦繪 彩色摺 丹繪
繪雙紙 巻雙紙 草雙紙 鼠の雙紙 ゑらみ本 草紙沿革 八文字屋雙紙 役者評判記
共頓か傳 大佛餅 自笑が事 役者似顔 東錦繪 似せ繪 繪解 繪解比丘尼○(以

上自第三百八十八頁至第四百十五頁）
水上の書書　白字　水を吹て字をかく　墨流し　ふやぼん　水圏戯　扳暈　焼繪　あふり出し　寫不上者有法　石筆○（以上自第四百十六頁至第四百十八頁）
詩歌
ねんふたき　へんつき　文字合　本朝詩賦の始　聯句　聯詩　漢和聯句　狂詩　漢和聯句　和漢聯句　假字の詩　チクラ　詩を集てけい物を出す○連歌　宗匠　花下　連歌賭物　紹巴宗匠にならす　古今傳授　奈良傳授　道印幸順　基佐　柿本の衆　栗本の衆　詩歌の代作　後世よき付句なき事　移徙の連歌　露の字を質に置　古歌を覺えし事　江戸正月の連歌　連歌會　裏白の連歌○（以上自第四百十九頁至第四百卅二頁）
俳諧　法式　俳諧沿革　四ツ手附　噂附　取なし附　談林風　江戸談林始る　桃青が文伊丹風　付句　其角か說　一巡の事　古式　點法　永點　つまとるし　長點　正風体不易　流行　座敷乞食　天狗俳諧　前句付　冠付　笠付　三笠付　褒美前句付　地口付　もじり　段々付　謎付　物は付
（以上自第四百卅三頁至第四百四十五頁）
狂歌　懷劔　懷句　俳諧歌　有心　無心　狂歌者流の花押　社中を何側と云と○（以上自第四百四十五頁至第四百五十頁）
秀句　かすり　口合　地口付　字もじり　本もじり　段々附　語略萬句　もじり　五文字　文字ぐさり　廻文の詩　尻とり　南京流○謎　古き謎　人名の謎　字謎　謎付○判じ物　器物の銘の判じ物　衣服摸樣の判じ物　扇團扇の判じ物　盛岡のめくら暦　看板判じ物種々　大小判じ物　杜かくし　發句の判じ物　願人坊の判じ物○（以上自第四百五十頁至第四百六十二頁）
卷四上　武事
犬追物　牛追物　三十三間堂通し矢　ちやうまへ　めつた的　水嚢投　畠水練　つぶてはじき石　石打禁制　印地　印地錦　ちやうま　馬殺し　せめ馬　馬場　櫻馬場　馬喰町の馬場　曲馬　碁盤乘　鬼かげ　的顏　やぢ馬　木馬　打毬　居合　やはら　柔氣棒の手　金さい棒　鹿島香取の兵法　とつたり　武者修行　長柄刀　かぎ鎗　亂破戰船を海賊と云事　弓取　鎗取　道具　七ツ道具　千人ぎり　鵜丸の太刀　劒術の師を和尚といふ　兵法の手　眞妙劒　悪聲　斜に構る　生兵法　逃る手○（以上自第四百六十二頁至第四百八十二頁）
相撲　相撲節會　最手　占手　助手　相撲長　立合　日本一　童相撲　勘進相撲　京都勘進相撲　江戸勘進相撲　大坂勘進相撲　關　脇　小結　裏關　江戸にて興行　相撲故實　相撲行司　相撲の手　大家に扶持せらるゝ事　かたや　褌　まはし　シコ名　力紙　力水　櫛　假粧　髪の結ぶり　大なでわげ　半かう前　おてつ　四ツ辻　みつひ　前つけ　行司の出立　われ相撲　與行日數　大漢　大なる者を馬と云事　大太ホッチ　大

女 小男 侏儒 辻相撲 獨り相撲 座頭相撲 女相撲○(以上自第四百八十二頁至第四百九十九頁)

こぶし打 腕おし 首引 すねおし 指はじき まつぺい 枕引 扇てんがう 扇引 扇切 網引○(以上自第四百九十九頁至第五百一頁)

卷四下 雜伎

續松 歌かるた 貝覆 歌貝 繪貝 文字札 貝合 貝盡 やくかひ 小弓 雀小弓 楊弓 ほうかた きり穴 吹矢 からくり的 滅多的 水雀投 投壺 うち矢 はま弓 繩廻し はまなげ○(以上自第五百一頁至第五百十一頁)

雙六 名目 盤の寸法 さいすり てうばみ 七半 ちよぼ一 四一半 目勝 樗蒲 おりは 下貼 むだ口 佛法双六 名目双六 繪双六 淨土双六 永沈双六 道中双六 おでゝこ双六 官位双六 むさし 十六むさし ニッサ 八道行成 八道 六道○碁 まけわざ 白黒の位 聖目 結さす まてう てなほり 持 手みきん 大家の人功 手稀也 乱碁 とり碁 ひろひ物 まゝこ立 虎の子渡し○(以上自第五百十二頁至第五百廿四頁)

象棋 大將棊 王と玉 香車をやりと云事 番所象棋 桂馬の高わがり 廣象棊 中將棊 七國將棊 廣象棋 前出 はさみ象棋 とひ象棋 によんにょ 將棊たふし 廻り將棊 盜み將棋 彈き將棋 彈碁○藏鈎 なご 擊蕨射字 目付繪○(以上自第五百二十四頁至第五百廿二頁)

帶引 福引 寶引 辻寶引 さゞさい お花ごま 八方ごま 穴一 すぼ引 かんきり からよせ けし ばうそう どうもいち 意錢 攤 紙の賭 はり打 なめかた もぢかへし もきめつき こまようろ ぬんから 琢釘戲 しく○(以上自第五百廿二頁至第五百四十頁)

打毬 蹴鞠 鞠のかゝりに植る木 外郎曲鞠 まり 圓社 手鞠 一二 手鞠唄 立鞠 鞠をつく 糸屋の娘 七ツ小女郎 くけべに○(以上自第五百四十頁至第五百四十六頁)

弄玉 おな玉つかひ あやをつく 放下僧 やふれ僧 小切子 あや織 刀子だま おな玉 呪師 輪蹴 豆藏 手煉の事種々○(以上自第五百四十六頁至第五百五十二頁)

掷倒 でんぐり返り 蜻蛉返り 宙返り 車返り 蹴筋斗 杉立 もどりうつ 猿返り 板落 枕の曲 枕踊 枕返し 扇の曲○(以上自第五百五十三頁至第五百五十四頁)

卷五上 宴會

宴 とりこな舞 設樂擊 排遊 おだら傳 執轉提 おでのたをさ おたらなし 梅花宴 花宴 蓮葉宴 萩花宴 菊宴 吹花節 曲水宴 竟宴 尚齒會 同甲會 短册切會 褒貶和歌會 百ふく茶 惺窩講筵式 無禮講 隨意講 汁講 書誌會 椀飯 わうばんふるまひ 厨膳○(以上自第五百五十五頁至第五百六十四頁)

日光責 強飯 天神講 大師講 伊勢代々講 大麻を配る事 ぬけ參り 無情講 身う

け講　無盡講○(以上自第五百六十五頁至第五百六十八頁)

歌舞

神樂　大角小角　わさをき　力士儛　樂府　久米舞　田舞　田樂　田樂法師　能と云こと　新座本座　五節の舞　小田樂　大田樂　びんさゝら　中門口　品玉　白拍子　男舞　曲舞まひ　大頭　幸若　猿樂　散樂　能　謠曲作者　四座　三座　江戸勸進能　大藏狂言師　鷺のこと　鷺舞　大醋　アラヽギ舞　延年舞　踏歌　千秋萬歳　三河萬歳　早歌　烏追　春駒　やたよめ○(以上自第五百六十九頁至第五百九十三頁)

をどり　ひんたの踊　盆をどり　小町踊　かげ踊　中踊　灯籠踊　花園踊　題目踊　念佛踊　泡齋念佛　葛西念佛　鹿島踊　舞々　正月さし　伊勢踊　千代の松坂　岡崎踊　壬生狂言　柴垣　雀をどり　手拍子○(以上自第五百九十四頁至第六百四頁)

卷五下　歌舞

歌舞伎　名護屋山三郎　傳助が糸より　お國歌舞伎江戸に行はる　よし原町　若衆かぶき　よしはら町歌舞伎　中橋に芝居興行　禰宜町　女形かぶき　海道下り　芝居由緒書

內證道　茶屋　芝居土藏作　三階作り　三ヶ津芝居の始　桐長桐　歌舞伎事始　野郎はうし　芝居衣裳　宮地芝居　役者わきあり　居所の制限　昔江戸に女形稀也　はめ詞　獨り狂言　若衆能　似せ野郎　狂言作者　つらみせ　河原者　瓦舍衆伎○(以上自第六百五頁至第六百二十四頁)

男舞　女舞　座元名代　やゝこ踊　仕形踊　をどり子　町藝者　舞子　簀はらひ　巫子物眞似　聲色○(以上自第六百二十四頁至第六百二十九頁)

にはか　茶番　吉原のにはか　座敷茶番　素人狂言　順の舞　かぼちや踊　ふやみこをどり　なれこまひ　御寄講　猿若　鳥追　女大夫　さゝら踊　とり追やぐら　大黑舞

春駒　獅子舞　大神樂　代神樂　越後獅子　角兵衛獅子○(以上自第六百二十九頁至第六百四十頁)

蛛舞・都盧　ちやるめら　ちやらはこ　輕業　緒小桶　幻術　れんとび　輪ぬけ　水がらくり　人馬　十二座神樂　神事舞○(以上自第六百四十一頁至第六百四十五頁)

卷六上　音曲

管絃　琴　靑葉笛　山路が笛　箏　筑紫琴　八橋一流　組歌　こと爪　假甲　爪ひき○三線　阮咸　月琴　二絃　四絃　五絃　三絃の渡り始　小弓　琉球組　古近江家譜慕碣

三絃六筋かけ　八筋かけ　古製　續ざほ○(以上自第一頁至第十七頁)

催馬樂　風俗　郢歌　宴曲　今樣　小歌　ららさい　長唄　隆達なけぶし　一上り一下り調子　なげぶし　さゝんざ　まばがき踊　ほそり　口說　加賀節　めりやす　めりかりめりはり　土手ぶし　大盡舞　半太夫ぶし　かぢるといふ事　なげぶし再出　よし

の山　小倉踊　川崎音頭　問の山　伊勢音頭○(以上自第十七頁至二十九頁)
琵琶法師　平家物語　琵琶法師参院の事　地神経よみ　くわうじん　天夜の尊　名字の最初　筑紫方　八坂方　坂東方　総撿挍　紫衣勅許　八坂方再出　綱引　漕入　涼の塔
雨夜の城了　城字都字のこと　城を一と訓しと　盲女　でせ　陶眞　按摩　腹とり按摩とり笛をふく　足力○(以上自第二十九頁至第三十七頁)
薦僧　暮露　馬ひしり　こも僧尺八を吹事　普化禪師　尺八　一節截　俠客尺八を吹名ある人々　こも僧の体古今異なり　鼓弓　らへいか　提琴　胡琴　四ッ竹　歌板　木琴　磬　甌　オルゴル　風樂　おやぎり　護花鈴　鳥おとし　風鈴　音律の妙　調子を聞て占ふ　鸚鵡石　讐石　山びこ　鸚鵡が辻○(以上自第三十七頁至第五十頁)
八人藝　三絃曲びき　八撥　羯鼓　八からかね　寒聲○(以上自第五十頁至第五十四頁)
説經　淨るり　鉢扣の歌　歌念佛　歌説經　かるかや　祭文　歌祭文　江戸祭文　門説經　仙臺淨るり　門だんぎ　色祭文○(以上自第五十五頁至第六十五頁)
淨瑠璃　薩摩　淡路　左内　宮内　喜太夫　虎や　女太夫　とさ淨るり　土佐外記　薩摩外記　こすいでん　小ざつま　大ざつま　語齋　半太夫節　河東ぶし　十寸見堂　角太夫　都一仲　岡本文弥　阿波太夫　宮古路　竹本　豊後節　常磐津文字太夫　富本新内　鶴賀　岡本　宮尚　義太夫淨るりの始　宇治嘉太夫　竹本義太夫　豊竹若太夫豊竹肥前○おやつり　小平太　操道具　石井飛驒　でこのぼう　だうこのぼう　おやま人形　淨るり座看板の圖　のろま人形　そろま　むきま　出つかひ辰松　淨瑠璃作者近松門左衛門　井原西鶴○(以上自第六十六頁至第八十五頁)
南京あやつり　雨かへる　南京と云事　からくり人形　せんまいと云事　彌三五郎　竹田　覗きからくり　硝子を作る事　獨狂言　樽人形　笠人形　與次郎人形　掌盤人形　七變化○(以上自第八十六頁至第九十三頁)

巻六下

猿戯　わは〳〵　かふ〳〵　ほうしご　鹽のめ　れろ〳〵　べろ〳〵　ねん〳〵　ていとい　隠れ遊　かくれんぼ　目かくし　めなしぞち　いちくたちく　捉迷藏　芥かくし　草履隠し　鬼ごと　子をとろ子とろ　小路がくれ　鼠まひ　耳ひき　指きり　ちんもんがら　竹馬　高足　馬貝の戯　鳩車　べかゝうま　がでし　むくりこくり　せゝがかう　皿屋敷　てんがう　うぶめ　もゝが○(以上自第九十四頁至第百四頁)
目くらべ　耳引かけ　ふつぺい　かけくら　すみたゝれ　紙つけ合　アリヤリヤンリウ
馬のり　はい馬　肩くるま　手車　道中駕籠　うなぎの瀬登り　芋虫ころ〳〵　ひやうたんぼつくりこ　鬼の留守に洗濯　目じろれし　つばな抜　手にて豆を作る事　爪をくふ　わやく　ヤニチヤだゝ○(以上自第百五頁至第百十一頁)
卯槌　またぶり　卯杖　剛卯　打毬　毬杖　ぶり〳〵　玉振々　きつちやう　玉をきる

飾り花　さつきの玉　薬玉　茱萸　十二月かけ物　菖蒲冑　菖蒲縵　削りかけの冑、
菖蒲刀　冑人形　ちまき馬　小兒山伏の學ひ○(以上自第百十二頁至第百二十三頁)
羽子板　こきのこ　内裏羽子板　京羽子板　つくはね　蹋鞠○(以上自第百廿四頁至第百廿五頁)
あまがつ　あからこ　人かた流すこと　はふこ　犬張子　犬の子　額に犬字書くこと
ひゝな　ひゝなの家ね　まゝごと　雛祭　雛流し　雛の調度　繪櫃　ちぎびつ　あまざけ　白酒　生姜市　飯鮨　後の雛　紙雛　裝束雛　江戸雛　土燒の雛　奈良人形　衣裝人形　押繪　子なき女の人形を愛すること　さゝやかなるもの○(以上自第百廿五頁至第百三十八頁)
獨樂　はかた狛　ぶせうごま　ばいごま　ぢたんばう　たうごま　はんとうごま　坊主ごま　木ばちまはし　いかのぼり　たこ　からすだこ　うなり　つるはかし　硝子よまはし　切ぬき凧　からくり凧　鞦韆　臼杵　ツクマイ　いしなぐり　きさご大小　ふたゝみはじき　きさごはぢきのツマとヤツ○(以上自第百三十八頁至第百四十九頁)
ぢう〳〵めぐり　一の膳いや〳〵　まはりまはりの小佛　ぼうず〳〵　千艘萬艘　ハイロン　かみかたかれ　かたこ　いたいけ　てうらかす　ふりもちつく　のゝさま　おつきさまいくつ十三七ツ　尼が紅　おまんが紅　あま　木のぼり　ひなたぼこり　土なぶり　砂あそび　小家を作る　稽廻し○(以上自第百四十九頁至第百五十七頁)

雪の山　ゆき佛　雪ころばし　雪灯籠　雪やけ　雪女　雪こんこ　雪打　寒垢離　寒氷
氷をたゝく戲　小兒翫物字の事　こゝろ〳〵　无木簪　げへ　竹かへし　つき　ふりつゞみ　はりつゞみ○(以上自第百五十八頁至第百六十五頁)
おきあがりこぼし　ふんだん　紙えばし　ひたひ紙　合點首　錢太鼓　唐人笛　豆太鼓
風車　張子　笛　獅子笛　鶯笛　猿松笛　ひばり笛　笙の笛　むぎ笛　ぽんぴんぽこん〳〵　猿　彈き猿　幟さる　釣する猿　つながり猿　水挽さる　米搗さる　桃核の猿　蜜柑の猿　松笠の鳥　茗荷の鶴　折形の蛙　折居の鳥　紙捻の犬　鋏切形○(以上自第百六十五頁至第百七十四頁)
假面　めんかた　般若面　尉の面　乙御前の面　天狗の面　ふは吹　芥子人形　今戸燒の小人形　相撲人形　輕業人形　てんぼ　土の西行　土燒の鉢　塵眼羅　七夕の短冊　繪のぼり　頭巾すゞかけ　つけぎの燕　とんぼ　蝶々　小鍋　箔の團扇　ほゝづき挑灯　麥わらの蛔　唐團扇　霞の穗鳥獸　つぼ〳〵○(以上自第百七十四頁至第百八十三頁)
削り花　餅花　栗花かやの穗にて馬猿なぞ作る　作り花　五色綱　はぜの花　はぜえんぎの金　箔おきの金　一文長刀　浮鳥　浮人形　酒中花　紙でつばう　豆でつばう　虫目鏡　竹の吊瓶　ふくら雀　雀の笛　與二郎人形　笠の上に人形を置て舞す○(以上自第百八十三頁至第百八十八頁)

人形筆 湯本細工 ひきもの 手車 錢ごま きやこん びやぼん 猩々小僧 鯛釣
おやふや人形 かはり屏風 芋虫 ほうづき 江戸ほうづき 丹波ほうづき 海ほうづ
き 草の葉を鳴す 葱を吹 眞菰の馬 篠船 松葉の鉾 ちやわんの尻を掌に付る事
瓜ざし 核桃 ほぞち 豆奴 菓物燈籠〇(以上自第百八十八頁至第百九十五頁)

卷七 行遊

行遊 手向 鹿島立 坂迎 松と胡桃 ぬさ袋 旅籠 百はたご 伊勢參 三寶荒神
二方荒神 ふまさん紺さん お杉お玉 びつき 歌枕 遊山 花見 錦織炮 花見小袖
衣裳幕 知恩院八坂 上野の繁昌 飛鳥山 日暮里 向島 馥賛はり 名所 上野山
隅田川 淺草川 目黑 曹司谷 王子 護國寺 深川洲崎 佃島 報恩寺 坊主もち
八景〇(以上自第百九十六頁至第二百八百八頁)

納涼 糺 茶屋 糺の涼 四條の涼 屋形船 船遊 大屋形船の始 をどり船 花火船
船賃 御座舟 扇流 杯ながし 水練 水掛あひ 水馬 浮沓 うろ〳〵舟 くらは
んか舟 つきつけ賣 垢離 大山詣 富士詣 千垢離 富士嶺登り初め 富士の高さ
禪定 身祿がこと 山上日出 氷 駒込富士 新富士〇(以上自第二百八頁至第二百二
十四頁)

順禮 三十三番觀音順禮 おひずる 西國順禮 六十六部 遊行上人 廻國順禮 四國
廻り 廿四輩 廿五ヶ所の靈場 七福參り 六阿彌陀詣 千社參り 百塔 百寺參り

新高野 三塔順禮 百度 千社參再出 物詣の落書 手ちやうらく 居所の柱に歌を書
〇(以上自第二百二十五頁至第二百三十頁)

祭祀佛會

祭會 御師 御祓一萬度 日待 庚申 三猿 呪歌 七猿 甲子待 大黑天 三面大黑
橋板 夷子講〇(以上自第二百三十一頁至第二百三十六頁)

賀茂祭 飾り車 祇園祭 山鉾 大嘗會標 无骨村 あはう鉾 江戸山王御祭禮 神田
明神祭禮 祭りの露拂 ほろ 屋臺 傘鉾 神田事能 祭禮番組 拍子 鎌倉拍子
品川拍子 だし 臺尻 氏子 根津權現祭禮 寶永祭 練り物 秋葉祭 風流 放免附
物 ふりうの面 細男 祭日異體 阿波大杉 魁星 文昌星〇(以上自第二百三十七頁
至第二百五十五頁)

三十年開龕 開帳の奉納作り物 嵯峨釋迦 善光寺如來 本多善光 秘佛 今出川藥師
目黑不動 梅若像 本尊流落開帳のぼり 善の綱 散米 くま
はなしね 打蒔 さんぐ 散錢 賽錢 初穗 十二銅 つゝお米 緣日 朝觀音夕藥師
寅藥師 そゝり觀音色藥師 聖天 うそ替 陽物を祭ると〇(以上自第二百五十四頁
至第二百六十六頁)

卷八 慶賀忌諱

忌諱 五月忌 正五九月に婚姻を忌む事 三齋月 六齋日 掃こと を忌事 俵子 鼠う

ち 春の始の祝と 新宅い三年嫁を掃はす すゝはきの壽 胴あげ 福い内 厄落 厄拂 やあら〳〵 東方朔 門戸を扣事 つとに入 初夢 寶船 廻文の歌 獏 夢ちがひ

獏の札 獏枕 虎枕 唐の頭 虎の頭 犬はりこ 染物を忌む事 懸想文 若夷賣 名詮種々 移徙粥 粥杖 嘉定 嘉定錢 嘉定喰 八朔の賀 物忌 齋宮の忌詞 米をふね又よねと云ふ 梨子をありの實と云ふ くる〳〵 こしき袋 人の母を御袋と云ふ 事 夷子紙 夷子膳 硯の水に我影をうつさず 硯に物書く事 福と云ふと 福わけ 移り紙 としの實 灸の忌日○(以上自第二百六十七頁至第二百八十九頁)

方術

嚏の頌 小兒衣の守り とく萬歳 くそをくらへ 鼻に紙捻を入る わくびのうつる事 休息の字 呪の師 厠にて郭公を聞く 芋畑にて杜鵑を聞 がんばり入道 水祝 水懸振舞 師走油い火にたいる わる檀 事始 事納 すゝ拂ひ 節分に籠を戸外に出す 虫除 虎の字 小兒の退齒 ふひれの呪ひ 疫神を送る 風神送り 送疫鬼 鍾馗の畫 照々法師 蚊帳に雇金 蚊の呪 蚊屋 そきのこ 門戸に蟹殻又蒜を掛くる事 時ならぬ正月 こま犬の足を括る 盜賊の呪に手洗を伏す 猫の逃たる呪 臼の目切 鰹によはさる方 藥 祈禱 釜鳴 壺口禁忌○(以上自第二百九十頁至第三百七頁)

口寄 ものゝけ より人 寄絃 神より板○巫女 縣巫女 いちこ 外法頭 うしろ佛 狐つかひ 茶吉尼天 飯綱 五通 こだま 髪きり 牛馬を呑む 婆々狐 狐の書畫 金靈 箕仙 犬神 蛇神 すいかつら○(以上自第三百七頁至第三百十五頁)

闇籤 闕帝籤 盃珓 辻占 足占 橋占 口占 鏡聽 響ト 街ト 石ト うらやさん 算おき 賣卜者の体 起課 ありまさ 疊さん 灰ト 虎ト 投ざん 歌占 卷ト

夢合 夢解 胸に手を置て寢る 夜い夢物語をせぬもの 一富士二鷹三茄子 貧乏閑なし 御祓くし 觀音くし 九姑玄女課 無盡籤の呪 五百羅漢の顔にて占ふ事 仕かけ山伏人を迷はす○(以上自第三百十六頁至第三百二十六頁)

卷九上 娼妓

吉原の起源 元吉原の再興 鈴の森 大夫 格子の君 はし 局 大夫の名目 散茶五寸局 三寸局 うめ茶 風呂屋もの ギウ ちらし お茶を挽く 吉原の町々 鉄炮けんどん 傾城風俗 切賣 女郎の風俗 二人禿 遊女櫛をさすと すわし 内八文字 大夫の絕る事 遊女の道中 燈籠の始 櫻を植る事 俄狂言 遊女の數 昔の太夫とられんぼう べらぼう とりんぼ ぞめき衆 兎の御の字 前わたり やきて だてのうすぎ 三枚袷 花をやる 紙はな 花に色々 揚屋さし紙 揚屋紙 やりて 花車 ぎう 再出 素見 ぞめき そゝり 冷かし 油むし きんちやきん十郎 おひやる おいらん 丹前 丹前風 勝山 奴風けんさま 新五左 遊女の詞 きやんといふ事 おいらん事 あみ笠茶屋 土手の馬 附馬 町駕籠の制限 吉原駕ご○(以上第自三百二十七頁至第三百四十八頁)

温泉 湯あみ 板ふろ むし風呂 伊勢風呂 柘榴風呂 風呂吹 水風呂 錢湯 湯舟
薬湯 ふはふろ 竈風呂 湯女風呂 猿 壹三 女藝者 太鼓女郎 永代嶋 かくし
よね 處々の茶屋者 女の牛鬼 比丘尼 まるた 鞠進比丘尼 賣比丘尼 めし盛女
踊子 かこひもの ころひ藝者 いろは茶屋 蹴ころはし 遊所 綿つみ 地ごく 町
藝者 はをり藝者 百藏 さけ重 山猫 惣嫁 船まんぢう 筒もたせ 呼出し藝者
深川新地〇(以上自第三百四十九頁至第三百六十四頁)

巻九下 娼妓

うかれめ あそび 遊女傘をさす 子夫 古へ遊女招かさるに押して來る 遊女
人を撰ひて逢ふ 町賣 遊女乘物にのる事 島原起源 おろせ 島原人形みせ 繕 忘
八、傾城町賣 夜みせ おとり場 燈籠幷作り物 遊女の異名 太夫 三八 天神 か
こひ きんご 半夜 端局 暖簾 廊中昔のさま 遊女伽羅を燒し事 金看板伽羅の
男 衣服 若衆女郎 うき世詞種々 すい ぐわち ぬめる ふやら わざくれ のさ
はる 大鼓もち ぞらうつ 一日買 大門をうつ事 紀文の事 桶ふせ 朝込 壺入
入ぼくろ〇(以上自第三百六十五頁至第三百八十三頁)

傀儡 日本國中遊女町目錄 祇園町 八坂 石垣町 こつぼり 所々の新地 藤森稻荷
の茶屋 伏見の槌木町 柳町 柴屋町 大坂新町 瓢箪町 佐渡島町 越後町 揚屋町
夕霧 阿波の大盡 山本與次兵衛 椀久豆蒔 瓢箪かしく 椀久墓 新町遊女の數 大

坂中茶屋(脂粉錢) 樂戸 地獄 噂物 月掛 掠もの 蓮葉 籠はらひ 比丘尼ふ
ね さうか再出 夜たか たちぎみ つじぎみ〇(以上自第三百八十四頁至第三百九十七
頁)

男寵 若氣 にやけ すはり 阿釜と云事 田樂猿樂の少人 かげま かげ子 かけら
う 若衆齒を染る事 小草履取 香具賣 小草履取再出 草履取禁制 渡り小性 かげま
看板 飛子 新部子 野郎 江戸かげま茶屋 舞臺子 色子 男風すたりし事 金剛〇
(以上自第三百九十八頁至第四百五頁)

言語

詞に古今雅俗の異あり さゝゑん まちかね こがらし うぐひす 鰯をむらさきと云
事 こず〳〵 來々 ふらぢ たち木に水かね けちないなりでとりねがない きそん
十七寅の年 らつひらんくわい すつぱのかは ちよひ〳〵 あつちや〳〵 やんや
日本一 天下一 三國一 門前一 よござりましやう もさ 奴詞 致ます御座ります
やつがれ ちんぷんかん ふこたま つがもなき てんこちもない まん
ざら 十方もない てつぽう ふがいなし 逆こと葉 大原のざこね 入間詞 ぐりは
ま ありや〳〵 一字はさみ ちよろまかす やくしの前地藏の後 ぢゝむさい〇諺
御茶が湧 咽が乾 へらぬ口 あぐむ 喉過れバあつきわするゝ ほうろく千につち一
座頭のよばひ 鍋尻やく 與吉が女房 古今の諺 圖はづれ みしやれかつたい お

茶あがれ　耳たぶによる　若いがきやく　さばほん　あんぼんたん　おや玉○近來流行詞　やくざ　べらぼう　ゑみたれ　江戸の流行詞　すべた　ふてふ　やけのやんぱち　わんぱく　なんかん　きいた風　耳こすり　あてこすり○（以上自第四百六頁至第四百二十五頁）

講釋師　辻談義　太平記よみ　軍談の双紙　辻講釋○咄　巡物語　利口物語　百物語　ぢいばゝの物語　猿の尻　狸の火傷の咄　瓜姫の咄　幼あそびの話　釣駱駝　桃太郎　鬼か島　隠れ簑　隠れ笠　舌きり雀　酒顛童子　羅城門鬼　花咲せ爺　落し咄　お月様いくつ　咄に名ある者　野間藤六　伴内　曾呂利　藤六に同名の者　スッパ　ラッパ　安樂庵策傳　露五郎兵衛　鹿野武左衛門　休慶　小左衛門四郎齋　露休　彦八　おどり萬歳　志道軒　講釋師再出　穢銀杏　はなし家　豆藏　口づゝ　寄せ　盤のはなし　心學○（以上自第四百二十六頁至第四百四十頁）

卷十上　飲食

飯　毫　ひめ　飲食節用　昔武家にて晝飯を食ふとなし　幾本立　七五三　菜　汁かけ飯　龜足　別足　大臣大饗　物の食やう　宍　四足類料理　獸肉　すゝ魚　包み燒　昆布卷　肉菜にならひて作る精進物　雉子やき　狸汁　鳴燒　糟鷄　壺燒　筍干さく〳〵汁　いとこ煮　おこと汁　ムシツ講　むしつ汁　ことづて汁　ばくち汁　筏鮨　和雜鮨　かざうなます　うづら汁　あをがち　かせちあへ　かぶやうなます　酢むつかり　すみづかり○わさびおろしの異制　稻荷祭供　がり〳〵おろし○（以上自第四百四十一頁至第四百五十四頁）

後段　魚羹　點心　引菓子　飯の湯　鬼毒味　昔い寺々一食なり　非時　事　食前方丈　かよひ　香の物　奈良漬　澤庵漬　ふくらに　すつぽう　櫻煮　駿河煮　うどん豆腐　茶碗蒸　杉燒　かまぼこ　竹輪かまぼこ　板かまぼこ　下踏と燒みそ　はんぺい　鬼みそ　天笠ひしほ　宇治丸　鰻　なまづ　すんぼん　團魚○料理茶屋　女の料理人　江戸料理茶屋　奈良茶　けんどん　百膳　淡雪豆腐　十二文茶漬○（以上自第四百五十五頁至第四百六十三頁）

田樂　菜飯　麥縄　冷麥　熱麥　入麺　庖丁汁　烹雜　雜煮餅　雜炊　蕎麥　蕎麥切　そばがき　むしそば切　けんどん再出　大名けんどん　提重　忍ひけんどん　うどん桶伊吹蕎麥　温飩　鷄卵うどん　温飩に梅干を添る　二八蕎麥　夜鷹蕎麥　風鈴蕎麥　ふつぱく　夜の煮賣　手打蕎麥　葛西太郎　夷宮　道光庵　むさしや　麥斗庵○（以上自第四百六十四頁至第四百七十一頁）

あすか味噌　法論味噌　濱名納豆　ざせん納豆　冬瓜のきり賣　鰹節を削て賣る　煮染豆　坐禪豆　寺納豆　一休納豆　金山寺みそ　鬼みそ再出　三峰尖　ゑゆみせん汁　梅ひしほ　昔のひねたる料理　口頭　吸口　醍醐獨活芽　鮫馬水芽濱　淺草海苔　初鰹　初物を走りと云と　おんざのはつもの　初茄子　青梅茄子

松もぢき　茶筅茄子　蓮花茄子　きくみ　唐茄子　薩摩芋　薩摩芋先生　筍　ふつぼく　食卓　南蠻　鴨南蠻○（以上第自四百七十二頁第至四百八十一頁）
みさご鮨　一夜すし　なまなり　釣瓶鮓　雀ずし　食すし　おまん鮓　営座鮓　鮓賓
松がすし　てんぷらわげもの　栗生姜大根の花形　大黒煎餅　西瓜　眞桑瓜　本所瓜
本田瓜　銀まくは　金まくは　梵天瓜　りんごの紋　酒宴獻酬　まはり酌　鬼のみ　酒
をのむに種々の名あり　中のみ　鶯のみ　三ッ星　取違　蓮のみ　和よし　瀧のみ　卯
酒　硯水　酒戰　杯に種々あり　こうろぎの盃　黒塗の盞朱器　とりさん　織部をは
ら　叵羅　鬼ころし　可杯（ノム）　五と土器　むさしの　玉子盃　吹よせ　員盃　太郎員　う
かむせ　雀盃　下り酒　四斗樽　清酒　濁酒　造酒改焼印　酒の肴に雜伎　早こと　物
まね　さかな舞　見さいな　はやしごと　拇戰　拳すまふ　狐拳　虫拳　蝸牛の功用
中指の戲　拳玉　與次郎人形　酒胡子　撮席○（以上自第四百八十二頁至第四百九十九頁）
甘葛　甘蔗　からくたもの　手束　索餅　餅腴　粉熟　團喜　粘臍　餳餬　餲饅　餡子
沙糖　饅頭　十字　大湯餅　點心　羹菜　元弘様　羊羹　魚羹　水繊　すいせん巻
鼈羹　碁子麵　けんひやき　茶子　昆布茶　苦菽　ふんせい豆　衣豆　霰餅　興米　道
明寺　引飯　椿餅　やきもちひ　鶉やき　うつら餅　胴はれ　姥がもち　はらぶと餅
大福餅　自在餅　神在餅　善哉汁　汁粉　すゝりだんご　あんころばし　ぼたもち　か
き餅　萩の花　お萩　福引　圓山かるやき　かい餅　煎餅　片餅　鬼煎餅　醒井餅　輕

焼　鹽煎餅　醤粟焼○（以上自第五百頁至第五百十一頁）
麩のやき　朝貌　經巻　助惣　銀鐔　ぎら焼　金鐔　雁金焼　さゝ餅　藤の花　ふんこ
馬　あこや　あかつき　鄙甲もち　櫻餅　杉原もち　あんひん　あも　いまさか　餅
米饅頭　臥饅頭　姫饅頭　洲濱　豆飴　いぬま餅　矢口餅　亥日餅　黒餅の紋　玄猪の
餅　御巖重　花ひら　花のくだもの　ちまき　宮筒　花びら菱餅　はなくそ　御福の餅
餅花　みたらし團子　目黒の餅　算木餅　青ざし○金餅糖　落雁　羊羹　正徳中の菓
子とも　七色菓子　煉羊羹　南蠻菓子　てんぷら再出　百一口の菓子○（以上自第五百十二
頁至第五百二十四頁）
ひきぼし　みづから　昆布　國土の菓子　山女　一位の實　榁サクノ木　榧の左巻　玉
づさ　氷豆腐　ころ柿　かひ舗　くだ物いそぎ○白強飯　赤飯　瀬戸の染飯　喰倒れ○
（以上自第五百二十五頁至第五百二十九頁）
煙草　花山たばこ　煙草の禮式　きせる廻し　長烟管　烟管の鍔　煙の輪　刻み烟草賣
薄色　嗅烟草　水煙　異さまなる烟管　烟管通し○（以上自第五百廿九頁至第五百三十二頁）
茶　漢土の茶の事　茶税　臘面　團茶　とうちや　にがちや　煮茶　本邦茶の始　挽茶
節會　岩上茶　宇治の茶園　宇文字　走摘　朝日園　宇治の茶摘　魚色茶　ばん茶　初
昔　後昔　茶製造　唐茶の製造　日本の製法　茶式　一椀にて數人喫す　本の茶　非の
茶　回茶貢茶　茶歌舞伎　闘茶　茶道坊主　同朋　數奇　茶式傳來　利休　わび　すき

こそ物の上手の歌　九輪釜　人眞似　里見家の茶禮　白茶　嗅茶　青茶　はな香　極揃
別儀揃　意氣　苑香　雲脚　點法　茶をもみぢにたてよ　先罹の論　茶神　漢土の茶人
茶を磨事　茶具　茶筅　茶匙　茶托　茶湯ふくさ　だうこ　茶桶　茶杓けつり　小座
敷　ひたひつき　圍ひ　地火爐　灰匙　五德　白炭　遊女が茶湯　一服一錢　水茶屋
辻賣煎茶　煎じ物　櫻湯　茶店　鹽茶　隱元茶　淹茶　賣茶翁　茶煎　煮花　煮散方
茶ハ宇治の本郷を最地とし　茶品　江戸水道の沿革　芭蕉桃青水道之普請にかゝりし事
○(以上自第五百三十三頁至第五百五十九頁)

卷十下　火燭

きり燈臺　結ひ燈籠　高坏　菊燈籠　漢土の燈市　七月の燈籠　猜籠　ちよんかん　辻
燈籠　つじが花　切子燈籠　燈籠見物　柱松　たちあかし　車たいまつ　蠟燭　挑灯
蜀黍の眞　せつかんろうそく　朱かけの蠟燭　發燭　つけ竹　はうづき挑灯　行燈　懷
中ろうそく　ひじり行燈　たはこやの赤あんどん　廻り燈籠・走馬燈　戴燈籠　櫻燈籠
かんてら　影繪　影人形　化物ろうそく　ぼんぼり　遠州　盆燈籠　箱挑灯七月用
高燈籠用　地口行燈　初午　行燈に傘○(以上自第五百六十頁至第五百六十八頁)
さぎちやう　爆竹　唱文師大黑　左義長の法度　御火燒　吹輪祭　庭火　火廻し　火も
じくさ　文字鎖　火渡し　脂燭の詩　ちそくの歌　影法師　花火　大からくり　十二挑
灯　火桶に足を暖む　火燧　櫓　置火燧　板倉の冷こたつ　火を起す　火ひつ　燒石夜

に光りある物種々有り　夜光木　鬼火　東大文字　北辰燈　蚰蜒　月華日華　正月庭竈
救火のまとひ　火の見やぐら○(以上自第五百六十九頁第至五百八十一頁)
沈香　伽羅　奇南　蘭奢待　たき物　合香の名　香式　十種香　十炷香　十茶香　源氏
香の圖　系圖香　鼻根　嗅　香を聞　初音　柴舟　香を多く用ひし事　まなばんまなか
銀葉　香敷　千鳥の香爐　蛤貝に薰物を入る事　うぐひす○(以上自第五百八十二頁
至第五百九十一頁)

卷十一　商賈

暖簾　みせ店　厨子棚　町屋號　立賣　口上商人　れんちやく　相物　すあひ　毛二歳
すあひ相場　藏まはり　すあひ雜魚　問屋　替錢　問丸　俗給仲人　販婦　物を頭に
戴く事　おやう　大原女のはゞき　千日詣の行人　鳥足　水汲女　わけもの　看板　酒
はやし　物の賣聲品々　菜さうでいく　小便買　千駄櫃　高荷　竹馬　呉服屋　江
戸の町みせ棚のさま　現金安賣掛直なし　引札　古着屋の起立　古金買　振賣商　商物
の相場をふれあるく　杓　ふり賣札　髮結札　棒手振　棒にふる○(以上自第五百九十
二頁至第六百十頁)

青豆時　安賣十九文　とつかいべい　めける　飴賣の笛　飴賣の傘　よみ賣　辻賣繪双
紙　紙畫　ほうろくの一倍　つきつけ賣　暖簾師　口上商人　やまうりヤシ　めつら
しき商人品々　耳の垢取　飴菓子諸の藥賣　蓮葉商　おもたや　古道具屋　まゆむ　茄

子の枯るを舞と云ふ○(以上目第六百十一頁至第六百十六頁)

乞士 化子

乞食　阿彌陀の聖　暮露　鉢扣　鉢扣の歌　高野聖　いたか　ひじり　ひじりと云呉服屋　せり呉服　せり賣色々　作り山伏　梵天　桂女　桂飴　大原みこ　八瀬大原　姥たゝ物もらひ僞多し　手燈　頭香　腕香　火わたり　膳きり　仲間六部　鳩の飼すれからし　鳩の戒　慶庵　口入　はうさい念佛　葛西念佛　方藥拂　あはう拂　てうさい坊　よせい　だて者　べらぼう再出　穀つぶし　足を手に代　鼻で笛吹　胸たゝき　節季候　鳥追　きよめ　非人　かたね　物吉　かたね仕切札　なりんぼ　乞丐人髪を斷る雪駄直しでい〳〵　非人小屋○(以上自第六百十六頁至第六百三十五頁)乞胸仁太郎　新非人　女兒の非人を町人の奴となす　出家山伏願人坊主名前人數調　願人すた〳〵　まかまよ　木葉坊　神事舞太夫○(以上自六百三十六頁至第六百三十八頁)

巻十二上　禽蟲

見せ物　水右衛門　鹽屋長次　蚰づかひ　蚰蠱　犬神　くだ狐　孔雀づかひ　天狗のみせ物　猴まはし　猿を廐に置く事　猿引道具　猿廻し廐の祈禱に出る　猿眼　盃とり眼猿眠り　たぬき寐　狢睡　狢評定　狢つき　四國を廻りて猿となる　人を馬となす食後に臥て牛となる　もう〳〵　十二支の歌　光陰の道行　十二相屬　御猫産子左右大臣有産養事　猫乳母　猫も杓子も　猫のちよつかい　猫に袋　三毛猫　へげ猫　犬に名を付るといと古し　犬けしかくる　犬ころ　犬の聲べう〳〵　べい犬　一もつ　ちん白鼠　熊鼠　番頭の白鼠　鼠の嫁入　鼠鳴　鼠おとし　人を鳥獸に比す　鼠こつこ　蚰こつこ　蚰のまかげ　蚰みめよし　蚰火にたゝる　狐の窓　狐の挑灯　癩　うそつき彌二郎　藪の中で屁　うそ八百　萬八　千三　禽獸の勢を去る事○(以上自第六百三十九頁至第六百五十九頁)

鳥が鵜のまね　蝙蝠山椒くれよ　鵈空中にて投食をはむ　雁々棹になれ鉤になれ　蝸牛角出せ　蠅の棒つかひ　椶櫚の蠅たゝき　蠅取り蛛　虫繪　蜂拂　ウソフキ　蛙の吊蛙の合戰　蛙が目を借る　蛙を釣　蛙を食　かじか○(以上自第六百六十頁至第六百六十六頁)

螢狩　宇治の螢合戰　石山螢谷　蟬を捕る　蟬脫　西いぞち　つく〳〵ぼうし　蜻蛉を捕　蛛の灸　腹きり蛛　あまのじやく　水馬を釣○(以上自第六百六十六頁至第六百七十頁)

虫撰　虫吹　促織　蟋蟀　鈴虫　松虫　ちんちろりん　虫籠藤花　虫屋　麥稽籠　虫を商ふ者　虫を種る法　松虫の卵を取る　蠶を飛す　ひを虫　虫の油を髮にぬる　簑虫鬼子の諺　蟻の熊野參り　蟻の合戰　蟻の塔　あばれ蚊　蚯蚓の鳴聲　蚯蚓陰晴を知る蚓笛　小兒陰腫　虫目鏡○(以上自第六百七十頁至第六百七十八頁)

鬪鷄　ときやむ　野郎遊女が鷄合　小鳥合　鴫合　あひろ　かりの子　鶯合　三光　昔の

鳥籠　鶯受取り渡し　鳧いうくひすにあらず　鶯の産地　鳥を弄ぶ事　鳥屋　付子　鳥さし　江戸鳥屋の事　水陸鳥問屋の事　鶯の目縫ふ　鶉合　麥うづら　あひ夫　鬪鶉　放ち飼　傳書鴿　はとの聲　梟の聲　白鳥　ちどゝ　瓢をねくら　鵙の草莖　鵙落し　づく落し　囮の事　寒苦鳥　寒號鳥　諸鳥○（以上自第六百七十八頁至第六百九十二頁）

卷十二下　漁獵

鷹狩　犬　鷗鵡つかひ　鵜繩　猿が鳥に鵜のまねさす　漁獵の事　鹿狩　狗山　ちゝ狩　釣　六物　ぶり　荻梗　蚊かしら　餌巻　あま　釣殿　はい尻笠　蚯蚓　ごかいぬけるさ　てぐす　筌　ひゞ　いけす　やなず　網代　ひゞ竹　あぐり網　大網六人引　御菜白魚網役　ぎううけ　やな　鯉魚やなに落ず　江戸近國漁獵の擅場　ふしつけ　鮭を一尺二尺と云ふこと　地獄網　佃島由緒　白魚を取事　御菜島　大まき　汐乾　突魚　ひし　やす　立こみ　かなわらぢ　うなぎ穴釣　數珠子　見突　底突　空突　竹螳きす釣　はせ釣　根釣　漁獵止の札　殺生禁制　はやつり　たなごつり　髮毛を糸に代て用　川釣　田船釣の始　釣宿の始　いぜろの壺　江戸の金魚屋　團魚再出　岡釣　堀釣　金魚　ぼうふり　漢土の金魚屋　びん水瓶に魚を入れ置く事○（以上自第六百九十二頁至第七百十七頁）

草木

草合　すまひ草　馬唐穗相撲　ねから相撲　松葉きり　かつら草　ひな草　歟冬皮のかもじ　茅花をくへゝ肥るといふこと　草結　山茶花くらべ　白つばき　草木はやりもの　朝がほ　植木鉢　菊　菊のきせ綿　千葉蓮　並頭蓮　橋の下の菖蒲　穂まき　大菊　金目貫　菊合　作り菊　梅やしき　萩寺　薺を行燈に吊す　穀板　林檎に摸様、花の塔　花の塔の事始　正月の松かさり　松竹梅　松葉の兵　日陰の桃木　八重躑躅　ひよんの木　なんじやもんじや　松揃の歌　の法式　池坊　廻り花　投入　菜籠　藤原吉野○花を瓶にさす事　活花　削り花　立花の書　後世生花師○鉢植木　薄はたうけ筒　竹筒　薄板　水仙の早咲　生花採藥使記○（以上自第七百十七頁至七百四十二頁）

或問附錄

和歌三神　おづをかけたる雪の笠　武家のみつゆび　みさき踊　高野六十奈智八十　きな臭い　内儀をカミサマ　春雨歌　書法を用ゐて假山を作る　庭　鞠歌のオケンショサマと云こと　烏丸光廣卿十二支和歌　蚰の怖るゝ歌　江口君書贊　猿の繪の事　ヘタと云ふ語の事　三方荒神の事　よばろの事　庖丁の事　すはる星　垣下坐　椽の下の舞　美婦を凸と云ふ　常陸祭文　日本祭文　チヨボクレ　常陸祭文の一種　貧家の竈　百日紅　番字の意義　茶博士　松竹梅　頭巾を燈心入れとなす　鼠とり藥　書物を糸針入とせんとす　指甲紅　四景題情　圓社　牧童畫軸の詩　古き筆きり〳〵す　折櫃　檜代肴代　笑語　以髮易糖　落咄　鬼に疣とらる　險蚌　蔡京毎に香を焚く　妓館の婦を鴇と

云　七尺の夫に二尺の婦　書を讀て睡る　足痲に柴芒を鼻に付る　燈籠ハ白きを尚ふ　治第の燕に賓客を下し諸工を上とす　乞兒の詩歌　大蘿蔔　芋くらべ　歪をなす者の誡め　痴堵　對食　兌車　大言　好食不貪　薇花　百日紅　椿　盆景　箱庭　花を括る事　蚓笛　對間の扈從　獄舍を禁中と云ふ　馬頭　笑飴　魚閘　杭子　楻　許願　還願　對傘脚力　妾未有室　福生帳布　御身　江戸に猪狩の事　はたご　界の眞言僧　てぐる坊　放出　紙裏より見れバ數字に見ゆる假名〇（以上自第七百四十二頁至第七百五十七頁）三十三間堂の起立　突上窓の事　破甕を以て扁又ハ門となす　傀儡　撮弄之戲　撮樽之術　冬學　ベソ　長押　昔新きも冠とならず　岩木にあらねハ　二ッ瓦三ッ棟に造たる船　舁居屋形の船　見みえの意義　そこはか　止觀行者四種三昧の大意　許魁の膏方　大腹賈　私錢盜鑄　人肉を食ふ　淨心の法號ハ淨土宗葬所ハ天台宗　歌誹百人撰の作者　梟首せらる　延命院と仙石騷動の作者　筆師に小法師と云ふと　おも黑き　烏金　正保頃の町名　かたくるしき者を延喜式又ハ古文眞寶と云ふ　淺草三十三間堂創起　古へ遊女白拍子招かざるに來る　食店　行菜　鎗頭　素分茶　目蓮救母の劇　今とかはれる手まり歌　幡隨院長兵衛の異說　シンマクと云ふ事　策祝　步搖　文房四神　神粧　拾赤子　賣赤子　織婦　乳子買　人置かゝ　杜預書を荅て人に借さす　金ほる者をケサイといふ〇（以上自第七百五十八頁至第七百六十七頁）　藝か身を助くる不仕合　肖像の寫し難き事　箭庭　在地判　武夫の殘暴　醫師の不仁

大小の札物折紙のとをひとまきと云ふ　太刀の目貫　柄の卷やう　金漆　童の勇力　宿殿　ホッホ　一件　圖　乞兒詩　奇南香　鏡背の紋　龜泉　萩藥師　野老藥師　香木の菊柴舟　鬼杉原　百弓　と　陰毛を毛虫になすらふ　かはつるみ　犬居目禮古佛坐　櫛に結ぶと云ふと　普請と云　ツボン　仲間の勤方　奉公引米　撿校の番入ハ謂れなし　文人の支配　相撲を武藝とせしと　錢を撰む制札　如木水干　白張　如木雜色　仕丁　當世名聞を貪る人々　狂歌師　錢ある者の歌を高點とす　人の別號　鼓公福貴人に詩を送りて趨せす　知名の人々　旨者の記臆　道念節　盛衰記に出たる事とも　ウケムケの事　七福神　お菊物語　おあん物語〇（以上自第七百六十八頁至第七百九十頁大尾）

嬉遊笑覽卷一上

喜多村信節　撰

○居處　○室　やくら　地突てこ　手斧初　宇津保杜　中門廊　妻戸　さふらひ　武家の構　書院出文机　居間　床　疊　押板　飾物　塗籠　帳臺出居　天井　局つぼ

古書をもて徴とするをいとひて別に一種の學を立るものあり杜撰といふべしといへりげに物によらでいえあるまじきわざになむ何にまれその道々の文いあんめるをいとさゝやかなるとい猶ゝられぬもおほかり老翁（オキナ）老婆（オウバ）のむかし語りい更にもいはず眼のあたりの事今だにおぼつかなくきのふと過きけふと經るまゝにいつしかいひひがめ訛（アヤマ）り傳へてあらぬとゝなれるなど論（アゲ）つらひものするいむねとその根ざしを正さんとすなりされゞたよりとなるべきをゞいはけなき書物がたりわやしのざれ草子もさらにきらふとなく文の林の塵芥のとゞこほれるせゝら蟲を學ひの海にかいやらんとすきもとり入て事にのぞみて用ふべしといはれしとかやむろい〔神代記〕に客をよめるがもとにて地室をいふ〔古事記傳〕に山の腹をよこに堀て石窟のことくかまへたるをいふ地を下へほりたるにはあらずといへり宮室をつくるも其さまをうつしたれば室をむろといひしなるべし上つ代の家造い柱を地中につきたて繩つなをもて結かためしものなり〔書紀〕顯宗紀室壽御辭に築立る稚室葛根また〔大殿祭詞〕に此の敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根云々古に於ゝ底津石根ゝ宮柱布刀斯理立など云は上代神宮も

掘立

内室作り

虚室

人の舎も伊勢神宮なとの製の如く地を堀て柱を立る故に此稱あり今世にも賤が戸にい是あり堀立と云ふ石すゑして柱を立るい後のとなり右の下津石根なと云い只深くほり立るを云なり〔雄略紀〕にやんとなき御所に内室作りといふありいかなる製にやといふ人あり予云これを匠家に聞侍る内室とい天非なく屋裏のまゝに造る事とぞ紫宸殿清涼殿なともうちむろ作りなりとかや凡諸寺の金堂なんとも内室作りの法といへり我熱田の神宮寺もこれなり〔日本紀廿四〕舘堂をむろづみと訓せり室字のみむろとよむにいかぎらざる歟と云り〔事跡合考〕に坪(カキ)山尺の達人正徳の頃予に語りて云ふ龜戸の聖廟の御本殿い垂木のかけやう一室作りとも云造りやうなり當世あのすみかね作法知りたる大工い江戸中に一人もなし云々誠にめでたく出來たる宮殿なりしが延享三丙寅年二月隣家よりの類火に燼滅ふたるこそ千歳の恨なるかなといへるをしむべき事い火にかゝる物これのみならずいづれかをしからぬもの有べきやうにおもへるいこれを記しゝ人いさらなり坪山尺の達人もわきまへなきとゝ見ゆ且ツ一室といふとはなし是内室を訛りたるにこそ猶おもふに内室い虚室(カツムロ)の義にてうつむろと訓べし〔和訓栞〕に舘を謂るい室積の義〔周禮〕に候舘有積と見えたり周防のむろづみも是なるべしといへり〔東雅〕に南都にゆきて僧寺の室といふものを見しかど上世に室といひしもの丶制とも見えずもと是僧寺の製なるが故なるべしといへるい非なりそい宮室になりての製なり上世の遺跡い今も古き寧の殘りたるが九州なとにありといへり彼土蜘蛛といひしものなとの住たる處も有べしとかや近くい鎌倉に殊に

穴藏

やぐら

○庄庫 文治四年六月十一日大和國越智庄御庄々年貢米有分早進納米領家或雖令承引未納或積年未納或着納置庄庫

「多くこれ又上世の遺風なるべし農民の物を入置處に堀たるも多丶又墓穴もあり土俗是をやぐらといふ〔日本紀〕に兵庫をやぐらと讀るい箭をいるゝ處なればなり是い其義にいあらず谷倉の義なるべしよりて塚穴をもなべて云ふ實朝公の墓穴にい岩に彫物ある故に繪かきやぐらと云又囚人を籠るにも用ひしとて大塔の宮をはじめ景清唐糸等が古跡あり〔散木集〕連歌堀河院御時出納が腹立てへやのふうと云ものを御倉のふたにこむるを聞て源中納言國信「へやのしうみくらのふたにこもるなり云々付よとせめ有ければ「おさめどのにいところなくしとて又〔古事談〕伶人助元を左近府の下倉に召籠られし類ひにやされとこい窖藏にはあらさるべしもろこしに古へ司空と云官あり顔師古が〔漢書百官公卿表〕注に窖穴也古人穴居穿土爲穴以居人也〔日知錄〕に此語必有所本〔易傳〕云上古穴居野處〔詩〕云古公亶父陶復陶穴未有家室今河東之人尚多有穴居者〔今人謂窯卽古陶字〔莊子〕言逃虛空虛空卽今人所謂冷窯也〕洪水之後莫急冥民居故伯禹作司空爲九官之首」又〔建保職人盡〕塗師の歌に「土むろしてもはされざりけり今も漆ぬるに穴藏を用ると同じ但し麹作るなどにいむろといへ共塗師などい風呂とのみ云ふそい箱の内に水をそゝぎたるさまを風呂の湯氣のやうなるよりむろといふといつしか轉りて風呂といふにや漢土に倉と云ものハ窖なり〔通鑑〕に當の煬帝詔洛口倉於鞏東南原上城周二十餘里穿三千窖一云々窖皆容八千石などいへりこゝにて倉と云しのハ〔書記〕玉垣宮の段またい十七年云々五十瓊敷命妹大中姫に我ハ老ぬれハ神寶を掌る事能はず今より八汝これを主れとあるど大中姫辭みて吾ハたハやめなれハいかで天の神庫に登らん五十瓊敷命曰ほぐらハ高けれども我梯を造らハ登りかて玉ハんやと云處に故諺に曰神之神庫樹梯之此其緣なりと云とあり又因に云江戸にて穴藏の始い〔我衣〕に明暦二年丙申本町二丁目和泉屋九左衛門といふ呉服屋始むとなり此者い福島家の浪人なりといへり按るにこれ始にあらす穴藏石屋宗山〔明暦火災記〕此火事迄い穴藏と申事人々存よりも無之たゝ車長持をたのみにて諸道具を皆々燒失ひたり又云御天守臺石垣の内兩面にして高サ二間石

コレハ今田舎ニテ郷藏トイヘルモノヽ如シ
年貢米ヲ入置ク倉ナリ
寶曆四年五月頃幡隨院了譽中興ノ開山ナリ
頓阿上人ノ三崎ニ住寺ノ地ハ名ナトニテアリ
濱口侯ノ地ハ寄附ナリ
江戸中ノ男女ノ土砂ヲ運ヒスシテ成就スシテ
俗ニ新幡隨院ト云フ

垣四方築内前々より穴藏と〳〵なへ御用の金銀納り有之と見え又浮生か〔滑稽太平記〕に末吉道節がある歳の「歳旦に穴藏のみのとし祝ふ朝かな」書中に道節江戸に下り寛永十八年正月廿八日桶町の火災に逢て歸京おける當歳旦にとあれバげに此歳辛巳の年なりされども此句にはなく身の上となり て承應三年に死といふ時は其間十二年も間のあるを程なくさも云べからず承應二年は癸巳の歳なれば此年にこそ程なくさい云べけれ

地突

寶曆四年五月頃幡隨院了譽中興ノ開山ナリ頓阿上人ノ三崎ニ住寺ノ地ハ濱口侯ノ地ハ寄附ナリ江戸中ノ男女ノ土砂ヲ運ヒスシテ成就スシテ俗ニ新幡隨院ト云フ

く空地すくなきにより又ハ火を防くに堅固なりとて穴ぐらと云ふもの多く出來たりといへれハ明曆二年ハ始にハあらねど寶永の初迄もいまだすくなかりしと見ゆ地をならし突堅むるを土突といふ今もさうづきといふハ誤なり又地突ともいふ其土砂を運ふを砂持とて大寺の造營にハ信者共助力するに樣々興ある事を催す是を見物に出る者多しこれ京難波の習ひなりいつの程よりともおこらされ共今宮祇園等の祭祀のにわかなどに等しき樣もあるをおもへは元文の頃より興ある事をばおこなひ出たるにや江戸にも寶曆四年三崎幡隨院建立に土持千本突ありて參詣群集せしとぞ〔江戶枝折〕あら金の土持玉むかし江戸にてハ地突に用る砂利ハ淺草の產を用ゆ〔正保五年日記〕子の二月廿一日町觸に町中海道惡敷所へ淺草砂に海砂まぜ高低なき樣中高に築可申候でみ泥にて築申間敷事又寬文三年卯四月十日町觸に今度日光へ神田橋より本鄕通を被爲成候云々海道惡敷所ハ淺草砂にて中高に一兩日中急度築立可申事など數多見えたり淺草にハ今に砂利場と云處あり又古へハ隅田川の邊をすべて石濱といへり今もこのあたりの土中に小石多し元祿中上野中堂の地突を諸人の議らひに極めて突堅まりしといふ事ハこれがたき時川村瑞見に問ハる答曰突堅むるにハ程も突に任て洗むもの故是限りと申御請ハなり申間敷候ハかし爰に一つ了簡御座候あの十四五間にも及候末口大丸材木の矢倉胴突にかけ大豆砂利と突込候ハんに地形の內いづくにてもひし〳〵と碎けて地中へ入らぬ迄突堅め候を限り

千本突　淺草砂利

どう突　木やり

と敲遊可然候といへりとなり數多の人々の思慮に不及をみにかく答へしは流石にこの人なりけり〔事跡合考〕に見ゆ〔癸亥隨筆〕に俗間に小石をざりと云ふ歌にさゞれとよむと同言なるべしさゞれもざりもさら〳〵ざやり〳〵と云音を形容おたるなりとおのれ思ふにじやり砂礫の調音かたゞし砂の音利は添ていふ詞なり其證は蛇籠とて長く作りて蛇の如きにいへりるにあらず砂籠なるべし又山のそば堆なども是とひやくがうつなどいふハ訛りなり砂ばかり扱ぢう突と云しも近時の言にもあらず〔洛陽集〕いふ時ハおのづから利もし添て呼べりさみゆ

に「石竹を筒搗や日傭か庭の石の竹如風といふ發句あり

世に木やりハ建仁二年榮西上人人夫に下知して我名を呼おめしより起るといへり是とハ異なれとも軍勢を指揮するにも似たる事あり〔戴恩記〕に六條本國寺を三好の軍兵圍たる時信長公一騎がけに驅付られ小歌を作りて自から音頭をとり諸勢にうたはしむ其歌に「織田のかづさハ果報のものよ一番鎗をつくはとにおかも上意の御前にてと三へんうたひすまし八面の大軍を一追に突くづしたる事委しくみえ又上京に城郭を築き參らせらるゝ時大石の數百人にて引かねるを信長公さいを取てたゝ一こゑえいやと聲を出したまへハ鳥の飛がとく行けるとなり何時も人の氣ハいさむといさまぬとに替る事なり此人の御聲ハ大きに有し御馬揃の時丸か見物せし三條衣棚にてなにとて先ハつかへて行ぬぞとの給ひし御こゑ東西南北四五町はどつゝ聞えしと人みな申きとみゆ豐臣太閤聚樂を造られたる時の歌ハ〔尤雙紙〕に載たり木石をひくにうたひたるにや清正異風に出立て大石を引く下知されたるとき〔事跡合考〕に出元隣が〔寶藏〕に地突石つきハ家居の始なり其故に大勢を天にはり酒を地にそゝぎて萬歳をとぶき人足あまた集りて綱をひかせ唄ひ躍らしむ誠に其唱歌も心あるかな愛

岩參りに袖をひかれしとうたふは神を祈りて戀路をかなへ水いわかいでと聲くはゆるい作事につきて富饒を祝へるにやなど云へり〔輕口ばなし〕に眞如堂の地突見物に行ける咄い元祿十四年にや今地突また祭禮の牛車を挽などすべて木やりをうたふ昔い木を牽に木やり石にい石引かねにいかね引とて各歌ありて〔大鏡〕などにも見ゆれども必ず定りしにも有べからず〔大鏡〕木やり歌に「けいひかぢやてつこのおゆ（今もうたふ）」〔人倫訓蒙圖彙〕に挺者普請の場又い大木大石を引動かす役人なり鴫口を以て打立て引ともあり是に依て鴫（トヒ）の者といふといへり木石を引に下に木槵（テコノモン）といふ物を敷ふ是を挺と云手木の義なり〔承應二年巳五月觸書〕に鳶口て此者云々寛文五年六月町觸に鳶口せおひかるこ持などあるい其日雇の者を云なり是然るへし鴫の者とい異稱にて聞えぬと也穴太築（アナフヅキ）〔明良洪範〕に石垣を築くにあなふ築と云仕方あり江州あなふと云所古へより石の五輪を切出し其工手多し信長公天守を建られしより諸國にても是を用ひしかば次第に石垣のと上手に成て後にい五輪を止て石垣築ものをあなふと云習はしけるを業とふける以來いつくにても通り名となりて石垣のことはなりて石垣築ものをあなふと云習はしける

棟上げに餅を拋る事〔秉穗錄〕に〔文體明辨〕に上梁文者工師上梁之致語也世俗營搆宮室以擇吉上梁親賓裹餌今呼饅頭雜他物一稱慶而因以嗃匠人於是匠人之長以餌拋梁而誦此文以祝之といへり

今番匠春の初に手斧初の儀式あるい吉書初などの例にならひしならむもといつにても家をつくりはじむる日を手斧初といふなり〔榮花物語莟の花〕この四月みあれの日よりてをのは

じめて（昇）南殿せいらうでんなどいむねあけんとす〔同玉の村菊〕この殿い やがて八月よりてをのはじめさせ給云々見えたり〔梅窓筆記〕に棟上の時大工の衣冠するも古さとなり〔玉海〕承安二年二月三日建春門院新御堂上棟云々大工東帶自取斧昇屋上さあり上棟の古儀〔異如堂緣起〕に見ゆ又上棟に弓矢を用ることも久しきわさなり〔竹林抄〕雜の連歌上に弓矢にあまたゐるとぞある〔宗砌〕棟上に時日をとるはかせにて今い板にて矢の形作りて用ゆ〔西翁千句〕に矢先に渡るあまたの聲「秋の田のかりほの庵の棟上て我衣手にさる赤飯〇弁をよきさも云〔後撰集戀六〕よく人もつむ人ハらす「あふこなき身さへ戀くるしき大江山ならきこらする人ハよきかハ何れも弊とそへたり物をさげすむといふことはなり〔七十一番職人歌合〕おし直す工もいさやすみかねにさげすむ月のかたふきにけり〔醒睡笑〕の話の咄に大工が能を見物に行ける時脇出て津國高砂の浦を一けんせばやと存候といひければ大工感じて我い高砂の浦を廣いと計り思ひたるに壹間せばいといふたいおもしろい何にも餘分をおきてさげすむべきものなりこれぞ後學なりといひたるも物をれとしめて見るとのやうなれどもとつもり量る事なればおのづから其意にも通ふなり昔とい詞の用ひやうかはれり〔誹諧片言二色〕物を押はかるをさげすみと云ふ下墨と云となるへし番匠の糸墨を高き處よりさげて物のゆがみすぐなるを量る事より出たる詞なりといへりまた〔嬉富覺書〕といふ物に押來り候馬印い黑き棒にて鳥毛か熊かといづれもさげすみ候〔懷子誹諧集〕蚊社のたてりをみるやさがり蜘重方今も社のたていれを見るといひて墨繩をさぐる是下ゲ墨なり〔筌誡翰〕月や下墨離別荷宰領是い當時用る處の意なり今江戸の工匠いさげ繩などいへども田舍にていさげすみさけすむといへり宇津保柱い〔大鏡〕に花山院い風流者にこそおはしましけれ御家をつくらせたまへるさまなんどよ寢殿對わた殿なんどいつくりあひはだふき合する事も此院のお出させ給へるなり

宇津保柱

下ケ墨

けり昔いやう〳〵にておはひに樋かけてぞ侍りしと有然らい花山の帝より屋をつゞけて萱と
い始りしなりそのかみの宮殿い別々に作りやねと〳〵のおはひにとひをかけて雨を通し
たりとみゆ〔古今集〕の序にこのとのいむべもとみけりさきくさのみつばよつばに殿つくり
せり〔冠辭考〕にさきくさい福卿又さゆりなるべしといへりそはともあれみつばよつばい瑞
の義にて宮殿の別になりしさまをいふなり〔源氏物語〕に宇治の宮の中の君匂宮へ嫁娶の處
宵うち過てぞおはしつきたる見もわたさぬさまにめもかゞやくこゝちする殿づくりのみつば
よつばなる中にひきいれて車を入るなり〔枕草子〕木いの條ひの木人ちかゝらぬ物なれどみつばよ
つばの殿つくりもおかし〔北畠親房卿抄〕云幸種い檜の木をいふなりみつばよつばい三棟四
棟と書なり云々按るに宮殿を造るに檜を用る故枕草紙にもかいへるをそれによりてさき草
をひの木の事とするい非なり男山八幡宮本社と拜殿との間にかなぐひに金箔おしたるがか
けてあり田舍人なぐ參詣すれば社人等欺きて黄金の樋なりとて見する山崎の離宮八幡もも
とい木樋なりしを〔信長記〕に十二月十日至二山崎寶積寺一被レ移二御座一けるに大雨ふりしかば
兩日御逗留有ける處八幡宮木樋朽たる由申上けれいからかねを以て鑄て參らせよと武田佐
吉林甲兵術に被仰付けりと見えたり男山のやうに造りたるなるべしやねの谷に雨水の集り
たるを箱とひにて通すなり其形柱のやうなれい是をうつぼ柱と名付く〔源平盛衰記〕殿上や
み討の條に頭左中辨師俊朝臣藏人判官平時信をめして宇津保柱より内に布衣の者の候ぬる
い何者ぞ云々〔夏山雜談〕に宇津保柱といふい殿上の前にあり御殿の屋ねのつま〳〵のゆき

屋ノ中ニ主トアルヲ身屋ト云後ニ母屋ト云ヲハムヤヲ

みつばよつば

幸種

合にて雨水のもるゝ處なきゆゑに柱を穴にして其中より雨水の落るやうにふたるなり〔夫木集〕に「おのびおつるうつぼは柱にかくる樋いもるてふ水のくちやなからんと有り柱を穴にしてといいかゞなり立樋の柱に似たるにこそ古き繪に見えたるい〔信貴山緣起〕の内殿前に立しもの是なり〔席上腐談〕古之承雷以レ木爲レ之用行レ水即今之承落也〔類書纂要〕簷下承雷水者以レ木爲レ之俗云二水視一又謂二之閣漏一

宮殿高くなりし事〔榮花物語朝みこの巻〕京極ぎのやけて伊豫守頼光とのゝ内のとすべてつかふまつる條殿の造りざまはじめい古代にむかしかるとありうちわはぬなぐいへるをおもへば是も彼別々の屋の葺合ぬことにや此時作られしい屋のたけ高うなりしこと知るべし

中門い〔源氏物語藤のうら葉〕冷泉院六條院に行幸の處に山のもみぢいいづかたもおとらねぐにしの御前い心ことなるを中のらうのかべをくづし中門をひらきてきりのへだてなくて御らんせさせ給ふ〔海人藻芥〕に大臣家に四ッ足あり上中門不レ可レ有レ之云々寢殿にも日藏不レ可レ有レ之武士の家にい不レ造二檜皮屋一皆板屋作りなり然共近年將軍家渡御之在所各稱二檜皮屋一畢中門廊以下月卿の家に同じ但不レ立二棟門一皆もろ折戸也又上土門を立る輩少々有レ之とあり〔庭訓古注〕云棟門い立棟也唐門い唐様にて丸棟作りなりと見え不入風作りにしたるは棟門にて門の正面に軒の垂たるは平門にやと云り然るにや〔門棟門を安齋云此門ともの製詳かならず愚老が推量には門の正面の中に落書ひの中になるやらいかゞ宗盛

中門　平門

〇又ひら家は源平盛衰記廿二東國下向の討手の使の逆かへりたると聞りてと入道殿の門に落書ひの中になるやらいかゞ宗盛

ルヲ也今世ニハオモヤト云廂ヲカモヤト取ラルヽヘルヲ誤モアリ水視閣漏

宮殿高くなりしと

々聞書〕に中門とハ妻戸なり妻戸をハ不斷ハ掛酌有へきか主人貴人御出の時專一被用候なれハ平人さい〳〵出入する事いかゞにて候又部出入ハ殊更嫌ひ申候子細あるとなりといへりおもふに是をたゞ中門とも云故中門を〔海人藻芥〕にハ上の中門といひしにや妻戸ハ中門なき家にもあるへきなり〔類聚雜要〕康治二年前齋院三條移御の條に水火童女從二中門內一步出なぞあるハ內の中門なり〔堀中門とも云なるへし〔同書〕建保元年七月廿二日新造御所事云々指圖少々有二被改一レ之所一此度可レ立二中門一之由云々〔吾妻鏡〕建仁二年九月十五日有二御鞠一云々乘燭程將軍家又出二御于石御壺一名〔四方硯〕にむかし妻戸とハ井中門內名二行景一云々〕唐戸といふ其形ハ同じ妻戸ハ戸一枚なり車よせにも唐戸あり後世玄關の製ありむかしハ賤子といふハ今の緣かはの事なり世移れば物の名もかはりぬ〔和爾雅〕に言關禁裡稱二之車寄一武家謂二之妻戸一僧家稱二之玄關一」と云るハわろしもと妻戸ハ車よせに必ある物なりぞ楣ハもと門戶の具にあらず〔儀禮〕〔爾雅〕に據るに屋制五架の一にして棟の次屋その次楣にて下ハ門戶を設る處なれば屋の內にあらぬ門戶にも上の橫梁をば楣といふことになれり又楹字〔爾雅〕の注を引て〔和名抄〕を門の兩傍木也ほこだちといふとあるハ今俗に方立といへるハ轉語なり〔藻鹽草〕に古へ道をありくハ鉾をつきて兵具とし家に入てこれを妻戸に立そへて置より始るといへれぞ殿門にハ矛楯を設て威儀とすこれによりてほこたちの名ある歟已上撮要もろをり戸ハ兩扉にして今の冠木門なぞをいふべし上土門とはやねを土にて塗たるなり古書に多くみゆ

上土門を武家に立ること〔應仁記〕云大名の家作り吉良石橋澁川等をハ先おきて武衛細川畠山山名一色六角ハ上土門を立にける又冠木門の武士方ハ讃州相模土岐京極能登美作兩大夫備中守護因幡守護和泉兩守護淡路守護大舘富樫伊勢武田大野大夫甲斐や織田畠山には播磨守中務少輔遊佐ぞある細川方にハ右馬頭下野守仁木の一族に五郎少輔と葦名とさて京極に加賀守黑田とこそ聞えし土岐の下にハ池尻此外奉行頭人と奉行外樣の大名の家々の殿つくり注さんとするに際限なし或ハ藥醫門の大名の內わに至る迄凡六七千間ハ在らむとぞ覺ゆる所記其中に取莭ハ曾て有べからずなどいへり其品ハ粗知べし

中門の廊

中門の廊ハ〔春湊浪話〕に寢殿のことをいひて表の角によりて中門を作る是ハ門といへども門にハあらず今の玄關式臺といふものなり〔叉山雜談〕にも中門ハ今の玄關なるべしと云り〔太平記〕に中門のかたをみれば宿直ある者ものゝ〳〵太刀かたなをとり散してといふ是なり又中門の外の沓ぬぎ或ハ中門の板敷とも書しとあり是につゞきたる庫或ハ廊下を中門の廊と云ふ是にハ必ず窓を多く見えたるにいつの頃誰が名付たるにや今世なべてこれを實撿の窓とのみ唱へて廊の連子といへども門にはあらずといへり此說宜し但し中門といふに二所あることを辨へず故に中門

廊の連子
實撿の窓

柱などにや

妻戸
棟門
ほこだち
もろをり戸
上土門
冠木門

中門を廻させましく御駕籠臺を御車よせと呼べきよし仰有しとや〔非跡合考〕に塀重門を玄關の腋門に造らるゝものを用ひらるゝ事中古來の如く塀重門に吹らる云々いへり朝鮮人來聘の砌親王攝家の例の如く四足門屋根あるものを用ひらるゝ事中古來の如く塀重門といふハ上にハふもろをり戸なり〔源氏物語蓉木〕馬頭が物語する所木枯の女の家の地築のさまは今日光山本坊などにて御車寄につゞきてあるこれ中門の廊なり柳營にハ正德年中朝鮮人來聘の時殿門御造修あり今迄の御車寄を中門の廊と稱し別に

四ッ足門　東鑑四十　正嘉二年正月廿四日勝長壽院四足脇門造畢

侍

遠侍

れより池の水かげ見えて月だにやどる住家をすぎんもさすがにており侍りぬかし云々この男いたうすゝろぎて門ちかきらうのすの子たつものにたちかけてとばかり月をみる云々凡家の式ハ南面に寢殿あり對の屋ハはなれて東西また北にもあり廊（ホソトノ）ありて皆寢殿に續けり對の屋につゞきたる廊に車よせあり并びて中門あり又釣殿有て池水に臨めりそのめぐり築地にて中門の外の方に大門を搆ふ侍所ハ中門の旁にあり中門なき家にても大かたこのさまに廊にて別屋にかよふやうに建たるものなりそハ古圖ども見て知るべし〔後世禁中圖〕後光明院御時一對屋東西八間南北廿一間女房居之、長橋局東西六間半南北十四間掌侍上臈人居之、是勾當內侍なりなどあり圖をみるに一對屋と長橋局常御殿西の旁なる御見間と云に通ずる廊下あり二對の屋ハ常御殿中間の處に通ふ廊あり何れも御殿より北にあるなり侍ハ〔源氏物語まき柱〕にさふらひに人々聲して雪すこしひま有夜ハふけぬらんかしなどさすがにまはにハあらでそゝのかし聞えてこはづくりあへり云々其聲の聞ゆるハ近きにあるなりはなれて有を遠侍といふ〔秋草〕に古代の武家のやうハ外に總構の築地ありそれに大門あり其外所々に小門有り大門を入て塀中門ありそれを入ば遠侍あり今の大家の門の內に幕番所といふ所の如し（遠侍は總板敷也〔鎌倉年中行事〕具（つぶさ）なり）遠侍の前を通りて主殿の前に至るなり（客殿ともいふ主殿にハ定りたる客人にても使者にても主殿の前の庭に立て案內をこへば內より奏者出て請し入るなり古き繪共に客人と亭主と對面して居る座敷の庭に供の者の居る體を繪がきたるあり室町殿の頃迄ハ如此な

り其已後ハ玄關出來しなるべしとあり此說いまだ然らず室町殿に玄關有（下にみゆ）たりのとにハあらで武家の大よそをいふとならば主殿に向ひて案內こふ程の處にハ塀中門ハ有べからず〔圓光大師繪詞〕に上人の父久米の押領使（サルマ）漆の時國が館の體を圖するをみるに昔の武家のやう大かたかゝるさま成べし大門より垣おしまはして總構とし大門の內侍所あり武士鎧を着て假寢する者五六人旁に兜弓箭などあり此處板間にして四方に障子などなきハ內の體をみせて畫ける故なるべし夜の體なりはなれて廡あり半を板敷に一段高くしてそこに馬飼二人ばかり臥たり遠侍より緣がはつゞきにて兩扉の唐戶あり中門口なるべし其奧二間部を上て簾かけたる內屏風立廻したるハ主の臥ぞ（アルジ）にて枕邊に弓矢甲冑等あり此二間も中をみする爲め部をあげて書たるなりそれより奧のかたみな遣り戶立たりひさし長く出て家の橫手緣がわも橫にめぐれり此所に沓脫の踏たんあり平日ハ爰より出入なるべし（前に引る貞應の〔故實書〕に妻戶をハ對酌すべし主人貴人御出ありに非ずをかまへたる處あり後世には二階門も有しと見えて明曆三年酉正月廿五日作事之儀縱び國持大名たりといふとも三間梁より廣く家作可爲無用（ママ）二階門可爲停止（ママ）并こまよせ先無用之事とあるハ大火有しに付ての觸ごとなり）玄關釋義堂が〔日工集〕に至德三年二月廿二日云々忽有敲玄關者山名奧州太守清來禮云々〔三光院內府記〕に造興ハ諸家諸山於門前乘之也但東堂者至玄關乘之云々諸寺に玄關ある事知べし北條足利共に禪法を好みて何事も學びしゆゑ家居にも書院玄關などのありしもその初め私のとなへなれば有來りて似つかはしき處を名付け呼たるが後にハことさらに作る事となりしなるへしことに玄關ハ正しき居所の名にハあらず老子に玄之又玄衆妙之門な

主殿　客殿　出居　對面所

書院

附書院　自書院ト云ヒ書院ト云フ事室町家日記又樣業能等ニ出ツ院字ハ谷ニヨリテ正音ナリ

といへる意にていはゞざれたる異名なり〔室町殿日記〕義輝公最後の條に玄關に出給ひてさしとり引つめさん〳〵に射給へゝ云々〔安齋の室町殿迄玄關ハなきやうに志るしたるものハ非なるへし〕

書院〔太平記〕佐渡判官入道々譽都を落る所六間の會所にゝ〔庭訓〕にも會所と書これ客殿なり書院と客殿にするハ後の事なり　大紋の疊を敷ならべ本尊脇繪花瓶香爐子盆に至る迄一樣に置調へ書院にゝ義之か草書の偈韓愈が文集眠藏には沈純子の宿直物を取副て置云々〔秋草〕にもこれを引て今世客に對面する處を書院と云ひ古ゝ大家にゝ主殿とも又客殿ともいふ小家にゝ出ねといふ　今も田舍にて對面所お出ねといふ々書院ゝ禪家にて學問する處なるを學びて造れるなり出居ゝ民家のみにあらず〔續古事談〕に後三條院宣旨を太神宮に奉らむとせさせ給ふ條に其御時迄ゝいでゐの御座にて供御ゝまいりける云々出居といゝあるしの出て居べき處をいふなり〔源氏物語柏木卷〕夕霧致仕の大殿を訪ふ民處れさゝの御いでゐのかたに入たまへり家にても一段高き處にや〔義經記〕伊勢三郎義經の臣下になる條に我身も出居のさゝみあけて灯たい二所に立て腹巻取てそばにおき云々郎切死の條葛屋のはかなきゝ天井近くて切そんじよせ手傳七を切そんじたるなりよる　程のやつばらうたれて云々傳七今ゝ罪つくりに何かせんと出居へふつと走りあかつて云々見えたり又今世附書院と云ものゝ〔事跡合考〕に異邦書院作りの營法を不知して唱ふるものとぞ書院ゝ床に掛物香爐等あり棚にゝ書籍等を置き俗に附書院といふゝ其高さ机案のごとく向ふに明障子を立てる事全く書案なりされば東山殿書院の飾りやう此板の即この板の上に書籍を披閲し書寫する事なりといふ附るといふ字床上に硯筆等を置る末代猶如此書を學ぶ爲なれゝ如此結搆の間を書院といふ字床の脇に作り付たるを見ていふ俗稱なりといへりこれいそのもと末をわきまへぬみだりごと

出シ文机

佛壇床

床押板

なり附書院の製ゝいまた禪法行はれず書院といふもなき已前より有しを後かの書院なる床棚なぞの趣に似たるから附書院といふ名も出きしなりもとこれをゝ出し文机（フツクエ）とぞいひける〔圓光大師傳〕に上人黑谷にして華嚴經を講じたまひけるに青き小ぐちなは机のうへにありなりけれども師命そむきかたきによりて出文机の明障子をあけまうけて塵とりにはき入て投捨てけりと有り上人の居所なれば傳中其圖あまた所に畫きたり今俗に高さ一尺ばかりに作りたる佛壇床と云ものもとより有し佛壇なるを後に床の間出來て（これも俗稱なりもとは床のある間といふ）これをゝ出し成べし同例と見えたり文みる處に出文机の製よろしかるべし色々さゝりつくろうはうるさしたゝ明き小窓のもとに棚板をさりはづしにゑたらむハ塵掃爲にも宜るべし古樣に拘はらす棚の下膝の入べき處ハあけて置かざれば机とするに便りよからず疊三四疊數にして傍に書取出すにいとまも費えなどするはもの擾素するときの常の事なれば日々掃清むるやうにかまふべしさばれ日々掃清むるやうの人はいかやうにも有るへし松崎堯臣か〔慾には塵もつもれば掃ふ時やすきやうにかまふべしさばれ日々掃清むるやうの人はいかやうにも有るへし松崎堯臣か〔慾のすさび〕に烏丸光廣卿は常に居玉ふ一間十疊ばかりありて書物ゝ悉く引ひろげ四枚のふすまを二枚ひらき机一脚箱一ツ三本入の扇子箱に筆あり其間へは年月を經ても人の入ることなかりし故居らる〳〵處跡付て其外ハ煨塵みち〳〵たり公宴とて參內院參などの時も右の扇子箱に硯といれ手にさげて乘輿に入り會席へ持參ありけるなり

床ゝ今いふものゝもと押板なり〔曾我物語〕に此押板にゝ古今萬葉を初めとして數の雙子をつみ置たれば此物語ハ鎌倉將軍の押板といゝ板をはりたる床なり〔東山殿御飾記〕に床の圖見えたりこれも鎌倉北條禪法を好み書院をたてし以來佛家のまねをして床を作れるなるべし床ゝ佛繪をかけ香花を備ふるための佛壇なりと〔秋草〕にいへり〔奇異雜談〕に寺のことをいふ處

棚　方丈ひろくわけとをし書院の押板に硯を置云々また町屋のとをいふ處にも奥の座敷をみれば四間の座敷に押板あり云々〔甲陽軍鑑二十〕勝頼於伊奈初て信虎に對面之條武田重代左文字の御腰物を押板の上に置給ふ又〔同書〕押板の釘にらず板を打たるなり扇をかけし事あり今い床の脇にい棚ありよりて床棚なぞ幷べ稱すもと棚と云ものい別にありて厨子たなと幷べ稱す其棚ハ二階三階あり是を居へ置て物を置くべき處に用ふ書なぞを置をば今も書棚とて別にありこの棚を床の旁に作り付にゝたるなり勝手にい戸棚なぞ云物も出來れり又今つけ鴨居の上に只一枚の板を横にわたして棚と云しにや〔今昔物語十九〕夏の比麥縄を客人共集りて食けると云條に大なる折櫃一合に入て前なる間木に指上て置てけり又荒巻の條に荒巻三巻を間木に捧置て云々〔宇治拾遺物語〕にも見ゆ〔蜻蛉日記〕すゞもまぎに打あげなぞあり昔い付かもねいなし上長押なり間木い其上にあるべし

間木　小キ家にい置床とて取れきにするあり不角が〔わくがせわ〕物ずきの度に置床蚤の塞床いもと〔神代巻〕に同床共殿とありてゆかと訓り又とことも云ふ〔萬葉集〕に奥床に母い睡有外床にい父い寢有とあり床い臥床をいふ也されど漢土の如く別に床作りて其上に臥にいあらず古への人家すべて板敷なれば坐臥する處にい疊を敷その臥ところを床といふなり今疊に床といふとこの意にかなへり〔和名抄〕坐臥具に牙床胡床なぞ見えたり是い腰かけに用るにて臥處に用るにあらず〔源氏若菜の下〕柏木ゐもんの督の女三の宮を寢所より抱きおろすとあるい一段高き床なり又〔柏木の巻〕にも床高きよし見ゆ女三の宮を御父朱雀院のと

置床　くれどこ

間木　あぐら

ひ玉ふ處に宮をも人々つくろひ聞えて床のあもにおろし奉るとあるい父へ禮義なりされどこれい貴人のとなり又ゆかとも通いしていへど分ちていいぐゆかい簀にて床上に藉竹也とあれば是すのこなり〔和訓栞〕にい簀の下に横たふる竹を盜竹と云床下にかくれて繋縛せらるゝをいふとあり床下に隠るゝにて事足れり〔宇治拾遺〕に門部の府生と云もの弓を習ふ條板しきゝたげた迄も皆わり焼〔曾我物語〕祐經をうちし處たゝみ板ゝき切とをしゝたもち迄ぞ打入たるといへるゝたもちい今いふねだ（ダミ）かけのとなるへし今ねだといふい根板にや次てに云疊とは敷合するもの故に名付重ぬるにて折るとにあらず今物をたゝむと云も重ぬるなり古書にたゝみめといふい水草のわかめを集めて作りたるに今の干海苔の類今たゝみいわしといふ物と同義なり〔古事記傳十七〕皮疊絁疊なぞあるを以て見れば上代にい氈（カモシト）なぞのたぐひも凡てたゝみと云しなり右の白檮原の朝の大歌に菅疊を敷て二人御寢坐しよしあればゝきて寢る物を疊と云しと知らる云々後世疊に品々あり長帖短帖狹帖半帖又厚帖薄帖などあり帖の字い疊と音を通はして用るなるべし〔同傳廿八〕疊むとい重ぬるとにて菰を重ねて 幾重もある意又石だゝみ子だゝみ薮だゝみ等ありたゝみの義是なり然るを今のうすべりのやうに心得るい非なりむしろ一重なりとも捲こそせめ折たゝみなば折めつきて用ふべからずかぞふるにい一ひら二枚といひたり幾帖といふいさらなり又いづこにもあれたゝみ一枚二枚ばかり敷て用る事もあり〔枕草紙〕いとつやゝかなる板のはし近うあざやかなるたゝみひとひらかりそめにうちゝきて三尺のきちやうれうくのかたにおしやりたる云々〔今昔物語〕に在原業平女をぬすみ出して

竹盜　たけかもしと

板じき　いたじき

疊　たゝみ

石だゝみ

大なるわせ倉につれゆく處に板敷の板もなくて立寄べきやうもなかりければ此内に疊一枚を具して此女を將行て臥せたり云々石だゝみゝ石をふきつめたるなり〔散木集〕皇后宮弘徽殿におはしましける時西おもてのほそどのにて立ながら人に物申けるに苦しかりければ土に居たりけるをいとはしたゝみをふかばやなど申ければたゝみゝ石だゝみふかれて侍るめりと云を聞てよめる「石たゝみ有ける庭を君にまたふくものなしと思ひけるかな返し「名にしおはゞ身もさえねへき石たゝみ片しく袖に衣かさねよ又疊の裏と音にてもいひしにやべし後世などゝゝのやうなる物の名を呼ことともいと古し又疊に上み下ある事〔江談抄〕に面のむしろを裏に折返して閉付たるを上と知なりて階級あると〔海人藻芥〕に見えたり〔後三年合戰の古書〕をみるに疊の厚さ今と異ならず〔源氏物語須磨巻〕二條院殿上のさまをいふ處だいばんなどもかたへゝちりばみてたゝみ所々ひきかへしたり見るほどだにかゝりましていかに荒ゆかむとおぼす其抄にこれ古來の不審なりきのふけふのことにかくゝあるべからす只何もかはりたるさまをかきなせるなるへしと有りおもふにこれさまで不審のことにあらず臺盤ゝ侍臣のつきて用ることもなければ儻の内にも塵ばむべし疊ゝ用ある處にのみ敷ものなれば不用ならむをば引かへして置べきなり〔庭訓往來〕に深緣差筵安齋翁云ふ深緣といへりを廣く差たるを云なるべし差筵といたゝみ表の兩面にして裏の方をば床へさし付て所々とぢたる故差筵といふなるべし貴人ゝ疊の上

深緣差筵

にまた疊を重て座し給なり其上の疊差筵なり云々今時禁中へ攝關衆の年頭の御禮に參られたる時ゝ其人の御禮申さるゝ疊を一帖うらがへし其上にて御禮ありこれを差筵といふと〔綱口秘記〕に見えたりこれゝ實の差筵にてはなく差筵をしく代にたゝみを裏返敷て被用し成べしと○今俗ござと云ものゝ其品をよくいはむととての名なり〔枕草紙〕にわかぎぬきたる男の疊をもて來て云々とりいれたればこと更に御座と云疊のさまにて高麗などいときよらなりとみゆ今門前ござなといふゝゝいと有まじき事にや

ござ

高麗縁座敷

縁に品々高下あると〔海人藻芥〕に見ゆ高麗縁ゝ白地に黒紋を織たり略にゝ黒文を染む又思ふに座敷といふも御座を敷設くるをいふ名なり

飾物眞の飾

今世にいみじき祝ひ日など眞の飾と稱して書院に佛前の三具足喚鐘拂子などを用ふ安齋翁云古き事にいあれど俗家祝儀などにゝ掛酌すべき事なりといへり〔貞德文集〕御成坐敷飾物之事先床ゝ三幅一對掛物云々盆石石菖鉢云々皆以古實置樣番樣御座候得共紹鷗已來墓々敷相傳罷無之候近來利休居士可被存候へ共古田織部などゝも指而執心不被申候哉らん慥に覺知之旨も不相聞候得共當時淺猿事共也

繋居の床

けぬ〔源仲正家集〕北東風にけぬの床までとをりつる　小雪ゝみすの篠ふなりけり又無詮が〔沙石集巻一〕高野の明遍僧都善阿彌陀佛と云ふ遁世ひじりを三井寺の長吏公顯僧正の許につかはす處善阿僧正の坊へ參ぬ高野ひがさに麻だかなる黒衣着てとやうなりけれ共ふか

〳〵と申入たりければ高野ひじりと聞てなつかしく思はれけるにやひたひつきゐたるけゐに呼入て高野の事後世の物語なんど通夜せられけり又〔巻三〕犯戒の僧の事を云處持齋も破りて僧房に同宿兒共あまたおきて兒に喰はせむとてさは川と云ふ河にて魚をとらせて我身いひたひつきの内にゐて下知し弟子の僧火たきて前の爐にて生きたる魚を煮る云々と有りけゐ〻藪居にて今いふ居間部屋などの如し〔古事談〕敦光朝臣愛酒之間不斷置酒於藪居棚また伴別當相人の條に馬を藪居の前に一疋別に立飼ける〔此物語は〔悉本今昔〕にも出たり〕にて狹きを額になぞらへいふか又つきと云ふは頭つき顔つき抔いふつきにやさればひたひつき〻今火塔口（クワタウグチ）といふ物かともおもはる〔長門本平家物語〕兼隆被誅條に内へせめ入て見れゐ額突の前に火おこしたり又同所を〔源平盛衰記〕八牧夜討の條に景廉云々頓て内へ攻入て寢殿をさしのぞいて見れゐ額突あり燈白く掻立て障子を細目に開て太刀の帶取五寸計引殘せり云々今云火塔口なり〔太平記〕時勢粧の條に額付のあと以の外に下りたり塗籠（ヌリゴメ）〻壁をぬりまはしたる處なり〔源氏物語御法〕南東の戸をあけておはします寢殿の西のぬりごめなりけり云々南東の戸なり又〔御法巻〕源氏藤つぼの方に參られたる處われにもあらでぬりごめにおしいれられておはす云々君〻ぬりごめの戸はそめに明たるをやをらおしあけて御屏風のはさまにつたひ入給ひぬ〔花鳥〕〔細流〕等に調度など置處又文庫などの如しと有り今いふ納戸なり又〔夕霧の巻〕御息所小野の住居の處中のぬりごめの戸あけあはせて云々是〻前後の戸を明て閑道にふたるなり又〔同巻〕一條の宮の處ぬりごめに

おましまし一ッふかせ玉ひて内よりさしておほとのごもりにけり云々是〻女二の宮人をうく思ひてかくれたるなり又〔狹衣〕に大將さがの入道の宮におはする處宮〻かしこう入はて〳〵たてさせ玉へるに云々うづさせ玉へり大將あなたへぬりごめとみれば心やすくてへだてなどもやぶり玉はずといこれより外へ出へき處なければなりおしいれられてといふ詞もあれば今下ざまに押入といふも賤しき名にもあらず〔まさすけ裝束抄〕もやのなんど又みすゐ〻なんどにかくるも南おもてにかくるなり夕顏〔ベッカウ〕に別納のかたにぞさうしなどして人すむべかんめれ云々〔細流〕に別屋なり小寢殿などいふ物なり雜舍なりとあるゐくだ〳〵しき注也はなれたる雜舍にて物置處なるべし今も物入る處を納屋といふ又帳臺を納戸といふ名もむかしゐ帳臺の名なり鎌倉殿中の差圖に見えたり今もその唱殘りて殿中の帳臺を納戸構といふなり又云〔平治物語〕義朝朝臣生害の時云々塗籠の口までせめ入けれども美濃尾張のならひ帳臺のかまへまたゝかに拵へたれば力なく長田父子を討得すと書たるなどゐ帳臺も塗籠もおなじやうに聞ゆれども是ゐ下ざまの家作り定りたる式もなければ帳臺の設なくて塗籠を臥所にして是を帳臺とも唱る事と見ゆといへり按るに〔下學集〕に塗籠土民所言帳臺、局、闈と幷び出せり塗籠ゐ土民のみいふことにあらず恐らくゐ此注ゐ次の帳臺の注にゐあらざるやもと帳臺ゐ濱床の一名なり〔類聚雜要〕に圖あり御帳を設る臺なればまかいふ臥所にもぬりごめにも帷を垂るより帳内といひけむを文字ゐ帳臺となりしなるべし又後世土藏といふものも塗籠より起れる

納戸　別納　納屋　土藏

天井

歟土藏と云とも既に〔太平記十二〕殿法印の手の者どもを京中の土藏どもを打破て財寶を運取けるとあり次てにいふ塗籠いかくれの處なれば今俗亭主宿に居ながら留主をつかふといふ事あり是を猿樂狂言の塗師平六のことばにぬりごめ他行といへり

天井〔今昔物語〕美濃國因幡河出水語其河邊に住人いつも水出る時に登て居る處とて家の天井を強く造て板敷のやうに固め置云々〔古事談〕に京極御殿御時摸大内春宮町令造給云々故左府之時修理之間自天井上被取出種々物（これは呪にて古い民家といへども天井を堅く造りて入置たるなり）今の如きものにいあらずとみゆ〔義經記〕忠信最後の條天井にひた〳〵と登りてさしのぞきて見れば云々〔景清雙子〕清水坂にて討手をうけたる所いとま申てさらばとて天井にあがりはふせき板を蹴やぶつて家のむねにつゝとあがりなど見ゆ〔徒然草〕に家の造りやうは夏をむねとすべし天井の高きは冬さぶく灯くらしといへるはさながら夏をむねとするにはかなはずや〔和名抄〕に〔風俗通〕云殿舍作天井（俗云殿掌）とあり漢土にも是を天花版と云ひ又仰板覆橑などと種々の名を用ひて天井は今一處のかたにのみいへり〔唐類函〕州部〔水經〕注曰義陽郡南十五步對門有天井周百餘步〔華陽國志〕曰牂牁郡上當天井故多雨潦これは天文の天井をいふ也〔類書纂要〕に天井明堂甬道などに出たるもこゝに云ふ天井にはあらず〔金瓶梅十八回〕呉月娘をはじめ衆美人前廳の天井にて虫を弄びなぐさむ事あり〔杜騙新書卷三〕大雨如注天井水滿などは諸書に多く見ゆこれは雨水をあつむる水溜を長く方に地に堀たる所なり王思義が〔三才圖會〕にも圖ありまた風水家の說にはは揚救貧か〔門路放水經〕また近くは洪潮和

くみれ

局

が〔趨避通書〕等に放水の方に吉凶あるよし詳なり

さて突に天井をくみれといふは組入なり〔榮花物語〕うら〳〵のわかれ内大臣のがれ出させ給ひ（伊周公なり）つはものより申す所に帥はすべてさふらはぬよし奏せさすればあるまじき事なりみやをさるべくかへたてまつりてぬりごめをあけてくみれのかみなどもみよとある宣旨きりにそふ今格天井といふものの本製とみゆ組入の名思ふべし即井の字の文なるべし轉りてそらさまにあるをば何にもいへり内宮長暦の遷宮符に生絹天井また天井蚊屋などみえたり格天井本製なるは〔園治〕云仰塵即古天花版也多于棋盤方空畫禽卉者類俗一概平仰爲佳或畫木紋或錦或糊紙惟樓下不可少これ平仰はいつぱねと云はつぱやかなる義なり〔日本紀〕に一部をツボと訓る是なり桐壺梅壺などみ局をつぼねと云はつぱやかなる義なり〔日本紀〕おの〳〵屏風をつぼねつゝ〔同わかへ〕臺盤所にてなその一區をさしていへり〔榮華物語はつ花〕おの〳〵屏風几帳はかりをひきつぼねてひきつぼねて云々〔紫式部日記〕にもびやうぶひとよろひをひきつぼねつゝ口にいは木丁をたてつゝ〔今昔物語〕信濃守なる人御坂に宿直壺屋といふとみゆ又前栽を壺といふはいへり何れも同義なり〔南留邊志〕などに梨つぼ桐つぼ等は壺と局ととりちがへたるなりといひ〔東雅〕に何壺といひしものいは宮中の道をいひしにいはず漢に庭院などいひしもの即是なりかかるをかく名付しいその人間の境にあらざるをもて方壺瀛壺などいふ義にとられて御壺などいひしと猶上皇の宮居を仙洞などいへるは説どもみな僻言なり局いは女房の居所に限らず禁中に侍從局内記局監物局等あり役所をいふ

部屋

〔和名抄〕にみゆ又〔庭訓〕などに局部屋とある部屋ハ役人の休息所壺屋と云も部屋なるべし云處人ばなれてある物置風情の處をも云〔舊本今昔物語〕師の勘當うけたる僧の事を云處に憚りて御前へも不ㇾ罷出ㇾ後の壺屋などに候又一條に身貧ふくして壺や住にてある者云々又門の内に荒たる壺屋立たる處に女房あり云々などの多く見えたり

部屋今世部屋住などいふ部屋ハ古へに曹司と云〔落窪物語〕に我叔父なるがこゝに曹司してといへるハ食客となりてあるなり今世に部屋子といふと同じ義經を九郎御曹司といひしハ部屋住をいふなり又〔落窪物語〕に落窪の君を部屋にこむるとあるハ物置に入置なり其文に樞戸（クルド）の廂二間ある部屋の酢酒魚などまさなくふたる部屋にたゝみ一枚口のもとに打ふきて云々いへり今世にも炭薪その外牛馬などを入置處をすべて部屋と云

切かけ

切懸　垣　鰭板　蔀　方立　障子　やり戸　ふんざし　かけがね　猿戸　狐戸　釘貫（忍がへし）　もがり　さかもぎ　放出　馬道（めんどう）　屋根（こけら、とり葺、地葺、のし葺、井繩のと、鳥ゐざし、江戸瓦葺）

切かけハ〔源氏夕顔〕きりかけだつものにいと青やかなるかづらの心ちよげにはひかゝれる云々下文にからわやしき垣ねになむ咲侍りける〔抄〕に板をつかねて垣などにふたるものなり〔大和物語〕にきりかけをせさせて「まがきするひだのたくみのたつき音のあなかしがまし」などや世の中と詠り垣といふに疑ひ有べからず〔今昔物語〕佐太といふ侍着ける賤の水干の綻の絶たりけるを脱て切懸より投越てこれが綻び縫て遣せよといひたりし物語ハ〔宇治拾遺〕にも出たり石原正明が〔甲子隨筆〕に〔源氏物語夕顔〕にみえたる切懸ハ板がこひのかりそめなるなり〔長範記〕仁安三年十一月二日大嘗會齋場處の結構を記して南廂自『敷二布端疊一爲二八女座一云々東第一間切懸下敷』六男座』とあり齋場處などハかりそめなるとおぼし切かけといふ柱に切かけをしてそれに板を差あてゝ上より押へ木をうちたりと云り其体に似たるもの〔福富草子〕に見えたり同じさまにて今のつい立障子めくものあり是等も切かけといふにや今さゝらこと云もの有り日光山御宮のさゝら塀と唱ふるものこれ略言なるべし即さゝらこなりこれハ上より押への木に切かけふたるさまさゝらの子の如くなれば名付るなり（日光山なるハ上にやれ有り今常には多くたゝみに用ゆ）これ即切懸なり正明がかりそめなる物といひしハ惡し品おくれたる物といへどもよくもあしくも作らるゝなりまして垣根など人家に用ひんにかけなかしのやうにハ作るへからず〔雍州府志〕慈照院條下に飛鳥井難波兩家の鞠場の事をいふに四方に柱を立て細木を以て横にこれを圍むこれを横算といふ兩家の外是を作るとあたはずといへり板と細木とハかはれども是又切かけにひとし又切立といふハ竹を切立て鞠のかゝりとす一日はれの儀なりとかや

垣

垣をくねといふハくべなり〔萬葉集十二〕垣楮越爾（クヘゴシニ）麥咋駒之（ムギハムコマノンラエレド）雖ㇾ言また〔十四〕に久鞠胡之爾（クヘコノニ）武藝波武古馬能波津々々爾（ムコマノハツニ）或本云宇麻勢胡之云々うませこしをう文字ハ添字にてませごしなりといへるハもと末をわきまへぬにや又檜垣ハ檜の薄板をあじろのやうに組たるなり故に今その形に似たるを何にもあれひがきといふハ檜垣も古書に往々あり上代に垣と云しハ後世築

鰭板

地なぞ云たぐひの歟〔姓氏錄〕大春日朝臣の條に仲臣令（これは人名誤字とみゆ）家重」千金」委」糟爲」垣子」時大鷦鷯天皇臨」幸其家」詔號」糟垣臣」後改爲」春日臣」これ」酒池肉林なぞの如き奢侈のとなれぞもこれ」其と」殊にて家のかまへに用ひたるなり廣く築たる垣もありしなるべし思ふに糟を土に和して作りしにやさるゝ堅くなりなどする爲ならむ但しかすがゝ古き地名なればこは此古事」大鷦鷯の御世より猶古へのとなるべし

鰭板〔古事談〕に小野宮の大炊御門面にいはた板を立て穴をあけたる處ありけりそれに菓子なぞを令置給ければ京童部集て天下の事共を語り申けり其中に名事とも多聞けり〔春湊浪話〕に鰭板」柱を地にほり立て作るとなり〔玉海〕の承安の記に今」切懸も柱を地に立て作るよしあれば其頃よりきりかけといふもはた板といふも大やう同じ製になりけるか其後」きりかけといふ名」聞えず〔東鑑〕等に鰭板とのみいひたり右大將家さしも日本總追捕使を奉りて天下を掌に治め給ひし御舘も土門に鰭板の圍なりしこと〔東鑑〕に見えたり（此外〔沙石集〕の武藏守泰時」家の鰭板破れたるを執權に追從せむと思ふ人々築地つきて參らせんとはた板」地をほり立るなぞいひしと泰時」辭したるを載す此事〔神皇正統記〕にも見えて泰時を褒せられたり）

を思ふに切かけよりも堅固なる物とみゆさらでゝ武家の圍ひといなしがたし切かけ」風流なるかたにや思ふに板の合せめ」よくあはすといへぞも風日にさらせば透間出來る故切かけなぞゝ羽がさねにして横板にするとゝ雨水のよく流るゝやうにかまへたるなり鰭板」今の板塀のごとく竪板にて合せめに板を重ねたるものと思はる今」目板とて板を細めたるを用ふれぞも伊勢などの神垣をみるに皆同じ幅の板を八重に立たりはた板も此樣に目板」同

駒よせ　　蔀　　隔子

じはゞの板なるべし

今坊間の民家窓簷前下に低く垣めくものを木にて作りて駒よせと呼ゝ馬を外より牽來るをつなかむ爲に作れるも有べけれぞそゝいと希にて多くゝ人畜ともに其より内へよせましき爲なり然らゝ名に負はぬことなるへし〔周禮〕掌舍設」槷垣注云槷垣行馬也或曰」行馬舍」交木以禦」衆といへりこの類なるべしもしさもあらばこれも馬塞なり

蔀ゝくさ〳〵〔源氏物語夕顏〕家のかたはらにひかきといふものあたらふうして上ゝはじとみ四五けんばかりわけわたして籠なぞもいと白うすゞしげなるに云々〔花鳥餘情〕に半蔀ゝ下ゝかうしはた板なぞにて上にふとみを釣りて外へあぐるやうにふたるをいふ〔細流〕に大臣なぞの車に半蔀とてあり〔枕草紙〕家ゝといふ條藤山吹なぞいろ〳〵にこのもしくあまた小半蔀（コハシトミ）のみすよりおし出たる〔和名抄〕に〔周禮注〕を引て蔀覆曖障光也といへるにても透間なきよしゝられる格子ゝ其間すきたり〔枕草子〕卯花車の條かきくらし雨ふりて神もおとろ〳〵しうなりたれば物もおはえずたゞおろし（シキ）におろす職の御さうじはふとみをぞみかうしにまいりわたし云々〔徒然草〕に細なるものを見るにやり戸ゝ蔀の間よりも明しといへるより暗しとにや蔀も格子と同しく内の方ゝ漆にて塗たるもあるべし隔子ゝ外なり安齋〔庭訓〕の古抄の頭書に格子ゝ一間を横に二ッに作て上一枚ゝ金ものにてつりあげておろす時ゝ上より垂れさがる下もかけ金にてかけ置なり上の隔子を上る時下の隔子ゝはづして取

板屏

のくるなり又下をば其まゝれくともありかうしふとみゝ寝殿にあり蔀ゝ板戸の如し隔子の外に當て風雨を防ぐ物なり隔子ある家にゝ必ず蔀あり一間を横に二ッに作てかけ金にてくるなりと云ふ板蔀と云ゝ垣の類にて是ゝ白木なり蔀ゝ横なるを是ゝ竪なり故に竪蔀といふ〔枕草紙〕に野分の又の日云々たてじとみすがいなをのふしなみたるにせんざいとも心くるしげなり〔古事談〕に村上御時朝成始昇殿候〝小板敷〟主上御〝覧首〟小蔀〟これらも御透見のやうなり〔雍州府志七〕良賤家宅庭際座上以〝板壁〟隔〝中間〟是謂〝蔀〔甲子隨筆〕に板蔀ゝ〔狹衣物語〕に飛鳥井の宿りいたじとみ長くふわたして云々これ立板にて今板屏といふものなり此圖〔志貴寺縁起〕に見えたり板蔀にゝ格子いれたるもあるべしといへり隔十とふとみゝ等しきものにて格子ゝ透たるもの蔀ゝ表手に板うちたるにや格子入たるもあるべしといへるが蔀の本体なるべし〔信貴寺縁起〕に見えたりといへるものゝ非なるべしそれゝ鰭板のやうに思はる〔福富草子〕に白木の塀にて格子表に板打たるものみゆ是なるべし今俗にふとみ戸とて戸を横ざまにして上下へあげおろすゝ其似たれば名付るなりふとみとゝ下止の義なりといへりいがゞあるべき〔續古事談〕殿上一種物の條こと人々多くゝ難を出せり主殿司とり〻てたてふとみによせたつと有る蔀ゝ今俗壁の外を覆ふをふたみといふ蔀の字を用ゆ〔俳諧錦繍緞〕元祿十年色づく秋をふらぬ紫蘇の實其角蔀する北の家陰の露ふぐれ溪石庭に建て垣にも用る物ゆゑ壁の雨覆にも其名をうつふゝにやされど昔ゝ壁のおはひとやゝひけん〔醒睡笑〕に山崎の宗鑑が大風に壁のおはひを吹おとされし時人のもとへ俵をこひに遣すとて歌あり車

方立

障子　唐紙　衾障子　杉障子

○今世ニカヽヲカヽヲ云モトノ本ハ唐紙ノ紋ヤウニ作ナルヒラリシ散木名ノ集歌カラ歌ミノヨトカタカノ共ニ心ヲケアタノカレ

に半蔀あるゝ〔今昔物語〕に大藏史生高助が娘をかしづく條に蔀上たる車の新しきに娘ともをのせて云々あれば〔源氏の細流〕に大臣の車といへるのみにもあらねにや方立〔圓珠庵雜記〕〔和名抄〕帳ホコダチ、此ゝ俗にホコタチゝホ、タチにやのこぎりをのぼぎりとあれゝホとコと同音なれば通はし云ふ歟眞淵の〔頭書〕に云ホコタチゝ〔落窪物語〕の部屋の戸に木を立て鎗をつけたるに依て戸の面に又竪に木を立たるものなら然れば戸つらも其意なり

障子〔玉勝間〕に〔台記別記〕に寢殿廉中調度未〝立上達部座障子可〝張〟編今日猶爲〝唐紙〟不〟可〟然とあるこの唐紙ゝ唐國の紙を唐紙といふそれにゝあらじこれゝ今世にも衾障子にはる紋ある一種の紙あるそれなるべしこれを唐紙といふよしいひまなく紋のありてよの常の紙とゝ其さま異なればなりすべてよの常にこどなる物をば唐某といふ常のとなり扱いにしへの障子といへるゝ多くゝ衾障子の事にて今いふ障子ゝあかり障子なりさて又ふすま障子といふよしゝ衾をひろけたらむやうに張たるなり云々いへり古代の障子多くゝ縁を取たるも縁あれゝ今俗ふとんと云其形似たり〔職人盡歌合〕に唐紙師あり〔庭訓往來〕にも其名出たり又〔同書〕に杉障子みゆ〔秋夜長物語〕に書院の杉障子と有りこれ今の杉戸なり衾障子も今ゝふすま又たゞ唐紙にて通用すること略に過たり〔到來集〕桐の葉ゝ次第々々に落うせて幾秋ふるき韓紙障子義敬〔世話畫法〕の道も近き生死の海越に硯の墨をつけなからかみ寛文延寶の

頭よりもかくいへり古へも障子の骨なをいさまでかたく作れる物にいゐあらし〔清少納言〕あふうあくればさうしなをもたほめかしごほめくこそふるけれと云り扨又白石翁云昔の腰障子い人のつくばひて影のみえさる程に腰高からし今の腰ひきゝ障子い古田織部の物ずきにて近代の作なりと云り〔事跡合考〕に加藤清正の居所四方の障子最古風に腰高き障子にてその骨木の外の方鐵の筋かねを入れ外の方に一本とに鉄の樞を仕込たると云これ白石翁が説にかなへり

やり戸い今用る引戸なり〔萬葉集十一〕旦戸遣乎速莫開朝戸やりいあしたのやり戸なり〔源氏まや〕やり戸といふものさしていさゝかあけたればひだのたくみの恨めしきへだてかな〔花鳥餘情〕にひだのたくみは番匠の惣名なり云々古へ飛騨より木工いでしゆゑ番匠の惣名ともなれり東國にては武州淺草の大工また安房圖大工など〔東鑑〕に見えたりこれらの所其匠を出しゝなり〔房総志料〕に木綿童の諺に飛騨の匠が竹田のばんしよと云とあり此地平郡瀧田なと云なり〔和名抄〕に朝夷郡健田とあり今瀧田に作る平郡に並ゝらくり師の竹田もこれによしあるにやへり然らは此ことわさいと古きもゝ聞ゆ因て思ふにやり戸左甚五郎と稱する者受領して飛驒にて有しが〔甲陽軍鑑〕に大工受領して飛驒になる事ともみゆ飛驒の甚五郎と稱せられたるを後に左りと誤りとなへしも知へからず〔人倫訓蒙圖彙〕に木彫師の所に天正の頃左と號する名人ありなをいへり〔屠龍工隨筆〕に左甚五郎い我祖父の弟子なりと大工塀内大隅が語りし然れば明暦天和あたりの者なるへしといへり塀内い平内の誤りにや件の〔圖彙〕にも左とのみいひて甚五郎の名をいはず江戸にて甚五郎といひし者い左の名を襲ひしなるへし〔近世奇跡考〕に出る家譜い覺束なし〔源氏蜻蛉の巻〕小宰相が局の事をいと物はかなきすまゐなりかしつぼねなをいひてせばくはをなきやり戸口によりゐ

給へば此人は濱なり云々有る女い一品のみやの官女可〕然人なりされをも局い狹き所にて入口にやり戸立たるなを今大家の長つぼねなをいふさまにや〔枕草紙〕にくき物やり戸なをあらくあくるもいとにくしすこしもたぐるやうにてあくるい鳴りやはするとあり今世諺に下らうの一寸戸とさみせり戸障子をたつるに一寸のこし草履木履なを踏ちらしぬぎ置く人皆敗家の人なり

ふんざしい後指なりかけがねいさすかねともいふ共に〔源氏〕なをの物語にみゆ〔若菜上〕みさうじのふりはかためしければ〔孟津抄〕にふたるなり又〔夕霧〕こなたよりこそさすかねなをもあれを云々〔雉が本〕こなたにかよふさうしのはしの方にかけかねふたる處に穴のすこし明たるまた〔枕草紙〕大進なりまさが家に中宮行啓の處東のたいの西の廂かけてある北のさうじにいかけかねもなかりけるとさし入てさうしのかけかねをさぐり給ふにはなれぬるやうなれどもすこしあけて云々有〔狹衣〕に大將入道宮におはする處さうしをさぐり給へばかけられにけりいとゝうらめしう心うきに思ひ侘てたゝう紙り是は前に引たてさぐり給ひぬるも手のみわなゝかれて云々有ればよくもたてざりける成べし〔簾中舊記〕御こうしのかきかねともいへるい〔景清雙紙〕にふつちやうつめがねと八さうかきがねとみゆふつちやうかきかねともいへるい〔景清雙紙〕にふつちやうつめがねと八さうかきがねとみゆふつちやうい七挺なるべしはつさうい八相にや金物に八相といふ有り樞（クヒ）つきたる戸さる戸といふ〔寛永發句帳〕に押あけて今朝くるとしのさる戸かな成安これは寛永九年の歳旦なりくろゝをさるといふい何のよしにかあらん猿い人の如く手の働くものなればたとへしにや太刀の金物の猿手といふも手長猿の手をくみ合せる形を思ひて呼るにか後には其名に付て全く猿猿に作るは非なるへし樞も此かな物の形より猿の

○備馬樂にこれ河内かしもさゝれかけがんざし

あらばこそ　そのさわぐのみ
そのむかしめでたく喜ぶ　延式に
よし　雜記に
神馬藻
かすかへるに
ばかりなり　○光丸町　是は三角矢倉の十四矢倉云々　長押の釘の金物の美しく

名ある歟釜などを釣る自在竹のさるといふ物も同義なり

狐戸ハ〔古今著聞集〕頼光朝臣頼信の家に宿りし處に鬼同丸いましめたる繩金鎖ふみ切てのがれ出ぬ狐戸より入て頼光のねたる上の天井にありて云々〔同書〕後鳥羽院の御時八條殿のばけものを若狭前司頼度が見あらはすことありしも此狐の穴ばかりの小き戸にて今いふくゝり戸の開か突あげ戸なるべし後にハいよ〳〵小さくいひて鼠戸といふ有り猿樂の芝居の入口に設く〔これと歌舞妓にもうつして鼠戸あり同くくり戸なりしか後には作りざまかはりぬれど今も鼠木戸といふなり〔童蒙先習〕に狭物の中に鼠戸ねつみ戸などハせばきが中ぞ書さやうのとかしき事更になしこれは中庭といふ事なり〔誹諧染糸〕に錠とがめをおても盆なし番すえてさしかため置く鼠戸に作事方の者に聞しに凡そ破風下の處にハ小きやり戸あり其外ハ蔀なり此やり戸ハ暑中に風を入る爲に明るハ凉風を納るのみにあらず屋の朽ざるやうに設るなりこゝより入れば天井にあがる〔著聞集〕にいへる是なり〔和名抄〕辨色立成云樗風板比宜云々古本古へ樗風ハッと云ふハ大神宮延暦儀式帳正殿一區云々上樗風肆枚長二丈八尺弘八寸厚四寸號稱比木と見ゆ宣長云氷木千木共に肱木〔和名抄の肱木と云る別なり〕其ひぢの下を省けるとを省けると差のみなれば本一ッ名なる故に通はし云るなりそのひぢハもとフリの切たるにてフリとハ本一ッにて斜に左右へ末の分れたる物を云なり〔和名抄〕に杈極云々和名末多布理など云ふ名是なりと云上代の家造りに屋の左右の端に有て其本は前へ後ろへ軒よりして上りて棟にて行合ふを組違て其末を長く上へ出したる物にして其棟より上へ高く出たる處

を氷木といふ云なり棟より下にてハ即椽タリと並ひて同じさまなる又屋の左右の妻にてハ樗風と云ふ物なる故に書紀にハ其字を當られたり然れども是らハ棟より下にての名なれば共に氷木にハ叶はず古傳十卷六十三丁に尚委く見えたり然れは樗風ハ殿の左右の妻なるを前の方に其形を別に作り設るハ後のことと見ゆ〔和訓栞〕はふの條考ふべし

今白木にて四角に組たる格子を狐格子と云ふ盲人の〔當道記錄〕などに撿按たる者住べき家作の事を云に狐戸釣たる家などいへり是ハ蔀なるべし蔀にも格子あればさはいふ歟但し其格子眞の隔子よりも穴大に組かた麁なるにや〔茶話指月集〕に口切の時分宗易さる侘の方へ鴨屋宗安伴ひ參られければ露地の中垣に古き狐戸を釣たり宗安さびて面白く候とあれば易我らハさびたりと存せず却て結構なる釣戸とこそ存ずれ如何にとなれば定て遠き山寺より所望し來るにぞ在ん其人是らの雜用思ひはかるべしたとへば侘の心ならば自身戸屋へ行きいかにも魚相なる猿戸がほしいといはんに戸屋さやうならば松板のくづ繼合せいたし參らせむといひて出來たるを其儘釣てこそ面白きと申べけれかやうの事にて其人の茶の湯見えなくも有へしなるへし目貫は目貫は其製古ハ釘かくしなりしを後は釘の頭ばかりなひなる金物の飾る物にして釘の上の覆ひなり〔俳諧染糸〕火ともすや狐かうしもに姫まんにより先假りけ

侍るといへる物語あり茶湯者の物好こそ心得ね此古き狐戸求たる雜費推せらるゝによりて面白からずといへるハ理りながら千鳥の香爐を高價に求め舟岡の墓ぞるしをおろし手水鉢に用ひたるハいかに是ハとまれ爰にも狐釣とあれば盲人傳書のもこれと同じとみゆ狐格子ハ其形を戸にも作るべけれど是ハ家の表に作り付るなり〔續山井〕火ともすや狐かうしも家櫻友靜〔染糸〕の千句に狐格子をのぞく往來頻かふり月にハ背く三筋町などハ見ゆ後世種々

ちうと釘　かくし
狐格子　京格子　江市屋格子　釘貫　忍び返し

の格子有り名ハ格子にて多く竪にて方空ならず連子などをゝか呼て本義を忘る西鶴などが艸子に京格子と云るハ竪に子をあらく幷べたるなり江市屋格子ハ其子を細かにして三角に削りたるを透間なきが如く打たれば内より外ハ僅に見ゆれ共外よりハ見えず是ハ江戸の町人江市屋といへるが元祿の頃造りそめしとかや狐格子を喜連格子と云て説を付るハ非なり

○又江戸にて工夫し始めたる器物多けれども有益なるも物いひ石などの通しなりこれは貞享五年のころ江戸大門通釘屋喜兵衛と云もの工夫にて出來しと云

釘貫ハ〔埃嚢抄〕に町々の城戸を釘貫といふ人を登せじとて釘を打通して根を返さす故に釘貫と云とありこれ今いふ忍び返しなり此名もいと近きにもあらぬにや〔犬子集〕に軒にさすあやめは忍び返しかな正信〔埋木集〕三十億の内一股ついて見せむ心中のほどついひぢの忍び返しに忍びこえ正章〔榮華物語〕うらく木はたにまいり給伊周公月をゝるべにて卒都婆くぎぬきいとおほかる中にこれハこゞとのこのごろの事ぞかしされば少し白う見ゆれぞそのをりかく人々ものし給ひしかばいづれにかと尋ねまいりよらせ給へり其折とは長徳元年父道隆公兄道頼公なと薨ぜさせ給ひしといふ歟すこし白くみゆるは久敷ふりたるにあらぬそとはいふそれそとは釘貫とい卒都婆たつるめぐりの釘貫か又ハも數多ければ月あかりたゞ〳〵しくえらせらるゝなり古きをば垣にかくとあるそれにや〔菟玖波集〕にそとはみちたる山寺の垣といふ句に導譽法師戸をあくる内に佛を立ならべともみゆ〔今昔物語〕に關寺牛佛の條牛をば牛屋の上の方に「少し登て土葬にゝつ其上に卒都婆を起て釘貫差せり〔狹衣〕に門などもなくてたゞくぎぬきといふものをぞゝたりけり〔更級日記〕に清見が關ハかたつかたハ海なるに關屋どもあまた有て海まで釘ぬきゝたり云々異本〔源仁記〕に宮小路の釘貫は富樫霍童丸か宗持堅めしと北畠貢門烏帽子直垂にて是は三條内府病氣にて東山におはするを今出川殿に御尋可有事有

矢來　もがりさかもぎ

て秩參なり則給へと宣へ〔共宮經不審を立て開かす經なしと答ければ教親卿筆て用意して相益と以て開かれて早々御通りありと見ゆこれ〔埃嚢抄〕にいへる町々の城戸なり〇今門戸のかんぬきと云ものは關の木なり元來關と云ハ此木の名なり〔說文〕に關以木橫持門戶也といへり〔日知錄〕に古書を多く引て云々皆謂拒門之木後人因之遂謂門爲關也〔周禮〕司關注關界上之門といへり又むげに近きものにてこゝに似つかはしからねど〔一代女〕といふ雙子に江戸すきや橋の邊をいふに釘貫の木陰と有り天和貞享ころ迄ハ街の木戸のかこひをかくいへりとみゆ

因に云竹にて一種の垣を作りこれを朝鮮矢來といふハその國より使の來し時ゝそめたればなりその正徳元年七月朝鮮人來聘に付十二日觸書橫小路板にてやきり無用竹矢來喰ちがひ低く致し尤人の乘越不申程に仕り往來障りに不罷成候樣可仕事と此度始なるべしよの常に矢來といふものハ竹矢來のよしにてもがり成べしこれより已前にも竹矢來のとあれば寶曆をいふハ非なり〔卅二番職人歌合〕に竹賣が歌「手あたりのよき枝あれば折もうしはなのかこひのもがり竹めせ〔康熙字典〕に蕃雛曰虎落〔前漢鼂錯傳爲中周虎落〕註以竹篾相連遮落之也

もがりハもがるもぎもぐともはたらく詞なれば逆茂木などいふもぎもこれなり逆茂木ハ假字書なり〔夫木〕柿本影供百首後九條內大臣山ふかく八重のさかもぎひくとても世のうきとハ猶ぞかよはむ〔同集〕六條題述懷百首關後成「世中ハせきぞにふせぐさかもぎのもぎれはてぬる身にこそ有けれさかハ界のはぶきなり「枯はてゝもぎゝになりし昔より燒捨てられむ日をそはかれるといふも枝葉をもきたるなり〔源氏竹川〕よそにてハもぎゝなりとやさだむらんゝたに匂へる梅のはつ花〔抄〕に杭モキ〔廣韻〕もがりハ枝葉をもぎたるなれハ竹木にわたるべけれ樹無枝也と見ゆ

ば竹もがりといふなり〔烏帽子折草子〕にあのむかひに見えたる竹もがりの内こそ五郎太夫と申てえぼしの上手にさふらへと有りもがりい物をかけて乾なともする故えぼし折なぞい用あるなりまた家のかこひとす今い紺かきなどの染ものゝほし場に作るをのみもがりといふその造りやうむかしとかはれるいかこひのかたの用ならねいなり近くい貞享ころの絵に染ものを張てほす所の竹もがり垣の如く竪たる竹に絹どもい横に幕をひきたるやうにはりて乾たり紺かきも其ころまでいむかしの〔職人盡〕に見えたる如く女のわざなり〔五元集〕市隅竹と見て驚きたる竹もがり又今のやうなるもがりも慶長のころ有けるにや當時はやり歌に「江戸のもがりにさはりいするとよけてとをしやれたいりやくゝり毛といふい加藤清正身のたけ四尺三寸の袷胴の三里の程を多く過ざるに六尺三寸に餘れる馬に乘てあるかれしその馬を帝釋栗毛といふ是故にもがりに障るとうたひしとかや〔犬子集〕にばらりとちり花ぞめの袖春ながら嵐の音のたかもがり望一また〔安布良加須〕に及ばぬ戀をするぞおかしきせめて手を出せといひたき高もがり又卜養が蓮花をよめる狂歌にすらり〳〵ともあけてといへる詞い蓮葉の枝もなきものなればもぎあけてと云り西鶴などが草子に虎落者といへるとありこれい〔甲陽軍鑑〕などにも有ことはにて別のとなり箕山か〔風流大鏡〕にいひぶんを拵へ理を得るたくみなどする者なりといへり虎落い假字なり〔住吉物語〕情なき人の心ぞもがり船うきよをわたる便成らん此意ならば藻苅なり

又ふゝかきい鹿角と云ふ軍中などに用ゆさかもぎと大かた通はしいへども分ちていはゞさかもぎいもぎ木にて枝なきなりふゝがきい枝あるを用るにや〔三餘贅筆〕今宮府衙門列木於外謂之鹿角蓋鹿性警群居則環其角圍如陣以防人物之害軍中塞柵埋樹木外向又名曰鹿角また林逸か〔節用集〕逆茂木の下に小字にて逆頬と書たり逆茂木逆つらといへるい簽刺をさかとげといふの逆にて頬い外に向ふのよしにや是亦一說なり此さかつらい鹿角にひとし又軍中に敵の首を兜と共に取たるをもぎつけといふとかやもぐい首にいひつけい兜を添る意と聞ゆ

放出（ハナチイデ）〔源氏梅枝（うめがえ）〕ひんかしいなかのはなちいで〔花鳥〕に放出い母屋（モヤ）なり東の對のもやなり中といふい母屋と東西の廂との間に障子を立へだてたれば御帳を立たる處を中のはなち出といへるなり又〔若菜上〕みなみのおとゝのはなちいでにおましよそふ云々〔花鳥〕の說非なるべし中のはなち出とある中字に迷ひて母屋といへるいわろし〔今昔物語〕廿四第一語前の放出の隔子〔同巻第六語〕放出の廣庇ある板屋（放出をハフダシと訓を付たるハわろし）〔落窪一〕寢殿の放出のまた一間なる落窪なる處の二間なるになむ住せ給ふ猶所々に見ゆ是今世はなれ座敷やうの處ながらつゞきてい有るなり〔夏山雜談〕に放出といふ本殿より別に造り出したる處なり俗に小書院小座敷などいふが如し村名に放出といふ所あり中古莊園などより割出したる地名なるにや今いふ新在家などのごとき歟〔夫木〕河の歌師光「はなちでやとをりの川の朝朗堤むかひに舟よぶやたれはなちてい河内とあり

めだう〔桑花疑の巻〕道長公御殿造らせ給處そなたを北南とめだうをあけてみちをとゝのへ

作らせ給また三味堂を建らるゝ處に中にめんだうをあけさせ給ひて左右に僧房をたて又〔根合の巻〕四條の宮にわたらせたまひぬせばくおつかはしき心ちす北對をめんだうあけて西にゝ中宮そなたのらうあけておはしますと云々〔蜻蛉〕大將殿云々めたうのかたのさうじのほそくあきたるよりやをら見給へゝ云々め又〔枕草紙〕身をかへたらむ人はの條ほそぐのゝやり戸いとゝうおしあけたれば御湯殿のめだうよりおりてくる殿上人云々〔和名抄〕道路類辨色立成云馬道俗音来向多宇堂之道也〔夏山雜談〕に馬道といひ禁庭にて人の通り道なり馳道の記錄書のよしなりといへるゝわやし〔和名抄〕にも馳道と馬道とならび出て異なるよし明らか也〔江次第〕七日節會頭書にも馳道ゝ壺の道南庭の中に有と云り階の通りの正中なり馬道ゝ廊下なり故に轉訛してめんらうともいへり〔太平記三十〕こゝの馬道かしこの局にゝ聲もつゝます泣悲む云々又〔曾我物語〕勘當免さるゝ條めんらうの塵うち掃ひ又〔熊坂〕の謠曲に爰の面廊かしこのつまり云々是を〔拾葉抄〕に面廊とゝ權現造りの拜の屋を云なるべしとゝ何を心得たるにか廊ゝ社前ならでもあるものを〔安齋隨筆〕めんらういゝ面道也約めてめだうとも云馬道と書く面ゝ家の面也家の面の外廻りにある縁がはの事也廊下のごとく長くつゞく故めんらうともいふ但めんらういめんだうの轉語なりタとラと横通の音なりといへどこれいいたく誤れるにや音便にめんといへるを面と心得それを正しとおもたるよりこと〳〵く違へり〔和訓栞〕に〔繁露〕に止於馬道馬道許人上馬處也といひ〔和名抄〕云々今なめんだうといへり縁の事なりとぞといへるゝ

今の世縁がはのひさし垂木とけたとの間を塞ぐ板をめんだうと云ふこれは一間づゝ穴有ほめどゝいふにやとのゝるそれをいふにや心得がたし諸說いづれも明らかならず殊に安齋の說縁がはをいふゝ廊もめだうも縁がはもけぢめなし今いふ縁がはゝ簀子なり廊ゝはそぐの上にも見えたる如く對の屋などにわたる爲に設く縁がはとゝ異なりさてめだうゝ馬道にて馬に乘るべき處をいふゝ文字にてもゝるしこゝに用るところゝ異なれば〔和名抄〕にもたゝ向堂之道といふを引り往來すべき處の義に取て家の内にありくゝ處あるをいふ彼廊などよりおし通してその道あるべしこれ今世入側といふ疊敷たる縁のごと見ゆ入側とは殿の内の縁がはとゝいふ義なりざるなるべし〔中陽軍鑑〕喧嘩仕置之條武田の御殿ゝ公方家の作法也公方の屋形作りゝ第一諸人の付合に慮外なき事肝要故諸侍伺候いたすに縁ばかりあるくやうに造り給ふゝ中興鎌倉にて賴朝公より始りぬ其後尊氏公右の圖を以て都にて作り給ふ屋形造りの樣子人に緩怠なき爲なりとこれ入側にて即馬道なり〔天香樓偶得〕曰、都會之處謂之馬頭、以在當水陸衝要、冠蓋商旅之所聚集、舉馬以概車船、且舉馬頭、以概馬之全體也、〔同書〕又云、蠡園雌黃云々、所謂榮者東西南北皆有之矣、故李華含元殿賦、又有風雨交四榮之說、榮爲屋檐、即屋四垂也、又謂之楣、又之相屋棺兩頭起者爲榮、愚按榮之爲言爲榮屋之四周也、又今人屋前再展一架、其名曰廊、其上或用接檐、或用重檐、意者前榮即類此乎是人の集ふ街たを馬をもて名とするゝ今馬道を人の家の内往來する處の名に用ると似たり又〔和訓栞〕になめんだうといへるゝ家の内にいふとにゝわらじ建武元年の落書に四夷を靜めし鎌倉の右大將家の掟より只品

ありし武士も皆なめんだうにぞ今いなる云々又〔鵐鷺合戰物語〕一條禪閤文明八年奥書あり畿内近國の勢はせ集り在々所々なめんだうに爰に一手かしこに一手一騎一黨一家いへ〳〵の幕の紋おもひ〳〵の相ある〔夏山雜談〕にめんだうなるといふ諺ゝ著といふとなるにや田舍にてゝ著をめんだうと云笠をとるに三反して一交をなし十八反して卦をなすなり其仕樣の因循なればめんだうなる事と云ふ俗言に出たる成べしといへるゝ非なり〔源平盛衰記廿一〕箭だうなと云ふことば有り小坪合戰條に藤平實光和田小太郎に故實をいふ處敵一人をあまたして射ると有べからす箭だうなに相引しておやまちすな云々〔太平記十七〕にもみゆ十七の卷山門せめにゝ遠矢な射そ矢弊にと文字かくの如し此たうといふと上にいへると同じ語と聞ゆ是を今江戸の詞にいはゞ箭たうなといふ意ゝ費なる事をいふなり今俚語にむだいふはめだと同しめだをめつたとされば件の也たうなといふ意ゝ費なる事をいふなり今俚語にむだいふはめだと同しめだをめつたとされば件のなめんだうゝ名めんだくにや目めだくなに繁多なるなり又〔和訓栞〕に盛衰記に上らうなりとも契ゝ人によるべからずたとへ下らうなりと見えたり又めんどいとも云ふめれゝ目厭の義なるへしと云へるゝ未然らず不角が〔矢の根鍛冶後集上〕泣々膝へもたれかゝりし逢だうな子の木像の京下り會津遊鶴轉りては厭の意にも用る歟〔拾遺集〕國もち「宮つくるひたのたくみのてをのおとはどゝ〳〵おかるめをも見しかなめを見すると云こと〔異本保元物語〕に大庭平太景義爲朝に膝ふしを射られしを大庭弟景親がすくふ處に云く他人ゝ誰か助け申さん朝暮こめみせ玉ひつるゝいかゞこり玉ふかと云ひたのエめを見する

れゝ云々とあり小目みするとゝ常に辛くあたれるを云この目をみると云ゝ古言なり伊弉冊尊黄泉に吾に辱見せ給ふとの玉ふとあり

馬頭

又馬頭と云ゝ〔通鑑〕唐穆宗記に上於黎陽馬頭之至水次以便兵馬入船謂之馬頭かゝれば船もあらす〔天香樓偶得〕都會之處謂之馬頭以地當水陸衝要冠蓋商旅之所聚集舉馬以概車船且舉馬頭以概馬之全體也といへり

屋根

屋根〔古事記〕に鵜葺草葺不合命訓葺草云ふ加夜とありかやと云ゝ此字の如く屋を葺く草を云る名なり令合を阿閉と云なりすべて屋を葺合せて終るとなる故に葺終るを葺合すとゝ云なり〔六帖〕に思ふ人雨と降來る物ならば漏るわが屋根ゝ合せざらまし〔萬葉八〕はたすゝきおばな逆ふき黒木もて造れる家ゝ萬代までに上つ代ゝ大御殿をはしめ凡て草もて葺つればなりかやぶき本なるゆゑ板もて葺もかや足と重ねのをめぐらたるを云ふ〔又卷〕かやと云ふ葺方なとあり屋形ゝ字の如く屋の形なり車蓋をやかたと云ふ船ゝ更なり〔源平盛衰記廿三〕富士川に陣とる處に屋形ともを指上て閑に幔幕引て居たり舘をやかたと云て尊稱とすることゝ殿と申す類なり又たゞ家をやかと云ふ人名に家持なといへと常にいはぬやうなれと〔源氏あつまや〕に浮舟が三條のかくれがの處殿居人あやしき聲ぁたる夜行うちしてやかの辰巳のすみのくづれいとあやうしとありやかゝ家を云なり〔東雅〕に家制を儀禮また〔爾雅〕によりて云ふ其制五架なり正中の衡梁を棟と云ふむね也

卷かや葺屋形

まくさ

四阿　まや

のし葺　板葺　草葺

其次を履と云ふこれもや也分注にされい前後一ッづゝ二ッなりもやを母屋とおもらず古へにおもやと云ふ又その次なるを楣といふまぐさと云もの是なりこれも前後に一ッづゝ二つなり棟と屋と楣と合せ五架といふて楣の下門い戸を設くる所なれば楣い門戸のうへの横梁なりまぐさといへり屋の雨下の側をまやといふがとし又物の限りをきさといふ波限をなぎさと云ふが如しきさをくさといふい轉語なり屋の前後両旁の限りある横梁なるが故なり凡そ屋の内にあらねと門戸のうへの横梁をばまぐさといふとになりぬと云へり是屋作りの大よそなり屋根とい〔萬葉集〕に見えたり四阿い〔催馬樂〕にあつまやのまやのあまりのあまそゝぎわれたちぬれぬそのとひらかせ〔梁塵愚案抄〕に四阿い御所造などの四方に軒ありて雨垂の四方に落る屋なり兩下い臺の屋作りの兩方に雨水の落るを云ふ〔源平盛衰記十一〕青王山に金を送る條すなはち檜の材木をもつてはうきう作りの御堂をたてゝ云々是いはうきやうの訛りはうきうい寶形なるべし四阿の屋にして屋頂に寶珠の形を設るなり今俗只四方に屋の垂たるをはうぎよと云ふ〔甘露寺職人歌合〕檜皮葺軒つけをまつふきそむるひはだやのまたむねあはぬ戀もする哉今こけら葺いいづこよりともなけれと大かたはむねのかたよりふくにや檜皮のまた異なる歟

こけら葺

とり葺　瓦葺（後出）

取葺

〔太平記〕に常法にい四品已下平侍なんどい板葺草葺歟武家板葺のと上に引る〔海人藻芥〕にも見云々見ゆ諸太夫といへども武士の家い板葺草葺歟武家板葺のと上に引る〔海人藻芥〕にも見えたる〔北條五代記一〕早雲寺殿廿一條に四壁垣根犬のくゞり處を塞き拂さすべし下女つたなき軒を拔て焼き當座の事をまかなひ後の事を知らず萬事如此あるべし深く心得べしと有是い草葺と見ゆのし葺い板葺なれどもゆるをいふ歟こまひぬきを用ひず廣き板にてはりつめたる上を葺をいふとぞ寛正五年甲申四月〔糺河原勸進猿樂日記〕に棧敷の次第云々のし葺の分は已上御簾取ぶきの分い悉く蘆簾也舞臺のし葺西にひさし有り橋かゝりにもやねあり廣板ぶきかうらん竹

組押榑

こけら葺も今の製といいたくかはれりとこけらにて有けるを修理する事を云ふ處この堂建立の年記をかぞふれい七十餘年になりにけりと見えたりかく久しくたもつい葺板の厚きと量ねの多きともおもひ見るべし〔落穗集〕に江戸の昔の事をいひてこけら葺と申候い一ヶきいたし其外かやぶきなりと云へり〔西鶴織留〕に伏見の里なる質商人のとをいひて取葺屋根の軒のひくきを作事して兎ぶきに白かべ京格子を附ければ云々また〔永代藏草子〕にこれも同じ里の荒てはかなき職人なぞの住よしをいふ條に取葺屋根の輪扇の要制みと見えたり取ふき屋根といそぎ板を排次（ナラベ）て押へに石或い木の丸太なぞを載せ置なり今も諸國に此制あり屋根のかうはえ低くせざれば危しその輪といへるい上に置く石其儘にてい轉び易ければ木また竹にて輪を作りこれを敷て上に石を置なるべし屋上木石を置たる圖古書に多しこれも釘うてば石なと上るに及はねぞもそい料もあまたにてやすからねばさはせざる也古への

製木

の如くに組連ねて屋上に置を云なるべし又〔同書〕に襲木は右の押榑の上に太き木を横に置を云なるべし古畫に石を置たる體も見えたり貧家にい石をも置べしとあるい非桁の如く組たるものを組押といひそれに用る料の榑といふ意と聞ゆ此説いかゞあるべき思ふに襲木もそれに用る襲あるへし

檜皮

檜皮かぞふるに坪數にていふにや〔山城名勝志〕鳴瀧村の條に南長尾の保古文書を引て云ふ

井繩の事

一坪なぞいふが如く五尺井繩といい五尺四方なるべし〔同書〕に襲成多喜堂號願修理料檜皮捌拾井最上五尺井繩定直錢捌貫文代被宛行檜皮大夫紀恒弘也云々見ゆ今

かや足といひ又巻茅などいふ草かたもあれば五尺井繩もその長短として量る茅檜皮も同ときゝ板ぶきにも是をとのやうなれど檜皮八拾井とふるせしは束數のことにはあらじ

かきもてきて〔玉勝間〕に今世に一斗はかり入べき鍋釜を斗なわといふ事ありといへり是も

地葺

其法繩をもて定めしものとみゆ

地葺といふことその始い〔事跡合考〕に元祿年中の事をいふ處こけら又とち葺にてもすみやかにせんとするにかねてぐあひよく幾枚も地上にて葺て置き其儘持上り取合せの所にて釘ため致候間暫時に出來たり是急用のこけら屋根地葺といふとの始なりといへりこけらい柿字なり〔和名抄〕造作具に見えて削木の細片をいふ其魚鱗に似たればこけらといふとぞ是い一ひらのさまにより今いふこけら葺い魚鱗のならべるに似たればなり〔西鶴置土産〕に焼木も舟大工のこけらを用云々是い本義を失はす〔佐夜中山集〕鱗をば取ぶきにしてこけらず

さゝふき

し

とち葺とい二分とち三分とち或い五分とち〔作者を志らす天明の頃の記〕今六十餘歳とあり享保の中頃迄諸侯大夫の殿門表厚さとなるとち〔和名抄〕椽の義にや〔衣食住の記〕長屋の屋根い厚さ五寸七寸のこけら葺棟にい瓦を置烏飛と云ふ木を渡し井筒に天水桶を入れ火敵を添へ屋根に上置き腰板い栂檜（ツガヒノキ）の節なしきらびやかなりしに度々の火災ゆゑ用心の爲にとて瓦屋根に造り替腰板も腰瓦にかはれり江戸町々に火見やぐら出來長屋の壁に瓦を用る事此時なるべし又云小屋數町屋なぞい蠣殻を屋根へあげ軒に貝留を板にて打新見老人〔昔の物語〕に昔は江戸中に蠣殻葺四五軒ならでは見ず近年は大かた蠣殻葺となるとぞ享保十七年にかくいへり尚も火用心に瓦葺となり塗屋造りに替れり云々享保庚子年九月十七日繪の形品々有但組合數いろはの内へらを除き百千萬迄四十七組此内へ寺社門前町組合幷に本所深川分い一組より十六組まで都合六十三組右場所組分片山三七承りにて出來候よし

蠣殻葺

一町に火之見の高さ町屋家根棟より火之見棟迄九尺に定貳町程見通し候積り町々申合繪圖面通り喰違に火急上け可申候出火有之い板木にて爲知可申候

火の見

火之見の近所に風見の喚鐘釣置火之見番人兩人定置風有之喚鐘鳴候はゞ壹人の番人い火之見上り可申候段町中へ爲知可申候其時組合の町々申合人足用意仕罷在火之元念入申付出火有之候はゞ早速罷越打消大火に不相成樣可仕候享三年寅九月火之見櫓に番置候儀も來月中い風吹候時ばかり差置可申候十一月ハ晝夜差置可申候とあれば火之見櫓も享保よりあるに非ず又貞享元祿の頃尊ら屋根番と云とありて屋

屋根番

根に上り火を見る此も其居る所を作りて有しなるべし今も家々にある火の見と云もの是なるべし〔享保十四年日記〕十一月晦日麹町の儀去る未年土藏作塗屋に申付候今度見分相廻候處茅葺葉葺杉皮葺等の小屋有之蠣売屋根之分過半下地を塗不申仕方不屆千萬に候依之地主地借へ過料申付蠣売屋根の分ハ來戌三月中迄下地惣塗家作に致し屋根の義ハ土留迄に蠣売差置候分ハ勝手次第茅葺葉葺小屋杉皮葺の分ハ取拂はせ跡普請の義ハ土藏造塗家に致し可申之由麹町名主共只今迄の申付未熟故支配町々不埒に付押込申付候と町中不殘御觸あり

烏飛

烏飛といへるハからすおどしなるべし〔徒然草〕に後徳大寺の大臣の寢殿に鳶ゐさせじとて繩をはられたりけるを西行が見て鳶のゐたらむ何かはくるしかるべき此殿の御心さばかりにこそとて其後ハ參らざりけると聞傳る綾小路の宮のおはします小坂どの丶棟にいつそや繩をひかれたりしかば彼ためし思ひ出られ待りしにまとや烏のむれゐて池の蛙を取ければ御覽じ悲しませ給ひてなんと人の語りしと云り

屋根板

屋根に用る板是も前の記に屋根板ハ元文の末より杉を片出し月役と云ものこれ有りこけら葺の下地に用ひしが是も同頃より享保年中廣ごまひといふものを工夫し出し月役ハなく成りぬ〔兎下にハ杉皮葺を用云々廣ごまひ此時始て出來〔雍州府志〕土佐國産の內野根山所出之材其條理直而宜割板是稱野根板また長片といふ又方にして細長きものを月役と云ふ凡そ杉或ハ檜を一尺餘に伐り刀にて割たるを片板といふ屋を葺ふ是を葺板と云又皆木といひ桁ともいふもと安藝國より出し故に〔庭訓〕に安藝桁と稱すれども京師に專ら用るハ信濃國木曾山の産佐和良木を良とす小川氏か〔塵塚嘸〕文化十一年に歳七十八とそ我等二十歳頃迄ハ江戸の端々武家町屋共に多く蠣屋根にて有し也又月役といひて長さ一間に幅一寸四五分の割木をのおにしそれより板にて葺き其上に蠣殻を敷き幷ぶ月役ハ田舍にて婦女經行の節別居して其時の仕業に屋根に遣ふ割木を拵へし故に月役と名付しなり享保延享の頃ハのおいみな月役にて今の小舞貫ハ用ひざりしなり伊豆國七島などにても經行を他家とゝなへ住居を隔て小き藁ぶきの家を村々に作り置き經行臨産の節ハ右の他家へ遣し置となり經行の忌ハ七八日産婦ハ五十日も過て家に歸るよしなりといへりのおハ何のよしにか恐らくハのし地の略歟のし葺のと上田姫たやをやこぼす下紅葉〔良徳此句〔太子傳〕にも出つ〔油賀須〕に「客人やさしあひ有とかへるらむ他家の日數を待いうかれめ」

三階作瓦葺

江戸にて三階また瓦葺のと〔見聞集〕に今の江戸町の家作りを見れハ二階三階のとお葺瓦ぶきにて云々又慶長六年霜月二日するが町かうのじやう家より火出云々町中草ぶき故火事絶す此序に皆板葺になすべきよし御觸有て町悉く板葺に作る所に瀧山彌次兵衛といふ者諸人に秀て家を造らむとたくみ海道おもて棟より半分瓦にて葺うしろ半分をば板にてふきたり皆人さたをけるハ本町貳丁目瀧山彌次兵衛ハ家を半分瓦にて葺たり扨もめづらしやと褒美して異名を半瓦彌治兵衛と云ふ是江戸瓦葺の始なりといへり其後また華美になりしと見え

のち

正保二年江戸にて始て瓦を焼寺島氏某中氏彦六と云もの江戸瓦師元祖と云と武江

て友山云酉年迄い町方の普請叮嚀に有之大傳馬町佐久間と申町人の表屋を三階屋に仕二階三階にい黒ぬりにほたる串形窓を明ならべ候故殊の外目に立申たる事に候と有り思ふに回祿の度毎にほば〳〵家作り變れるにや寛文元年丑九月廿二日町觸町中わら葺茅葺小屋の屋根を土にて塗る事の御觸ありされば此頃やね土にて塗可ㇾ申候又同年十月廿八日藁葺茅葺小屋新規に作候義自今已後堅御法度の間左樣相心得可ㇾ申事猶寛文八年申九月晦日にも屋根を土にて塗るをぬりたるといふ（寛享三年日記）寅十月廿八日銀四匁六分五厘長左衛門殿へ相渡申候右は元大坂町太左衛門店欠落孫左衛門雜道具並九尺貳間の竹枝立のわら葺小屋一軒所ㇾ拂代銀なりなどゝみえたり

もさやうの庵屋町中に處々在しなり

因に云今の世土藏より庇を作り出して塗家にほたるをぬりたるといふ

と見ゆ（慶安四年辛卯日記）十一月廿日町觸河岸端にこもばりぬりたれの小屋仕間敷候若町中に立申處候はゝ五三日の内急度取可申事また（類柑子）北窓の條西北に並べる塗壁の間に一株の柳あり云々

檜楚　月役　めかくし　木舞軒づけ　間度

ほたち　窓穴細形　耻かき窓　ひじり窓　大和窓　ほのべ竹

青鎖　花さま　日暮門　廣徳寺門

くれそぎ（和名抄）造作具に檜楚比賀、俗用二檜榲一とあり楚い細きもの〻名なり魚に梵割木に楚（スハエ）字今按楚字是也（スハヤリ）氣條などの如し（東雅に）檜楚といへ（延喜式）に以檜竿爲天井といふい細木をいふに似たり

さはの反ぞなりとあるに從ふべし又（和名抄）同部に（説文）云榲壁柱也和名久禮（功程式）（東雅）

くれを切地生の屋

月役

今俗にくれといふものとも見えす東國の俗に地上の芝といふ草を土なから取て屋上を葺をくれを切なといひて坂の字を用ひてくれと讀なれとも古にいひしあづまなる埴生の屋なといふものゝ制にやあらむ（萬葉集抄）に古語に久といひ入に双ふ字讀てくれといふは近俗の制造せし字とも見えす屋ふくへき料の材をくれといひしこれらの事によれりと見えたりされば木に從ひ薄に從ふ字を假用ひてくれと讀しか只かの薄板となして屋をふくべきの義なり榲字の本義によれるにはあらす凡（和名抄）に注せし處かゝる事の分曉ならぬ事共もあるなりといへり檜は薄木の義をとれるにも有へし古書に榲とも書たる易きに隨ふにや（東雅）ひたすら屋をふくへき料としたるは彼芝を土なから起すをくれといふによれりされど（枕草紙）長谷詣の條榲階（グレハシ）（庭訓）に組押へ榲またくれ綠今はきりめならぬ横板のえんといふなどいへる必しも屋をふく料のみならす（和訓栞）にくれ材木にいふい木斷（キレ）の約まりたるにや又坂の字を用るとい土くれの略なるべしといへる其義穩にぞ聞ゆる今も材木の端を截たるをはなくれといふ其義かなへり但し薄木の義によれゝ丸き木のきれにいあらじ屋根板のとゝするも近きことにもあらず（下學集）榲不ㇾ知二木據一云々（日本俗爲二葺屋板一）（重雅）ゝこれに據れりと覺ゆ（沙石集巻五）伊豆の山寺の僧の物かたりに榲賣くれや召候とて馬につけて來るとあり後世に日光そぎ甲州そぎなどいへる類なり又彼月役といへるものなども大よそにいはむにゝ榲にて有べし月役ゝ木の長さを定め切て木口を水に打すれはひゞき入て擘に易しとぞ木のたけはゞゝ異なれとも彼とり葺屋根に

琵琶の甲ヤスの郡

用る板も其制同しかるべし○〔太平記〕六條責の所に西ハ羅生門の礎より東ハ八條河原の邊まて五六七八寸の琵琶の甲やす郡なとえらりぬきてまた〳〵かに塀を塗云々〔塵龍工隨筆〕にひはの甲ハ木二つに割れいわれたる方平に表の方ハ丸みの付て琵琶の甲に似たれいさもひたるにや疑らくハ今いふ樽木なるへき歟やすの郡ハ末の田樂樓鋪打所にも出てやすの郡より出る材木なるべし今木曾の尺一なと云が如けん

こまひ

こまひ〔下學集〕棍木舞とあり〔和名抄〕居宅具に〔文選〕に鏤檻搓とあるを引て加佐禮留乃岐乃須介と出たり字書をみるに搓ハ連〔椽之端〕とあるにより和名抄〕造作具〔唐韻〕搭柱支屋欹也今按和名須介〔揚氏漢語抄〕云棉椙和名同上とある和名件の搓と同く須介といふよりこの椙の字を出し又字をも誤りて棍とかけるなり須介の名ハ同じけれと物ハ異なり字書を檢するに〔廣韻〕椙桷端連綿木也とあれば〔和名抄〕棉字恐らくハ綿字ならむ今こまひをぬきといふは非なり柱に貫き通したる上をこそいふべけれ〔同書〕に欄額を波之良ぬきとよめり廣小舞は享保中始るしいふは非なり

まわたし

まわたし〔和名抄〕墻壁額〔漢書音義〕云壁帶謂壁中之横帶也今按未和多之〔功程式〕云問度と見えたり心得られずといへるが如く〔説文〕によれば今間柱といふものゝ如し古へ間度に竹を用ひしことなくすべて木を用ひし事とみゆ○また〔和名抄〕同部に助枝〔揚氏漢語抄〕云助枝之太知〔功程式〕云志達〔東雅〕壁中の横帶〔説文〕樽字注樽壁柱西京謂之壁帶」

ふたち

櫛形の窓　恥かき窓　大和窓

また門戸類に〔説文〕云牖、穿壁以木爲交窓也和名末度窓在墻曰牖とみゆ今茶室なとに下地窓といふものハ牖字に當れり下地ハ助枝なるへし又下立の義か〔建保職人歌合〕壁ぬりが戀歌「忍へともたたにハなるふるかへのたゞこぼれなる我なみだ哉下地窓といふもの今ハ寒竹と葭とを格子にして藤かつら纏ひて風流に作れるもと壁下地のまはたしてまひ竹をあらはして土を落し窓とまたるが侘しき所にある是なり〔夫木集〕源慈圓「上壁に窓ありのこすいほまてもすさめすやとる秋の夜の月古き前句附つひ塀か明〳〵袴から見りや立附の下地まど窓を穴と云〔徒然草〕に内裏作り出されて遷幸近くなりけるに玄輝門院御覽じて閑院殿のくしがたの穴ハ丸く縁もなくてぞ有りしと仰られけるこれハえうの入て木にてふちをまたりければあやまりにてなはされにけりくしがたハ櫛の形なりえうの入たるハ今の火塔口の形をいふえうとハ葉字にてくりかた入をいふ鎧の杏葉またえう器なと有り

下地窓

元あるまじき處に窓あくる事〔源氏物語繪合〕畵師を召て秘してかゝする處にわりなき窓をあけてといふ事なりこれと事異ながら〔目覺草〕德峰老人利休ほろびて後のことをいふ處、されぞすきの道猶たへずして茶好の男再びこの道を起し當流とぞいひけるみな人この男のまねして云々ある時ハ土壇を高く築て數寄屋を作り遠山を詠めむとて窓をあけたり是より皆人地を高く築て數寄屋を作り改め窓を明たり其家にあるまじきかたなれど窓なくてハ叶ふまじとて內々住居のみ苦しきかたの見え渡るともいはず窓をあくれば暗かき窓にてぞ有けるやまと窓〔寛永發句帳〕唐までの月をぞ思ふ大和窓〔新竹齋物語〕都鄙の家ごとにやまと窓と

窓集錄　五元屋窓　矮世浮雲　年中要用　正月以來　宅務屋　三日雨　雪之始　房錄　免貧民

住むものに雪ふる時にその屋賃を免して出させぬもなり

いふあり是も伊豫簾さぬき圓座なぞい其國より出る名物なるによりて其名を云ふ窓をやまといいふもその國より始て仕出したる巧みにやさにていい侍らず文字を大和と心得るゆゑ義理聞えず此窓い家内に明りをとらむため又い竈の烟を出す道なるゆゑ日本窓と書侍りひのもとゝ唱ふれい煙の縁語も薄く籠れり云々按ずるに今いふ引窓なり爰の説によれば是も例のなぞ〳〵の様なる名なり此窓の製古き者に見えす〔五元集〕倒猿の引窓つたふをぐれ哉

引窓

突上げ窓

〔遺老物語〕永祿以來出來初る事種々の内、ぬれ縁、突上ヶ窓、出來始りしい天正の初泉州堺の津に北向道珍といひしわひずき屋敷狹うして窓を取へき處なき故にすき屋の屋ねを切破り明りをとりしなり○寛文七年に集めたる〔續山井〕に蛛の巢や二階椿の虫籠窓道之とある

虫籠窓

い細かに子を打たる窓なるべし今も窓の出格子を虫籠と呼ものあり又〔同集〕に「色紙窓にとべる盤や金砂子友靜これら形によりての名なるべし計無否が〔園治〕に風窓式の内氷裂雨截三截梅花圓鏡六方等の式ありその内梅花い心釘を轉じて一瓣づゝ開くやうに造ると見ゆまた峭壁の條に峭壁者窟壁理也、藉以粉壁爲紙、以石爲繪也、理者相石皺紋、倣古人筆意、植黄山松柏古梅美竹、攺之圓窓、宛然鏡遊也、など巧みなる事とも有されともやり戸の製なきい不自由なるとなり〔槐西雜志〕に書師張無念、書齋以巨幅澗紙爲窓幔、不著一櫺、取其明也、これい窓の障子骨なきなり又窓櫺なり○ひじり窓と云ふい出格子といかはりて箱のやうに作り出して連子も短き子を雜へざるなりといへり紀逸が〔六玉川三篇〕に「ひじり窓をもふらぬ錫杖といふ句あり思ふに西鶴等が書るものにひじりわんどうといふ小巷にさゝやかなる

ひじり窓

窓をかまへて居る賣女が軒にある行燈をいへりこのすこしの出格子の窓をいふかもしさもあらば窓がもとにてそれにかけたる行燈なればひじりの名あるかいづれともいまだわきまへずなん又押あてに思ふに高野ひじりの笈に其體の似たるが行燈もそれが用ゆる程なるの名にや

ふの一竹

〔義理物語〕に雨もをやみて壁下地のふのみのべ竹政直又〔雍州府志〕竹の條に一種其葦細長、面其葉片大子集〕さゑづらば鳥さし棹もふのべ竹政直也、是稱女竹、又謂忍竹、建是比並而爲垣、又半破之、縱横結束、爲牆壁之骨、ふのべい節延なるべし江戸などにいふの竹と略呼す

青瑣

門戸の青瑣い門のみならず車の腰御倚子經机その外着物に此透しあり立筋を青く塗たるなり又〔瓚會〕凡物刻鏤實結交加爲連瑣文者皆曰瑣非特門に設る事い漢代帝王の門の制なり門鏤也なと見えたりこゝにて青瑣といふものい猪の眼の如き彫かたありて其内に立筋を刻みて塗その間を透すものなりこれを眼象なりといへる説もあれど誤なり眼象い猪の目にてその戸扉に花狹間とて種々の文を彫刻して透したるに金箔を置き彩色するものもとこの青瑣より出たる歟貞徳が〔淀河〕に「玉章をこよひ鼠にひかれけり

花ざま

の枝に付ものなり花ざまより訛りひきたるにや

枝に油やぬりし花ざま玉づさは水草

日暮し門

日暮の門といふ事〔雍州府志〕聚樂城の條下に外にい黒門日暮し門あり黒門といふい鉄をもてこれを飾り日暮し門い鳥獸草木等を彫刻すその美麗なるを諸人見とれて日の暮るゝをさ

廣徳寺の門

らざれば名づく又〔世の人心草子第五〕都につゞく伏見の里むかしの春ハ日暮しの御門とて詠めし所も問びき柴の畠となり云々〔按に〔永代藏〕に此御門は越の君の御館といへり江戸には〔落穗集〕に〔駿州侯ノ御門處から人通りも多く見物人の絶る間もなく其頃世間に於て日暮しの御門と申よし云々まるしたり〕○廣徳寺の門といふ諺ハ〔續新齋夜話〕といふ物に元祿のころ天台座主下谷なる廣徳寺の門を御覽ありて此門にハ故あるべしとてたくみ等に仰て尋ね給ふある番匠の申やうこれを造りし者あやまりて一尺低くせしを悔みてありしが身まかれる時に其よし妻に語りしを申傳へて侍ると申ければさてハ我おもへる事とはそむけり江戸ハ平野の地にして風行高からず其心がまへして造りしよと思ひしい古へ柏原の御門羅城門を高しとて一尺きらせ給ひしをたくみ等低きに過むと思ひて五寸切て一尺と僞り申せしを叡覽有ていまだ五寸高し初めより一尺五寸きらすべかりしをあしく見てけりと仰られしに人みなふるひおのゝきて云々の由奏しければ其儘にして置れしに果して三度迄風に傾きたりとぞかやうの事を其者に聞せなば後悔せまじきものをとぞ仰ける〔此文拙要なり〕實に此門今に至るまで風火の災なきよしみゆ按るに廣徳寺の門の諺〔江戸砂子、新篇江戸志〕等にも見えず其後の諺といふ物だといふことをハやれてからとく寺のもんだといらるされは此言ハどういふ物だかういふ物だといふことをハやれてからとく寺のもんだといひしが行はれたるを附會して設けたる說なり柏原の帝の御事ハ〔小世繼〕に出たり又江戸の地勢風行の事をいふ處ハ鳩巢の〔獻可錄〕をとりて書り昔淨藏貴所八坂塔の傾たる時祈りて直したりとぞ〔朝巷瑣語〕に余兒時、郡庠明倫堂敬、郡主謀堅直之、計費不貲、時有金姓者云々自陳能神聳不假人力、費止三金、如數給之金、以銀市紙筆硃砂錫鏹米肉、每起貼硃砂符、

釣殿
泉殿
透廊
千貫樋

一道設祭祀焚錫鏹鳴鑼數次、其堂立正、後濠股塔偏、亦用前法堅直之、と云へり小說とるに足らされども似たるとなり

釣殿　泉殿　千貫樋　能舞臺　日藏　長明か方丈　宗鑑か褌の額　鮑　かなばし　雪隱　後架　婦人小便　厠籌　草紙　臺所　御厨子　おする名　逆柱　厠ひとの、はこ、

釣殿〔頼聚國史〕云文徳天皇仁壽三年閏三月丙午朔、戀興幸太政大臣東京染殿第觀櫻花、云々天皇御釣臺觀釣魚云々〔增鏡〕に寶治二年十月廿日ころ宇治に御幸し給ふ云々平等院の釣殿に御舟よせおりさせ給ふ〔釣殿舊跡は川邊なりと云〕〔源氏常夏〕いとわつき日ひんがしの釣殿に出給ひてすゞみ給ふ又〔宇津保祭使〕大將殿つり殿に出給ふなどとらせ給ふ〔拾芥抄〕に釣殿院とも見えたりたるなり古書に多くみゆ廊をつゞけて池水の上に四方なる屋を作るすみをかけたる板敷な

り又泉殿といふも大やう同じとなり是ハ泉の湧出る處に作りしなるべし〔古事談〕に入道殿東三條を造らるゝ條千貫の泉透廊と有ハ樋にて長く通したる處に渡る透廊をいふにや透廊ハ回廊に細き木を竪にはげく打たる窓有て透て見ゆるなり泉字を家字に書たる本もあるハ非なり今も東海道三島に千貫樋といふがあり西鶴〔諸國咄〕に信州の事をいふ所兩村の大勢千貫樋にむらがり云々見えたればいづくにも云と云なるべし〔宇治拾遺七〕長谷寺參籠の男の條にえもいはぬ馬かな是ぞ千貫がけなと云にやあらむとあるハ目方の重さを云なるべし千貫の重物を負て馳するにや

能舞

鎌倉殿中の差圖に能舞臺及橋がゝりを圖して是を泉殿と書たり〔春湊浪話〕に昔の泉殿のあ
りしをすぐに猿樂能をする所に用ひしより舞臺とのみいひて泉殿といふ名ゝ廢れたるなる
べしといへり泉水なければ泉殿と云べからず舞臺ゝ是を學びて作れ共舞をみる爲なれば高
く作りて異やうにはなりぬ京師清水の舞臺にゝ非ずされば舊本〔今昔
物語〕には撿非違使忠明清水の橋殿にして京童と諍をして云々の物語あり物みる爲のさじ
きと云ものゝ書記に假殿八間云々假殿此云佐受枳とあり〔和名抄〕〔類聚國史〕云假床、此間
云佐受枳、今按假搆屋內床之名也とある抔ゝ字に付て云るのみなりさすきゝ後世に物みる
爲に構るさじきなり〔書紀釋〕に今世棧敷歟と云り棧敷ゝ押あてに作り書るなり之に依て唱

橋殿さじき

日藏ひさし

もや庇

日藏諸書に多くみゆ〔海人藻芥〕に月卿雲客の亭寢殿にも日藏不可有之云々今いふひさし
なり其內これゝ霧よけなどいふ類と見えたりひさしのと正明が〔年々隨筆〕に古へひさしと
いふゝ身屋廂と分別して南庇ゝまろうをすうる所もやも同じ殿のうちなり今時いふゝ座
おくばかりひろきもあれど桁より別に屋根葺おろしたる所にて尾張あたりの民家にゝかや
ぶき葺ひさしのみ多かりさる所をひさしといひしと物語抔にゝみえねど〔日觀集〕に「草の
庵に軒のあやめをふきつればひとひさしさす心地こそすれとあるゝ今時いふひさしなり今
時ゝ庇をおろすといふをこゝにゝさすと有り母屋庇といふひさしも日影のさし入義なるべ
ければ今時のゝ更なりといへり物語等に見えずといふゝ非なり日藏是なりさすといふ傘をさ

すなどゝ同じく日を避るなるべし長明か〔方丈記〕に南に假のひかくしをさし出して竹のす
のこをおき云々見えたり又はしかくしといふゝ階のうへを覆ひたる屋をいふ也次てに云
長明が古跡ゝ〔醍醐隨筆〕に日野の外山に鴨の長明か方丈を作れる遺跡云々こゝなん其あと
よといへば見めぐりけるに山のこしのかけたる處より二丈ばかりなる岩のさし出て西のか
たはるかに伏見淀などの川の面舟の行かふも見ゆればおもおろけれど下ゝ谷なれば目もあ
やうく心やすからず云々かの取置自在に作りなしたる方丈の室をこの岩上に置たらんゝ東
の山おろしはげしく下の谷へ吹落してんかりのやどりといへと心やすからずゝ往かひ有ま
じ世移り時かはりて陵谷變遷するにや昔ゝ斯ゝあらじと思ふ、於方丈石上戲作、已出瑞雞
入化城、長明心鏡不長明、遺音猶有和歌在、石上松風々雅聲「鶯の山おのかもとめて入月の
たえぬ光をなに恨むらんとゝ彼〔方丈記〕の終に「月影ゝ入山の端もつらかりき絕ぬ光をみ
るよしもかなとある歌を詩にも歌にもよめるなれど是ゝ長明か歌にはあらず〔新勅撰〕釋教
の部にありて源季廣か歌なり此古跡にゝ後鳥羽院ゝ二度まで御幸ありしと僧心敬が〔私語〕
にいへりよく見てよしといひけん山の如く山水のめでたきも人からによる事なり
ぞに依て作る屋を云ふ山の岸そばだつけしきもし嶋りていへ共もとかけなるへし文字にも崖を懸崖と云これなり嶮道を
和名にやまのかけちと云り〔夫木抄〕躰「打ばより離の竹にかたかけて風をたよりのさゝかにの糸〔後京極〕かた岸にあら
ぬ軒ばのたよりにもかけつくりなるさゝかにの宿〔信實〕又同人
の歌「かけつくる谷のいほりの軒はより雫もながし五月雨の頃」〔百もの語〕に或人山崎の宗鑑が庵を見物
せしとて語りけるゝ入口の額に擧し語おぞけたるかる口なり、上の客人立かへり、中の客人
日かへり、とまり客人下の下と見えたり何故の滑稽なる歟〔阿羅野集〕下々の下の客といは

宗鑑が庵の額

野分にまたみかうしもまいはおすにはあたれるんや云也源氏

れむ花の宿〔越人〕といふ何いこのことによれりとみゆ妙喜庵い山崎寶寺の麓にあり宗鑑此地に住りといいへどこの菴其時のさまを移したりやいかゞ〔山城名勝志〕に或云妙喜庵功叔い豐臣秀吉公聞近僧也公渡〔御當庵〕時千利休獻〔茶々店殘〕在于今〔云々宗鑑法師幽〕居于此地〔とあり今俗茶人い更なり常の人も家に遍額かくるとも禪家を學びてするなりつねに茶人などゝ拙筆の如もされぬと書たる其心も會せず其中にいみじき不祥のことなどもわきまへず高貴の人の茶の宗匠などの書たるを風雅ひてかゝけ當くいとをかし床の懸物などもまたかくるい徒〔組〕にも多く人の園池をみるに家の作り物ずきあしく俗惡なる聯額などあまたかくるい徒に勝地の不幸をまし山靈の嘔噦を貽すこれ江南の賈豎におらざれは必江北の閹官也と云り

柱かくし

柱かくし漢に是を楹帖といふ〔甌北詩集〕に金子友來乞〔楹帖〕其家住〔太平寺旁門臨〕大池余爲〔書鳥宿〕池邊樹僧敲〔月下門〕一聯適有〔尼菴亦來乞〕桃符憧奴不〔知即以〕此付〔之〕一時見者傳爲〔笑資賦此戲解〕とて七律一首あり〔五元集拾遺〕格枝亭柱かくし「空や秋水ゆりはなす山おろし〔雅筵醉狂集〕ある茶人より柱かくしに竹をかきたる畵の歌望みければ「千尋ある陰の柱とかくれてや浮世に侘の茶湯する宿

鉋

百工そのことをよくせむとするに必まづその器をえらぶとかや古い物とに備はらぬと多し鉋なども今のやうなるいなくて削たるものも木賊などにてむらをとりしなり故に椋の葉みがき鼻あふらひくなどいふ諺あり〔無名抄〕に業平の家の柱いちまき柱にてとあるもとさらにまたるにいあらじ今の鉋い突かんなと云ふ百年已前に始れりとそ〔東雅〕に云かなは古時に

まかな

いまかなといへり〔萬葉〕の歌に眞鉋と有〔和名抄〕に引ところ辨色立成に曲刀（マカナ）とあるせし是なり今猶その物あり俗にやりかなと云もの〳〵屬にまさぐりといふ物是なり鉋い鉋を誤れる者掃部助久國と云ふ大永四年甲申八月と奥書あり其書中に今世の鉋をもて木を削る處あり大永い三百餘年の昔なり此器其頃あれども用る者すくなかりし歟又い繪の轉寫によりて誤りし歟まちずかし〔事跡合考〕に柳島村なる一故家予が聞たるは小村井村の名主某落家にて鎌倉盛時の古文書など有とぞ今の鉋なき時作りたるとて其家の柱皆鉋鉋にて削りたる物今に存在すとある彼ちまき柱も其作る處の器によりてあかるものと思はる鎗鉋にて作りたる戸なども稀にあり此器にて削りたるも手をこめて磨きなどあたらむい刀痕も有べからず寛文八年の頃江戸の流行を集めた

鉋かんな

る短歌に肥前本ぶしやりがんな又〔松の落葉〕棟上踊り小歌「のこぎりこぶつら引まはし一筆書てやりがんな云々南部大佛殿柱立ときりくぎきたるやつきかんなあくまそなたへやりがんな　また今桶作る者の六尺桶井戸かはら等の大きなる桶作るに用る鉋い正直といふ此も近ごろの名にいあらす〔望一千句〕正直のかうへをてらす月日影秋の夜をかけ桶をゆふなり〔後撰夷曲集〕正直な人をば守る印にい社ろ〳〵に仕ふかんなぎ

正直

もち

もち〔和名抄〕考聲切韻を引て鋸鑽也〔漢語抄〕に毛遅とあり明衡の〔新猿樂記〕に大工の容顏をいふ處臂者曲尺肩者鋸柄足者鐵槌也、などいへり諸家これを詳ならずおもふに此器鐵にて作り戻る物なれば俗に鋸字を當て用ひなれたるを字書によりて注したるより分らぬ事と

かなばし

なりぬるかこれ恐らくハ今いふ釘ぬきにや木の道にも何にも必用の具なるをこれなくはあらし〔後三年合戰繪詞〕に將軍義家兵に命じて千任か舌を抜ふむる處にかなばしにて引出すとあり凡箸といふハ一條（スヂ）なるを折曲て兩の端相對ひたるか本義なりされども其圖をみるに今の釘抜に同じ今かなものゝ匠ハ唐剪刀の如きものをきりばし（ハサミ）と云りかなばしに似たる剪刀なればなかいふ歟〔沙石集卷二〕眞言の法をいふ所これを譬へハ釘抜のさをハ如來の加持力座ハ法界力我手ハ以我功德力なり釘抜のより合て大なる釘をたやすく抜が如し重障のものぞこるとおのづからあらハれ侍りかたし（紋にあるゝ釘ぬきといふも其器の兩端の向ひ合たるに似たれはなり關戸などの釘ぬきは其義にあらす上に見ゆ）

三妻錐（ミツメギリ）

持たれば異名にハ三妻錐と申けり云々是も五節に拍子をかへて取障る人なき宿にハ三妻錐こそ揉合（モミアフ）なれ穴廣々々ひろき穴かなとはやしけり錐をきりと云ハ切る具なるに夫をもむとも云るハ同言なりと云りされハ〔靈異記〕に鑽（キリ）をきり又もみとあれば古へよりもむとも云しなり

臺所

臺所〔海人藻芥〕に御厨子所内裏仙洞の外ハ諸宮は不可申而るに御室にハ寛平法皇の御時より御厨子所と申傳へたり常に貴所にハ臺所と稱之又膳所なと稱之歟臺盤所と申所ハ内裏仙洞執柄家に在又内裏の御厨子所をハ臺所とも可申にや臺所の別當とて中臈の女房の中に然るへき仁体を撰ばれて此職に被補云々〔源氏〕に横河の僧都母を伴ひて宇治の院にやとる處下すゞもみなはか〳〵しきハみづし所抔あるべかしき事ともをかゝるわたりに

御末

いハそぐものなりければ（食物のまうけをとも人々するなり）所といふハ〔著聞集十六〕臺所のさたしける女房ともみゆまた〔海人藻芥〕に内裏に御すると申にや近ごろハ其外にも御すると申とかやとあり（〔義輝將軍御成記〕永祿四年三月木下吉御殿御末迄御座數據北平張打爲御末衆）今も是を傳へて大家にハ御末といへり狹衣に宰相のいもうとに辨君そひて大將の堀川の御所へ入給ふ所道季思ふさまなる御つぼねし出てすゑなとあつかひありくとあるを〔下紐〕にすゑ俗のお末と云ふといへりされとこれハ御局し出て居なとあつかひにハあらぬにや中居は〔北條五代記〕早崇寺殿廿一ヶ條にたく臺とハ御臺所なと申も女ハもとより中付臺所中居の火の廻り我々見廻りか夕には器物の名なるかやかて食物の名となり食物のとなと預り給ふとなればなり臺ハ食物居るとこなり食物の中にハ飯に勝るものなければ飯を臺といふ〔源氏夕霧〕おはとなふらなこいそき參らせて御臺なとこなたにて參らせ給ふ又たれもゝ〳〵御臺參りなとしてのとかになりぬるひるつかた云々みな飯くふ事をいへり

中居臺

御臺所

御厨子

御所大御所

御臺所武家御妻の尊稱たり〔東鑑〕九月二日御臺所自伊豆山遷秋戸鄉給、不奉知武衛安否、猶漂悲涙給之所、今日申刻土肥彌太郎遠平、爲御使自眞名鶴崎參着〔阿州將裔記〕云將軍義植公の御臺を清雲院殿と申き安齋ハ御臺盤所の略稱なりといへり御厨子所といふも厨子ハ物置棚にて臺所にあるものなり御厨子黑たなとて後にハ結構手を盡してもてあつかふもゝと臺所物ゆゑ烟薰ばり黑みたるをもて黑棚といふとそ將軍家を御所と稱し同御父を大御所と稱すると鎌倉の時より成べし〔東鑑〕文治元年四月廿一日梶原平三訴廷尉不義曰景

逆柱

時爲御所進士云々といへり大御所い〔同書〕建仁二年九月六日被候〻大御所（將軍御遺跡當時尼御臺所御座とあり）〔秋草〕に是らの號を足利家の初代よりのとなるへしと云るいかゞ〔太平記〕道譽京洛の處六間の會所に大紋の疊敷雙へ木曾脇繪花瓶云々ありこれ客殿對面所なり〔長祿二年已來申次記〕云正月十四日御會一獻有之同上樣の御在處也其時撿挍も參りて平家を申也（在所則御會處の御座間なり）さか柱逆柱ある家いやなりなどするものとか按するに〔談苑〕に造〕屋主人不〕恤〕匠者則匠者以〕法厭〕主人〔木上鋭下肚、乃創〕大就〕小、倒〕植之〕如〕是者凶と云りこゝにい呪ひことしてするわざい聞えず等閑に心つかて用るといへ有もすべしこれによりて怪き事ありといふは俗説にてうけがたき事なり其故い割木のまさ目なるい本すゑのけぢめもいはず用ひて物を造るにあらずや逆さまなるいくらも有べし結搆美を盡したる造營なとにいことさらに彫物なとを逆に轉倒さたる柱も有り凡物滿たるい缺るとの微意にやあらん〔筌蹄輪〕にいろは五十韻に「のこる手跡い床のかけもの「おそろしや枕返を逆柱といふ句も右の俗説によれり（恩院智垂木に挿める傘なども故あるにや）何もの〻筆ずさみにか唯〔雜記〕とある物に京に住む人とかや狸の所爲とて夜ごとに家をゆる事ありて祈禱などさまざまくすれども更にゝるしなくてせんすべなしと語りけるを鈍全聞て一首の狂歌をよみて贈りける「石すゑの柱うこかばけたぬきのさはりとなりて住うかるらん是にや感じけむ其後い家ゆる事やみけるとそ（鈍全は甘露寺殿の雜掌寺田宮内といふ者こそ）又火災を避る歌とて傳ふる「霜柱氷の垂木雪の桁雨の棟木に露の葺草といへるい紀逸か〔雜語抄〕に能登國鴉島の何某が家い九百年來に及ふといへりかの棟札に云々弘法大師の御筆のよしに

厠

ひとの

はこ

て火防の歌とて人々用ひ來れりと有り時代もさらぬ人の傳へなり

厠　かはやと訓ずるい古へ河のうへに構へたる故なり古くかはとのみもいひたりしい今もまるといふ器をかはともいへる是なりかはやといふべき事い〔古事記傳〕に〔古事記中卷〕大物主神の大后とせむ美人を求め給ふ條に自爲大便溝流下（クソヒル）〔古事記傳〕にかばやまたは小碓命倭健御子の兄を捕ふる處に朝署入厠（カハヤ）之時またかはとのみいひたりしい〔萬葉〕詠香塔厠屎鮒奴歌あり古も河なき家も多かるへけれど厠いかはやなるが本義なればいづくにてもかはやと云しなるべし其上かはやといいさゝかの溝をもかはといふなり然るを〔東雅〕にかはやの義不詳舊説に高野山の地形悉く曼陀羅の義を表す故に不潔をとゝむる事をゆるさず溷厠をば必ず河上に架するをもてかはやといふなりといふさらば此山開けざらん世にいかにやいひぬらんといへるい深く考へざるによりてなり高野の舊説もとより取にたらず但し河のうへにかまへきつるい古製の名殘なるべし中昔にいひとのといへり槭殿なるべし〔和名抄〕坐臥具、槭癌、説文云槭音威和名比癌也〔國語〕注云癌音捉行清厠と見えたり〔和名抄〕の河海類にい〔淮南子〕云決塘發槭許愼云槭所以通陂瀆、和名以比といへり古くも此字比とのみもよみたりいひと云も同しとなり〔和名抄〕いたゝ其物の世に云なれたるによりてなるべし歌に多く泄のいひなど諺て言ひの詞をそへて讀り是水を通す樋の事なり俗にとひと云是にい大小あり信實朝臣の〔今物語〕にひとの〻と有此ひとの〻内に虎子清器等を置て用ひたるあとは洗したるなり御厠人樋洗といふ者い其役を勤むる下女なり筥に尿まる故にはこする共いひ其器をまるとも云ふ

志のばこ厠の筥か又私の筥にてもあるべし〔左傳〕襄十五年に師曠過と宋朝將私焉杜注私謂小便とあれご私は二便ともにいふへしふのはこゝ又は屎の常なる歟

雪隱ハ雪竇の明覺禪師靈隱寺に持淨の職を司とりし故に雪隱の名あり後架も禪家の名にて小便所をいふ厠と同く心得るハ非なり其外くさ〳〵悉く〔後筆錄〕にもるしつればこゝにいはず昔人厠に入にハ足駄をはきたり〔古事談三〕叡山の平燈大德或日朝に河屋に居たりけるが足駄ばかりを踏脫て跡を暗まし失たりとありまた〔福富雙紙〕にも足駄はきて厠に居る畫あり但し厠の作やうによりてなるか然りともおもはれず

後架

婦人小便

厠籌草紙

因に云婦人の小便する事〔今昔廿九〕若き女夏の頃近衛大路を西さまに行けるに小一條と云ハ宗形なる其北面を行ける程に小便の急なりけるにや築垣に向ひて南面に突居て尿をしけれハ共に有ける女の童ハ大路に立て今や爲畢て立々と思ひ立りける云々男みるにそこを通りける男なり寛に女の中結て市女笠着たる築垣に向て蹲り居たり云々是を見れば京都の婦人も昔は立ながら小便するとはなかりしなり後に田舍風の移りて今のやうにはなれるならん蹲りてするとは今にては江戸のみにや其外は大かた立てするなり〔說郛〕の〔眞臘風土記〕に每二三兩家爲一坑蓋其草滿則塡之又別堀地爲之凡登溷既畢必入池洗淨止用左手右手留以拿飯見唐人登厠用紙揩拭者笑之甚至不欲其登門婦女亦有立而溺者可哂々々と云ればさる漢土にも婦人の立てするといなきを知べしまた洗淨するに左手を用ると天竺の俗なり〔南海寄歸傳〕に便利の事委く見えたり其法瓶水を持また丸めたる土を厠の外に置これをとり、て厠に入左の手にてその土と水とを用ひて洗ふ又籌庁を用るとも有といへり原文繁多なれ則ハ抄出せず

けり又のいかゝしけるそかたちにすくなくともをかりに或人の字なりと云ハかなはずと

庭

假山

島

籌ハ胡元瑞が〔甲乙剩言〕に唐の代の美人驚々と北齊の文宣帝との事を擧たりこゝにて今も邊鄙の所にハ紙を用ひず草木の葉わらを用るなり漢土にも厠に用ゆる紙ハ一種麁紙あり〔照世杯〕に穆家新玩の條に厠を建て報條を書く所本宅願貼草紙とありこゝにも江戸にてすきがへしを草紙がみといふ讃と草ともいへこれはその事にはあらず昔此紙に鱗形屋の紛紙摺たれば草子紙と云なり〔箋絨輪〕垢で留つた居風呂の漏「不掃除に長雪隱が止む木曾路〔五元集〕に「かはかうや竹田へかへる雲の暮是ハ〔職人盡〕のかはかうにハ非ずかはゝまるなりかうハ買はむ也即肥とりを云京師の俗に小便買といふ者もとより有り〔續の原〕春の朝なを舍利唱へける一排山城の小便買も長閑なり其角

庭　假山　島　立石方位家案山　心字池　鴉會　花石綱　枯山水　前栽　蒔砂立砂、志らす

這入口　林帷　障日花舟　名苑致忠か事　路次植物　建仁寺　庭掃　草賣

庭を作る事〔日本紀〕推古帝二十年自百濟國有化來者其面身皆斑白云々臣有小才能構山岳之形其留臣而用爲國有利云々仍令構須彌山形及呉橋於南庭時人號其人曰路子工亦名芝耆麻呂云々また同三十四年五月戊子朔丁未大臣薨云々家於飛鳥河之傍乃庭中開小池仍興小島於池中故時人曰島大臣大臣は蘇我馬子なり　また〔齊明紀〕三年秋七月都貨邏國男一人女四人漂泊于築紫云々乃以驛召辛亥作須彌山像於飛鳥寺西且設盂蘭盆會繼都貨邏蝦夷云々同五年三月云々吐火羅人共妻舍衛婦人來甲午甘檮丘東之川上造須彌山而繼陸奥與越上池邊作須彌山高如廟塔以繼肅愼四十七人云々見えたり庭に山水の景を造るを島といひしも其故なり又須彌山を作ら

れしい始め路子工が爲㆓國有㆒利といひたるに任せられしより後度々其事ありしい故ある事歟或は孟蘭盆會をなし又夷人を饗せらるゝ佛氏に功德の爲に山を造る事ある歟是とハ異ながら我國の禮にも大嘗會に山を造るいも壯觀な事とするなれハ須彌山も同しき歟

山齋作歌三首、平之能須牟伎美我許乃之麻家布美禮婆安之婢乃波奈毛左伎爾家流可毋㆓伊勢物語㆒むかしたかきこと　申女御云々の　山齋いまそかりけるそのみわさにまうて給てかへさに山科の禪師のみこおはしますその山ゐなの宮に灑おとし水はしらせなどしておもしろくつくられたるにまうて給ふて云々宮つかへのはしめにたゝなをやはあるへき三條の大御幸せし時紀の國の千里の濱に有けるいとおもしろき石たてまつりきおはみゆきの後たてまつれしかいある人の御さうしのまへのみそに居たりしを島このみ給ふきみなりこの石を奉らむとの給ひて御隨身とねりしてとりにつかはすいくはくもなくてもてきぬこの石きゝしよりいみるいまされり云々（山科の禪師親王ハ仁明天皇の四のみこ三條の大御幸ハ㆓三代實錄㆒貞觀八年三月右大臣眞相の百花亭にみゆきありしなり）本居氏の說に　愚目山齋云々の　山齋いまそかりけるそのみわさにまうて給てかへさに山科の禪師のみこおはしますその山ゐなの宮に灑おとし水はしらせなどしておもしろくつくられたるにまうて給ふて云々宮つかへのはしめにたゝなをやはあるへき三條の大御幸せし時紀の國の千里の濱に有けるいとおもしろき石たてまつりきおはみゆきの後たてまつれしかいある人の御さうしのまへのみそに居たりしを島このみ給ふきみなりこの石を奉らむとの給ひて御隨身とねりしてとりにつかはすいくはくもなくてもてきぬこの石きゝしよりいみるいまされり云々古言なり島山ともよめり㆒伊勢物語㆒に島好み給ふ君なりといへるも庭を好み給ふなり㆒萬葉略解㆒もその說に從ひ注しながら愚目山齋と點を付たるい注と訓點といたかひたり山齋をゐまと訓むにい愚目を漢籍よみにせむこといかゞ

心字の池㆒源氏物語㆒さとの殿いすりしきだくみつかさに宣旨くだりてになうあらため造らせ給ふもとの木立山のたゝずまひおもしろき處なるを池のこゝろひろくゐなしてめてたう造りのゝしる云々池の心とい歌にも多くよめり詩にも碧波心裏なと作れり懷といふも同し程の義なり後世心字の形に池を作るいこれらのことより轉りたる歟

立石

古へ石を居るを立といふ㆒源氏物語㆒所のさまをゞさらにもいはずつくりなしたる心はへ水たち立石前栽なとのありさまえもいはぬ入江の水なと繪にかゝば心のいたりすくなからん（入道の家といふ所又㆒松風㆒前栽ともの折ふしたるなどつくろはせ給ふこゝかしこの立石ともゝみなまろびうせたるをなさけありてゐなさいをかしかりぬへき所かな（大井の家といふ所㆒山家集㆒）に「庭の石に目たつる人もなからましかとあるさまに立しれかずい是い山城國大覺寺の東大澤の池にある庭湖石をよめる也巨勢金岡か石也といひ傳へり㆒山家集㆒云大覺寺の金岡が立たる石を見てとあり今大澤の池中有㆓大石㆒號㆓庭湖石㆒金岡所㆑立石乎庭湖石と漢土の太湖石の名をとりていふにや後京極殿（良經公）の㆒作庭記㆒に昔しの上手のたて置たる有さまをあとゝして家主の趣意を心にかけて我風情をめくらしてゐたつべき也云々廣貴か云石い荒涼に立べからす東北院に蓮仲法師がたつる處の石禁忌を犯せる事一ッ侍る延園阿闍梨い石をたつる事相傳を得たる人なり予又その文書を傳へたり如此相營て大旨を心得たりといへども風情盡ることなくして心及ばさる事多し但近來この事委くゐれる人なし云々高陽院殿修造の時も石をたつる人みなうせてたゞ〳〵さもやとて召つけられたりしものもいと御心にかなはすとてそれをばさるとにて宇治殿御みづから御さたありき其時にい常に參りて石を立ると能々見聞侍りきなど樹木水石のことをも細やかに書れたりこいその傳へも古く立花などの後に作り設たる法といひとしきものならす（されともこれ是風水堪輿の說を傳へたる也堪輿家の說によき墓地を得れば必發跡すと云へり㆒三餘偶筆㆒地厥の條

に黄簇洲曰葬地一說、君子所不道、就其說而論之、今凡三變、每變而愈下、周官之法、亡言形法者已爲變矣再變而爲方位、形法理之顯者也、方位理之晦者也、三變而爲三元、白法方位一定不易者也、三元白法隨時改換者也、其法即曆書所載云々充彼之說以求吉地、必一年一改葬而後可、是故方位者地理中之邪說也、三元白法者又邪說中之邪說矣〔葛卿贅筆〕昔有兒人營一墓兆甚佳、考亭先生題二語于壁、曰此地不發是無地理、此地若發是無天理、後竟爲震害擊毀、誠哉是言也、といへりよくおもふべし〔西湖遊覽志餘〕に大師蔡京か父の葬を臨平山に葬る此山龜形をなす塔を山頂に作る游江を帶とし會稽山を案山とす術家に於て誠にすぐれたる地所なり蔡京すでに富貴を極めしか一旦傾覆して其眷族も亡ふるに至るされい俗師風水の說憑るに足らすと云へり此事いもと陸游が〔入蜀記〕にいへり

方位家案山

案山子

案山とい向へる山を案几に表したるなり山のみならす葬穴に對峙する山なき時は樹木なとをも案山とするなり案山の文字〔禪錄〕などにも出たり

こゝにて鳥をゑしのかゝしを或い案山子と書く是い山寺の禪僧なと戲れに書たるよりの事なるべしもとより其義なき事也〔後撰戀六〕源のかねきかすみ侍りける女の母云々「小山田のをとろかしにもこざりしをいとひたふるに逃し君哉ひたい鳴子なりをとろかしいかゝし〔伊勢物語〕みよしのゝたのむのかりもひたふるに君か方にそよるとなくなる鴨長明〔無名抄〕に人の歌を評するにたとへば石を尋ね人のよき石を得すしてちいさき石をもとりあつめてめでたくさしわはせつゝ立たれどいかにもまとの大きなる石にいおとれるやうにわ

山水を作る

ざとゑたるが失にて侍るなりと見ゆ又庭を作るに松をうへべき所にい岩をたて池をほり花をさかすへき地にい山を築き眺望をなすが如し〔東鑑十二〕阿閣梨靜空が弟子靜玄法師に二階堂の石を立さする所にのすぢ鶏會と云とみゆのすぢい野筋なり鶏會い鳥合の義歟但鶏の羽はす石と云ともあれば鳥の居集まるべき所の石にてもあるべし

假山水

〔尺素往來〕に假山水い海檨、池檨、泉檨、遣水檨、岩井檨、細谷川檨、枯山水檨、山形、野形、洲濱形、葦手形等、立石者、海川石、野山石、流波石、水分石、逃石、追石、添石、離石、起石、臥石、鷗鷺羽千石、鴛鴦並居石、三尊形、品文字等、瀧落者、絲落、布落、離落、傳落、重落等、摸國々名所、合建立之候と有り名目大概出たれ共猶數多あるべし此內に枯山水を古寫本にもフルセンスイと訓あるいわろし枯を古と誤りたる本ありて後人まがひて點を付たるにや音にてよむべし〔作庭記〕に池もなく遣水もなき所に石を立るこれを枯山水と名付くその枯山水のやうい片山の岸或い野筋なとを作りてそれに取付て石を立るなりと有り〔神代記〕に青山を枯山となすとあれは枯山水の枯をからと訓し點い非なるべし野筋〔夫木廿八〕慈鎭和尙「夏木立庭の野すぢの石の上にみちて色こき深み草かな又按るに今庭にせんすいといふいもと山水なるを池にのみいふい非なりそは泉水の心にや池い泉のみにもあらす

鶏會

野筋枯山水

前栽

前栽い庭前に草木を植たるを云其料にすへき草木をいへるい〔藤原長能集〕嵯峨野に前栽はりにまかりて「日くらしに見れともあかす女郎花野へにやこよひ旅寢せなまし〔枕草紙〕御

もと金閣寺と云ハ資治通鑑唐代宗大曆二年造金閣寺於五臺山鍍銅塗金爲瓦所費鉅億時王澄爲相給中書符牒令五臺僧數十人散之四方求利以營之といへり

まへハつはなれハ前栽なぞうへませ結ていとおかし又前栽合などあり今俗前栽を野菜にのみいふハ非なり〔萬葉十四〕に宇惠多氣能毛頭左倍登與美は植竹也〔同十九〕吾屋戸能植木橘〔二十〕に宇具比須波宇惠木之樹間乎云々あり又〔古事記〕景行天皇の記中に意富迦波良能宇惠具佐とハ大河原の植草なり今俗にハ竹木草木をみな植木と云ひそを商ふものをうえ木やと云ふさて植木とハ人の植たるのみをいふにもあらず生ひ立てなるを謂なり竹も草も然り

時砂

まさごいさごすなご

庭に砂を敷と有り京師淨土寺村慈照寺ハ慈照院義政公閑居の處なり東山殿と稱す方丈の東北に書院有り同仁齋と云ふ此處四疊半敷なり後世茶室四疊半ハ是に本づく方丈の南ハ庭にて二重の閣ありいはゆる銀閣なり庭上に白砂を圍く敷たり昔より敷來りしに銀閣ハ大北山なる鹿苑寺の金閣を摸されたりとかや金閣ハ鹿苑院義滿公退居の處後小松院行幸ありし時造られたり〔足利治亂記〕應永十五年前相國義滿入道々義公當春北山花叡覽に備らるべしとて北山の處々に新殿を十三處かまへ天子御座の殿をハ八棟に作りて八龍を立て金色に彩りたり御殿の西北の二方にハ早咲の櫻を並樹に植させ其間の庭にハ五色の砂を鱗形にふきとし有然らハ銀閣の庭の敷砂古體なるべし〔舊本今昔〕寛蓮菲打の女に値の物語に前の庭に籬結ひて前栽をなむ可笑く植て砂なぞ蒔たり賤の小家なれども故ありて住なしたりとみゆ

〔圓珠菴雜記〕にまさごハいさごまなごすなごハ多くまなごとよめり後の歌にすなごすなごハ見えたるに木草のたゝずまひ迄もなへてならす云々〔落窪〕三條の家作りたる處にげにみれば作りさまいとあらまはしうすなごふかせすだれかけさせなぞす云々〔夫木集〕光俊の歌秋風に軒はの椎の落くれハ庭に黑石まくかとそみる石ハ白黑なにをも蒔べし茶人ハなち黑をかこひ茶室の外に並へて敷すくなきハ物はしそうにてわしゝ又色々形をなして蒔とハ〔作庭記〕に砂のとハ云ざれとも河の汀の白濱ハすさきの如くとがりくはがたの如くえり入べきなり云々また島姿の樣々山島、野島、杜島、磯島、雲形、霞形、洲濱形、片流、千鳥、松皮等なり云々霞形二かさね三かさねにも成べし洲濱形ハ常の如し但とうるはしく紺の紋なとの如くなるハわろし云々松皮樣ハまつかはすりの如くちかひたる樣にてたきれぬべきやうに見ゆる處あるべしと有り其地の形を樣々に作るとのみにあらす白濱といひ白洲といふみな砂を蒔ところとおもはるる松皮形なとハ鱗形に近かるべし松皮とて紺屋の染かたのやうなるハ嫌ふよしさも有べし〔康富記〕に康正二年十月八日立砂下知云々なとあるハ今も貴人の通行する所また神祭に大路を淨め水うちと云ハもと白洲よりいひ來れる歟また白砂の下略にや〔徒然草〕に庭のかはかさるにとみに銀屑を敷たるをいみじと思ひけるハはづかしかりき庭の儀を奉行する人かはき砂を設くるハ故實なりといへる事あり常にハ形よく一處に積置てか樣に用意ある成べし〔犬子集〕に休甫卯花ハ庭にちり敷白砂かなと云にや又芝生を切て道を作るをも云へし〔夫木〕芝を「百敷の庭のきり芝ふる雪にこれを限とぬれし袖かな光俊

島姿の樣々

立砂

ふらす

遣入口

今世に家に入所をはひり口と云遣入ハ門の入口をはひり口といふなり〔源氏〕にいさゝの間ありく所をはひ渡ると云是なり〔古事記傳〕波比岐神の注〔後撰集春上〕云々躬恒「いもか家はひりに植る青柳に今やなくらむ鶯の聲」契沖云〔夫木〕〔和泉式部集〕見にと來る人たにもなし我宿のはひりの柳下はらへとも〔堀川百首〕柴の屋のはひりの庭におく蚊火の烟うるさき夏の夕暮これらを思ふに門より舍屋の內に入までの間の庭をはひりといひしなりはひりたゝ歩入にて今世の言には入るをはひるといふ云これなり云々はひりハ古へ然るべき家にてハ大庭といひ今世にハ玄關白洲などいふなる所云々

林帷

林帷〔萬葉廿〕六日內庭假植樹木〔以作〕林帷而爲〔肆宴〕歌一首、打奈婢久波流流等毛之流久宇具比須波宇惠木之樹間乎奈伎和多良奈牟、六日ハ天平二年正月なり帷ハ〔和名抄〕加太比良園也、以自障圍也とみゆ林帷とハ木を連ね植て帷のかはりとするなるべし然らハ幕に用ひて日除の爲にハ非じ樹を日除にするハ常のとなからいと興あるハ明人揚循吉が〔吳中故語〕に錢曄常熟之富人也云々、其亭用等〔封侯〕園池之勝、蓋爲〔江南甲冠〕嘗於〔池中〕築〔一亭〕夏月宴〔客〕則登焉、客既集則去〔橋不〕得〔輒去〕亭皆四空〔嫌〕日色蒸照〔則取〕大方舟實以〔土〕上種〔名花〕作〔高屏〕視〔日所〕至牽而障焉、と見えたりまた揚誠齋東園小步詩、醉來忽墮錦網窩、無奈〔桃園李繞何〕八角小亭無〔處〕坐、見花多處背花多

又幕を張て花を養ふとあり〔王安石集〕に越人以〔幕養〕花、因遊〔其下〕二首、幕天無〔日地無塵、百紫千紅占得〕春、野草自花還自落、々時還有〔惜〕花人、尙有〔殘紅已可〕悲、更愛回〔首抵〕空枝、莫嗟身世渾無事、睡〔過春風〕作〔惡時〕、

假山

世に假山を作るに四條嵯峨の二流有といふ四條ハ後嵯峨の御門を云嵯峨流ハ天流寺開祖夢窓國師水石を好みて造りたる庭多ければそれより出たる也京師にハ古き庭とも今に遺りたる多し〔雍州府志〕に雙林寺〔東山寺中文阿彌が庭また紫野大德寺の大川院の假山いづれも相阿彌が作る處龍安寺方丈いもと細川勝元の書院にて其庭の水石みな勝元の布置なりとぞ又紀伊郡遍照心院の條下、大通寺方丈有〔假山〕是謂〔小善之所〕經營也、南都春日山中院屋之假山、稱善之所作、然則對〔此善〕稱〔小善〕者乎、善未〔詳〕僧俗之別也とみゆ遍照心院ハ大通寺といふ尼寺なり俗に六孫王といふハ經基の住所にて其社あれハなり小善といふハ比丘尼の名のやうに思はる

庭石

庭石ハ今の如くありく路の敷石の如くするハ茶室などより起りしにやもとハ立たるゆゑ立石といふそれに立かたわろけれハたゝるる事なと有と云ハ漢土風水の說によれりとみゆまた立石ハ太湖石を置となとも擬したるべし宋の代ハ風水堪輿の說行はれたる時なれハ入宋の沙門等傳へたる事多からむ宋の徽宗登極の初め方士が堪輿の說に隨ひ京城東北の隅を高く築かゝめしを後その工役を興し山を高うして壽山艮嶽と名け梁師成といふものにその事を董さしめまた朱勔といふ者ありて淛といふ所の珍らしき花木竹石を取て進らす是を名けて花石綱といふ〔舟舡相繼一運爲一綱明人吳風錄に朱勔子孫居〔虎丘之麓、倘以〔種藝疊山、爲〔業遊〕於王侯之門、俗呼爲〔花園子、其曾者歲時擷〔花鬻〕於吳城、而桑廊之事衰矣〕

花石綱

よりて應奉局を平

江といふ所にたて〳〵人夫を驅て危き巖に登り深き薮に入て殘る隈なく捜り求め一草一木にても手當あしければ罪せらる江湖もまたさの如くその運送する道に障るものい城郭をも壞てとはすに至るその費計るべからす府庫の貯を竭して凡六年を經て出來ぬ靈壁の一石高さ二十餘丈長嚴の一石高さ四十餘丈といふ世に大湖石を重んするの始めなり飛閣高樓美麗を極め珍禽異獸も悉く集る又これを萬歲山と呼しかをわづかに十年ありて金の國より軍をおこして攻る時大雪ふりて薪乏しかりければ百姓等十萬人萬歲山を踏破り臺樹宮室一宇も殘らず打毀ぬこの時に當りて官軍も禁ずるとあたいずさしも古今に比ひなしと誇りたりしも一夕の薪となりて亡びたりとぞ（されども山ハのこりて其後修造して金元これを減めす侈りを加へて亡ひた又明に至て其勝概を存し登臨して鑒戒となす宣德御製「廣寒殿記」これなり）史を見るに土木の工役に費を究めたりしい隋煬帝なり始め洛陽顯仁宮を營み大江以南五嶺以北の奇材異石を集め又海內の草木禽獸の珍奇なるものを苑囿に實つ又遠き江水を引き旁に柳を植て長安より江都と云所まで連る其間に離宮四十餘を作りて往來遊行す西苑周り二百里其中に廻り十餘里の海を作り龍舟雜艦數萬艘を遊幸の用とす遙萊方丈等の諸山を高さ百餘尺に爲り臺觀宮殿山上に羅絡すこの海の北に渠ありて縈紆りて海に注く渠に緣て十六院ありて門皆水に臨み華麗云へからす樹の花かるれい作り華を綴る沼にい荷芰なとをも作る色渝れい新きを易ふ月夜を好みて宮女數千騎を從へてこの西苑に遊ひ馬上に清夜遊の曲を奏せしむ其外所々に河をはり又米倉なと多く作れると限りなし

また明の熹宗い宮中に在て手細工を好み小樓閣を製らる彫鏤清絶なり斧斤を常に手ばなさ

すおいしける魏忠賢その細工の少しひまあるを伺ひて諸部院の章奏を進らすれば大かた忠賢に任せて看せしむこの故に內官權勢日に重く成行く事を帝これを悟らすと（池北偶談）に老官監が言へる由見ゆ（同書九）に元臣崚々曰宋徽宗諸事皆能獨不能爲君耳又或書又周正夫曰仁宗皇帝百事不會只會做官家此語在崚々之前可謂絕對子曰君子多哉不多眞哉乎

石燈籠

石灯籠古代い庭に石燈籠を置となし石燈籠い寺社の物なるを茶湯者取て庭に置て見物とす（指月集）い藤村庸軒が茶話なるを久須見鵜巢が筆記したるなり宇遜庵が書る異傳あり田邊希明が元祿十四年の跋文みゆ其內に近きころより石灯燈の大振なるが晴嵐陰雨に年經たるを尋ね厚うして望む人不少今名高く聞ゆる春日の祓堂の灯籠二月堂にも建長六年十月十五日と彫付たる古代の物あり京にて高桐院の燈籠利休所持今當院有之又云或時宗旦老人久須見鵜巢茶席にて咄し申侍りき昔い砂利土を置て山路の面影をうつしつるに今い砂利い堅く打て手水鉢のあたりに老人いすべりさうにあやうし手水鉢も今い前の後山路所々砂利の出たるを見て面白く思ひかく置れたる故古人砂利を置と云て笑ふ云々休利休なり雨ざりしなり（類柑子）茅場町住居の事をいふ處南の隅なる所に灯の袋をかゝけて鵜舟と名く

砂利置

石灯籠蚊屋にきえ行てぶねかなつまむ時には似合しからすや（こはいとよき名ながら雪など降

致忠が事

致忠か事〔江談〕に備後守致忠、買閑院」爲」家、欲」施」泉石、金一兩にて石一ッを買ふ、このと洛中に風聞して是を業とする者奇石を爭ひて賣らむとする時に致忠今ハ不」買といひけれハ石賣ものせんかたなく門前に打捨たりければやがてその風流なる石ぞともをえらみて立たるよし見えたり致忠が姦詐なるにくむへし按るにこれ漢土錢塘の故事なり〔世說〕に晉人沈姓なる者會稽の縣令たりしが塘を築くに詭りて土一番を錢一番に易むといひて土多く集りたる時今ハ用なしといひければ土賣せんすべなく打捨たるをやがて用ひて築きしかば錢塘と名づくとあれぞこれもそら言にて秦漢已前よりこの縣名ハ見えたり

路次植物

路次植物〔貞德文集〕に路次御作立候哉利休時代迄松竹岩苔等計植置く所近年ハ樅柏槇多維葉未」聞見」唐木集め被」植候更に殊勝不」存候佗數寄不」似候外路次內路次構可」然候唯禪家山居隱者通世者住居移由申傳候間思々相構掃除簡要也

大江佐國

大江佐國宅ハ圓宗寺の向なりと云〔長明發心集〕云或人圓宗寺の八講に參りたりけるに時まつ程其あたり近き人の家に立入たりけるに其家ハと廣くもあらず庭前栽をえもいはず木と草ろゑて色々の花かずを盡して錦を打れはへる如く見えたり云々主の云をのれハ佐國と申す博士の子にて侍り父世に侍りし時ふかく花を興して折につけて是を翫ひ侍りき且其心さしをハ詩にも作れり六十餘回看不足他生定作」愛」花人佐國ハ播磨國諸越の產なり二人靜の謠曲にもハろこしの佐國とうたふ是なり〔東見記系圖〕等にも見えたり掃部頭從五位上なり平生花を愛す六十餘回看不」厭と云詩ハ〔新撰朗詠〕に見ゆ又〔本朝無題詩〕に翫卯花尋訪村

建仁寺垣

野酔濁醪と云詩あり

竹垣萩垣種々あれと今江戶にて專らふとき竹を四ッ割にして垣とするを建仁寺といふ近きハ此寺もとよりよき竹有しと見えて〔醒睡笑〕唯有といふこゝ見えて物にもふるさずされぞも此寺もらひに使者を遣られし時狂歌「呉竹のふしみにハ條長岡殿伏見より雄長老の許へ旗竿をもあらてはる〳〵と京迄切にのぼり棹かなもかわるなれと建仁寺垣も又思ふに〔雍州府志〕に忍竹建此比並爲垣と有り忍竹を建るを省きのに見えざれハ試に云なり近頃茶事ます〳〵はやりて猫の額ばかりの庭にもかの青竹のふときをもみ糠なぞにて磨きけんにんじといふものにわらび繩もていかめしく結めぐらしずんぐ切とて大木を半より截たるを植みかげ石のきらめける石燈籠手水鉢の大なるを置き飛石といへぞ大石を地の明たる處もなき迄敷並べたるハ見るめもうとましこれたゞ人情野鄙になりて價の高下をもてさたするより〳〵るぞもに任せてさするなり世にはやればそれをよしとする俗人さらにわれのれか見解なしこれのみならすこのとよろづにわたるべしすべて粉飾勝たるハ天然の致なし廣からむ處に灯籠なぞあまたあらんハうるさし〔園治〕に大木ハ石よりも得難く水ハ大木よりも得がたしといへり〔洛陽名園記〕苗帥が園を第一とす大樹百尺むかひ峙ちて山の如く竹百餘竿あり水流に十石の舟をうかぶべし大松七ッあり水これを環れり是にて其勝概を知らる天然の趣ハ鉅麗を闘はすにあらす古ハ庭作るといへば上に見えたる如く凡下のふる事にあらぬ故是を業とする植木屋なぞもなかりしなり〔著聞集〕に或なま侍のもとに草賣きけるを只今かはりな

草賣

かりけれい其草かしおけと云けるを草賣打聞て「あさましやかりといいかにあさことに草にかけたる露の命をと草花などを作りて賣あるく者い有しとみゆそも多かりとも聞えす〔枕草紙〕雪山の條こもりといふもの、築地のはざまにひさしさしてゐたる抔に木守山守とて有り御庭木など守る者なるべしとあれば是庭守なり〔三十二番職人盡歌合〕農人につがひて

庭守

庭掃といふ者あり掃除する事を役とする者なればか木草の枝などきりすかすなどせしなるべし其歌「名にたてるこや庭はきに家の風はなをわか世の朝きよめかな「すてやらぬ世をいいかにかすへはゝきはらふも庭の塵のみながら、」此等今世のうゑ木や庭作りなどなるべし

庭に松葉を散す

庭に松葉を散こと今人い霜除のためと思へりもとさにいあらすと見えて〔貞徳御傘（ホウ）〕に盧次に松葉まくも赤葉なれぞも其志い松を愛してする事なれば植物になるなり云々因云江戸にて塵捨ると明暦元年未十一月永代浦に札立置候　此所に芥捨可申事寛文五年巳四月五日ごみ捨賃向後ハ節句前に其町々名主方迄ごみ捨之者取に參候間名主方に其前かどに集置相渡可申候同五月十六日今度町中へごみ溜穢仰付候其内へ捨可申候云々寛文七年未五月九日延寶九年酉六月晦日同年十一月一日元祿九年子四月朔日又同十二年卯三月十九日などごみ捨の事に付て御觸有〔園治〕といふ書有り表題に名園巧武奪（ウバフ）天工ともいふべし崇禎辛未自叙あり作者許無否とありもと畫人といへり關同荊浩が筆意を好めり畫工い此わさに巧なる者あるべしされば〔今昔物語〕に百濟川成と云ふ繪師あり世に並なき者なり濕殿の石もこの川成か疊みたるなりと見えたりさて〔園治〕興造論に世人專ら匠を鳩るを要とするい三分い匠七分い主人といふ諺を聞ざるにや古へ公輸が奇巧陸雲が精藝も其人みづから斧斤を執りしものにいあらじ匠者いたゝ彫鏤排架の巧精しきのみなり凡造作いかならす

園林

先地を相て基を立廣狹を量り方曲に隨ひて宜きを得べし拘牽すべからす〔風水家の說なとを用ひさる事知るべし是主人七分の所なり但し園林い主人い什か九にして匠者い什が一なるべし主人七分と云ハ家作にいふなり〕凡園林い因借の二ッに巧なるべしこれ匠作の爲べきにあらすもし主人其事に不堪ならいよき人を選みて用ゆべし因とい基勢の高下體形の端正に隨ひて木を礙（カテ）梔を删し泉石互に相資け或い亭を立あるい榭を作る其宜にかなふべし借とい園の內外を分つといへども景を得むとい遠近に拘るとなく晴巒碧秀紺宇空を淺ぐ極目俗ならいこれを屏く是巧にして體を得るものなり又云借景い園林の最肝要なり、遠借、隣借、仰借、俯借、應時て借る物情逗る所目寄て心期す其意筆の先にありて描寫するが如しなどいへり

小庭

〔年山記聞〕に〔萬葉廿〕家持歌「八千種に草木をうゑて時とにさかむ花をしみつゝ」このはなを〔御釋〕歐陽永叔種花詩云、淺深紅白宜相間、先後仍須次第栽、我欲四時携酒去、莫教一日不花開、これ國い和漢をわかち人い先後を隔てたれどよく似たる歌なり

家々の名所

小庭にても四時花を見むと思はゝ草花にまくはなし花壇を作り時節の花を何にまれ植かへ〳〵せむい生花に勝れり

八景

〔類柑子〕家々の名所といふ條勝概奇絕をつくされたる殿づくり表いいらかにし茅にして遠石兩公の物數寄をふるはせ給ふ庭山い細川殿の國石土佐殿の良材島津殿の蘇鐵家々領分の名木をあつめ云々鄙の住居をやつして春耕し秋收る業五十三次の羇旅をまふけ云々いへる世に名高き名苑と聞えたり〔明和二年干柳點前句附雲ケのないが御庭の不足なり〕八景〔白石手簡〕に八景の始い宋人畝元人い世に名高き名苑と聞えたり

近江八景

盆山

太湖石

歟にて宋復古と申畫工山水に妙を得たるか一軸を畫けり凡一代の絕作に候を人々其興ある處に名を題して終に八ッの名出來候と申是より好事の人詩をも題咏してそれを又八ッとし候亞ゝ沈約が八詠樓に倣ひ候共申歟本邦にて取はやし候ゝ東山公方の御物の玉澗が八景候故と聞え候されと此方の景をそれに擬しけるゝ慶長元和の比ほひ京の圓光寺の長老故有て近江の國に居の時に近江の景を瀟湘八景の題を用ひて摸され候を時の堂上衆歌も侍らひしか是近江八景と申物に候是より國郡ゝ扱置當時大名旗本衆中の別業山莊等に八景のなきゝ無き樣に成來り爰かしこより詩なと心得る者歌なと心得候者に詩歌を望まれ候異國に八景と名付候に十も二十も候八ッに限らぬ事に候或ゝ詠と云或ゝ勝又境又絕とも申其名其數も定らぬ事勿論に候本邦世俗に景としてゝ夜雨秋月歸帆落鴈ならぬゝなく候餘り不雅なる事にや云々

契沖の〔雜々記〕近き世妙壽院惺窩翁と聞え人市原山莊に八景を名付て各其歌をよまる云々此歌ともいかにいへるとにか心得かたきと多してにはのたかひなど和歌の家に生れたる人ともおほえす其子爲景卿丈山なと云詩人を彼山莊に招て此歌を出して詩を作らしめらるをほつかなきとなり

盆山太湖石　石菖鉢假山菊紋石、釣ものぶ　砂石打ちいふと　礬山　盆繪　水上砂繪

今盆山といふのみを盆山とゝ云す〔狂言記五十番〕に盆山といふがあり庭石を盆みに來る者その石の陰にかくるゝ狂言なり石を疊める山なるべし又石臺といふもの花を植るのみにて

袁宏道園亭紀畧云徐陽卿園在閶門外下塘堂側有土隴甚高多古木上有太湖石名端雲峰三峯高丈餘巧妍甲于江南相傳朱面舟中石盤縱橫不見之不知底所沈幾許取得後爲鳥程董氏果行未因取得鳥去至中流舟覆募善沒者取之須臾盤石忽浮水而出今爲徐氏有范長白云此石長至夜分間光燭空神物亦有矣識

此石を呼ふももと石を置たる故なりこれ即盆石なり〔寬永發句帳〕年々のつぎ木や臺の作り花「盆山にそだてゝ見ばや石の竹漢土にゝ太湖石をめでたり〔西廂記〕墻角聯吟の條、小生先潛身、在「太湖石畔墻角兒頭」から繪につくねゝ芋の形して穴の多く明たる石ある是なり〔吳風錄〕に今吳中富豪競以湖石築「峙奇峰陰洞」至「諸貴」占據名島」以「鑿々而嵌」空妙絕、珍花異木錯「映閣間」雖「閭閻下戶」亦飾「小々盆島爲玩、以「此務爲「褻貧」積「金以克「衆欲」、その貴重すると〔譬喩盡雜記〕に〔園冶〕を引て端雲峰所製終移名付る太湖石のことをいひて神物なりなどいへり〔園冶〕に蘇州府所屬洞庭岩水涯に產す唯かくの如し消夏灣と云所より出るを最よしとす性堅して潤ひ嵌空穿眼宛轉嶮怪の勢あり一種色白一種色青黑一種微青黑なり其質文理縱橫籠絡して面に隱起す均坎多し風浪中衝激して成これを彈子窩と云扣けゝ微聲あり採人鎚鑿を携て深水中に入り奇巧なるを度りて取鑿ち巨索を貫き大舟を浮へて引出す高大なるを貴む古よりこれを採る故今ゝいと鮮し世の好事者虛名を慕ひ聞て舊石を鑽求め某名園某峰石某名人題詠某代傳て今に至る斯眞の太湖石なりとて重價に買ふ湖石ゝ鮮なければ別山にいまだ取らざる石あまたあり何をか新とし何をか舊とせむ凡石露風なるゝ舊く土中にあるものゝ新らしきされど幾ばくもあらず雨露をふれゝ舊ぬべしとて諸石を多く擧たり

小々盆島ゝ盆中假山また盈景ともいふ今世に箱庭などいふものをも云べし〔望一千句〕やう〳〵とこしらへ立る玉の枝露打わたす花の島ぼん「霞くむ座敷の前を掃除して島ゝ庭ほん〔僊傳抄〕柳かざりの圖石菖鉢また松の鉢うゑなどあり〔圓光大師繪傳〕にも木うゑたる鉢に石

盆景箱庭

を立たるもの是盆石なり〔歌林四季物語〕夏部時日いさだめぬ共くすりのかみやくゐんしなど御さゐんのなでしこ土のかめにもりて内裏まで奉れればいとなき宮こたちいそこにまうで〳〵見給ひあなたこなた朝露にそぼちわけまよひためる云々有り鉢うゑ盆景なり

石菖鉢假山

〔金鰲退食記〕南花園の條江寧蘇松抗州所進盆景皆付澆灌培植

〔金石緣傳十六回〕五間靜室魚池花草盆景假山十分幽雅〔雲臥紀談〕僧曉瑩著本邦に早く貞和丙戌三月梓刻せり雪窻持禪師假山詩數拳幽石疊嵯峨池水泓然一寸波欲識山川無限意目前瀟灑不消多〔考槃餘事〕盆景、以几案可置者爲佳、〔其次則列之庭樹中物也、最古雅者如天目之松高可盈尺云々更以透漏窈窕奇古石筍安插得體石おくとといへり〔白定方窯〕に五色の砂石を布き水を貯へ石菖を植るゝ眼の藥となり邪を避るとなどいまた〔白定方窯〕に五色の砂石を布き水を貯へ石菖を植るゝ眼の藥となり邪を避るとなどいへり〔博物要覽〕に均州窯、青綠錯若垂涎此窯、惟種菖蒲、盆底佳甚とあり石菖鉢の別にあるにてこの物はやる事ゐらる近頃江戸にて石菖はやり樣々ありし其内さゝむれと云ハ葉半分白く又ひろうどいてさゝいへると又さゝいへハ高麗迄や石菖蒲と云句もみえたれハ古くありしものか清閑寺石にさゝやかなるもありき高麗なと云ハ彼より渡りし物か〔慳子集〕高麗せきおやう昔の俗に石菖鉢る石菖を生し盆に置水を貯ふ洛東清水の奥より出る石也黑色にして細かに脆く能く菖を生すへり〔博物要覽〕に均州窯、青綠錯若垂涎此窯、惟種菖蒲、盆底佳甚とあり石菖鉢の別にあるにてこの物はやる事ゐらる近頃江戸にて石菖はやり樣々ありし其内さゝむれと云ハ葉半分白く又ひろうどいてさゝいへると又さゝいへハ高麗迄や石菖蒲と云句もみえたれハ古くありしものか清閑寺石にさゝやかなるもありき高麗なと云ハ彼より渡りし物か〔慳子集〕高麗せきおやう昔の俗に石菖鉢る石菖を生し盆に置水を貯ふ洛東清水の奥より出る石也黑色にして細かに脆く能く菖を生すへり

〔一代女五〕盆山に奈知石を酔て石菖蒲の根からみ青々とゐたるを詠ともいへり古意にかなへり立花の砂物などいふも石菖鉢より起れるにや〔娘容儀〕といふ草子におゐり者のとをいふに蚊除の間とて薄絹の障子の中に五尺四方の盆石に水行燈をゐかけ云々などもも有り〔五雜組〕に閩の窮民假山を作ること云に疊蠣房爲山、池如杯盤、山如筆架、水環其中、蜆蛤爲之舟、琢瓦爲之橋、殊肖也また云余在德平葛尙寶園、見

木假山

木假山一座、岩洞峰巒、皆木頭疊成、不用片石杯土也、〔余奇而賞之〕かゝらの山なといこゝにてい小兒挺あるひハところてん寛る水茶やなどに枯木を山さし處々に土燒の家塔なと置き猿の鈎するもあり又うみほゝつきい必す枯木にかけ並へて賣るこれハもと流れ木のふりたるに付たる物なれともその朽木い風情なければ姿よき木にかくるなり〔鴛鴦雜記五〕古來構園林者、多疊石爲嵌空險峭之勢、自崇禎時有張南垣、創意爲假山、以營邱北苑、大痴黃鶴畵法爲之、峰巒湍瀨、曲折平遠、巧奪化工、南垣死、其子然號陶菴者繼之、今京師瀛臺玉泉暢春苑、皆其所布置也、楊惠之變畵爲塑、此更變爲平遠山水、尤奇矣、かゝれば清の代になりて南垣より庭の作りやう一變しかの湖石の穴明たる物い古風となりけるなりこゝにて石を立ることの廢れたると同じ

菊目石

周之冕が畫に菊目石を立て石竹の花生たる圖あり〔八種畵譜〕に山丹花と此石を畫けり菊目石いと〔大和本草〕にキクメイ石とあるハ土俗の說なり紋の大なるをから松石と云〔廣東新語〕の海化石なり本邦にても昔より用ひしものなり〔續山井〕菊目石の花とうゐてや雪の下鳳鈴草白き輪や其まゝ〳〵菊目石の竹定行釣ふのぶなどい古きものに見えず

釣ふのぶ

〔京羽二重〕つりふのぶ女ばかりの物見かな一雫このふのぶといふ草い〔本艸綱目〕の海州骨碎補なりと云ふ歌などによめる物にいあらず

盆石飾事

米元章い奇石を翫びしと云こゝの盆山いさる事にもあらす米元章が研山い南唐の寶石なり上に華蓋峰、月牀、翠樾、龍池、上洞、方壇、王笥などの諸勝あり雨ふらんとすれば龍池潤ふとぞ後家園と交易すいとをしみしかどせんすべなかりしなり圖を寫し記と書に又詩を哦して曰研山不復見哦詩徒太息唯有玉蟾除向予頻淚滴といへり程へて此石吳興に入り兵火に燬すと云〔輟耕錄〕にその圖あり然るに後世出たる由〔尊彝餐筆〕に見〔雲根志〕に古田織部重能の記をみるに盆石飾の事知る人まれ也東山殿御歌「盆石の前にい一つの濱ひさし後に遠き海そえならぬ此歌の心にて盆石飾の趣よく聞えたりといへり〔貞德文集〕座敷飾物先床い三幅一對掛物云々花瓶盆石云々

砂山

〔懷子集〕あら玉の春のおしたに砂蒔て節ふる舞にかざる盆山三政〔續山井〕盆山に見るや四季咲雪の花盆石に白き處あるを御覽〔東海道名所記三〕世にもてはやす盆山の石に鞠子石とて見事なる石を出すとあり大磯の石の類なるへし寶暦の頃土御門安倍泰邦卿の〔東行記〕大磯の宿にて赤き青き色々雜りたる小石を所の名產とて宿より送る是ハ京にても賣て見し物にて盆石にハ聊打かたき子細もあれど戲て用るにハ又苦しからず〔大磯の小石の色ハさまざまにけばひ坂より出し物かは〕〔大和本草〕に備後砂ハ三上郡帝釋の溪間にある鮮白にして愛すべし鐵槌にて碎き盆底に布くに水を得て其光爛潔白也坐上の珍玩とす他州にも有り〔本艸啓蒙〕河砂の條盆山に用るハ大磯黑胡麻砂山城の鹿背砂木津川邊に鹿背村と云處あり黃白色にして灰色の斑あり備後のあられ砂云々〔日本鹿子〕伊勢國名物の內盆山石同歟石五色なる石なり〔同書〕有馬盆山蒔砂琢砂とみゆ〔風俗文選〕湖水賦盆山のごき砂ハ大洞の白石自注に方解石なりと書り〔萩原隨筆〕に烏丸光廣卿有馬御入湯の時あみた堂に詣給ひ〔引提て床の上にてついすゆる大千世界九ハ海とよみ給ふ是盆山を題し給ふ御自筆の短冊今に此寺に有り昔のハ細密ならさるものにて小き槌にて砂を打ならすと傳へたり或かたに片桐石州侯の盆石の自畫賛あり山の形を寫して嶺岳市尾崎の五字をふたり傳へある事となり〔年山記聞五〕奥州岩城の主內藤義概朝臣江戸より歸り給ふとて村松山日高寺を一見し別當の龍藏院に立より休給ふ折ふし床の上の盆石を見て〔おらさゝらき遠き堺の海山も手にとる石の上にみむとはと書つけ龍藏院に見せられしを後に西山公の御覽に入侍りしかハ其僧にかはりて御返し〔おらざゝらき遠き境のなさけをも手にとる文のうへにみむとハ〔三曉菴雜記〕薩州の諏師寶暦十三年に七十餘歳の老人の話なり盆石のと石のいけ樣浪のよせ樣四季にかはるなど細々有之由尋ね候へば如何樣習も有之候哉當時京都などにてハ法式無之由聞及候自分いけ候ハ石をする名蘗の切口にて砂を突かため羽帚にてはき候儘にて候盆石ハもと遠山を移し候景色浪のよせ跡細々の事ハ見えさる筈にいたしたる物なりそれ故石の小きハ廣座敷にてハ見えかね候眼下に見るより遠く引はなれて見候が直に遠山また遠き島なと見候樣なる至極よく候誹諧に〔遠山の小松がもとのかき蘇といたし候へば點者御眼力の程うら山敷と頭書致候由自愛の石ハ屋久島の產なりとて被出候大ふりにて景色も段々有之裏表なし云々有此人京に久しく居たりとみゆ〔萬寶全書〕盆山の石横六寸高サ厚み見合川石のすはりのよき手いらずを用ゆ石ふるきかよし谷川の石上石なり名石の分ハ谷川石なり山石海石ハ景よくても悪しなどいへり分盆石に打といふと今の法にていまづ石を居地砂を蒔洲濱をかたどり羽帚にて洲濱の外をはき落し石をも取あげよく掃又盆中すべて薄くもと据たる處に證又あられ砂を匙にて盛なり是を打といひがたし然らばもとハ槌あるひハわら束などにて打たる故の名にて今樣の如きにあらずと見ゆ砂に打と云ハ是のみにもあらず庭前などにも云るそも又打ならす故なり

石打と云事

浪花の畫師長田武禪ハ月岡丹下が弟子にて能畫なり清貧を安として陋巷に居れり寒暑つよき間ハ畫をかゝず夏月ハ唯石嵩をもて假山を作ると巧みにて八方正面のとし畫法によりてなり陸務觀の〔入蜀記〕に乾道六年閏五月廿五日云々晩葉夢錫侍郎衡招飲、案間設礬山數盆、望之如雪、武禪これに倣へる歟盆山白砂を用るもかゝる事よりともいふべけれどさにはあ

礬山

盆繪　らず是ゝ庭に白砂蒔ことより出しならむ盆山より又盆繪ゝ出たり砂を五色に染て源氏の巻の名をもて呼び象牙の丸き匙また霞板とて笏の形して先を三絃の撥の如く薄く作りたるもの大小二ッ有り畫かく具ともなり盆ゝ桐木を用ゆ塗たるゝわろし（砂に粘をすこし入乾し盆に此砂ともて描き湯氣にてむす其砂乾く時盆に付て落す是と扁額の如く壁に掛へし是なとめ盆と云其師有て口傳とし兒女子を欺く）此わざゝいと近世より始まれるなるべし

水上砂繪　又細砂を染て五色になし蠟に漬したるを水上に浮べ繪をかく是ゝ唯小兒の翫びなり又近ころ物もらひが砂を手に握りて地上に書畫をかくもの有り是も安永の頃ありしと見えて胴脉が〔針の供養〕といふ草子に砂を摑み蒔て字を書く法師ありといへり

地上砂繪

上古のさまみづらあげまき

嬉遊笑覽卷一上

嬉遊笑覽卷一下

○容儀○上古のさま　文身黥面　古服　髮わげ　垂髮たわ　髮上と着裳　髮置　黑齒　白粉二種　黛　眉　ふん　經粉（ベニ）　爪べに、　齒澤　五味子　花の露　伽羅油

上古ゝ男女ともに髮を垂たり又ゝ髮とて頂にて二つに取わけわがね結ひて前さまにおしたれたるとありそのさま法隆寺太子の御影の前なる童子これ古の髮なり〔萬葉集〕に角髮をみづらとよめり左右に分れたるが角のとくなるをいふ即角子なり〔崇神紀〕に古俗年少兒年十五六間束レ髮於額一、十七八間分爲二角子一、今亦然之とあり十七八間とあるゝやゝ後のことなるべし上代のみづらゝ男子の髮なり〔古事記〕伊邪那伎命御美豆良云々のとあり又天照太神男の裝して御みづらを纏ひ玉ふ又神功皇后御髮を洗ひて自から分れたるをみづらとし玉ふも假に男貌となり玉ふなり角子をあげまきと云ゝ後の稱なり〔推古紀〕十一年十二月始行二冠位一、大德小德云々、大智小智並十二階、並以二當色絁一縫之、頂撮總如レ囊而著レ縁焉、唯元日著二髻華一（ツトリモトナリ）（ツス）同紀十九年に髻華大德小德並用レ金大仁小仁用二豹尾一（大禮以下用二鳥尾一）とあり其品々によりて定められしなり但し髻華ハ上古よりありし風俗故冠制出來ても元日にゝ冠を用ひす古風の樣にて有しにや後世心葉にて冠に付る物の類皆鈔頭花（カミアゲヲ）なるべし〔天武紀〕十一年夏四月詔曰、自二今以後一男女悉結レ髮、十二月卅日以前結訖之、唯結髮之日亦待二勅旨一云々、六月男女始結レ髮、仍著二漆沙冠一（ツヾヒトノヒタヒガミユヘカンムロ・ロハソレヲスルメヤ）と有此時貴賤一統に髮を結る事になれるなるべし〔萬葉集十二〕肥人額髮結在染木綿染心我忘哉うまひとゝ貴人なり古訓にコマヒトと有ゝ（ツヾ）肥ゝ狛の誤り歟此歌狛人ならばそれがさまをこゝに學びたりなど思ふともあらんかされど既に〔神代卷〕に天照太神結レ髮爲レ髻傳二裳爲一レ裙、便以二八坂瓊之五百箇御統一纏二其髻鬘及腕一（タブサ）と（ミツラ）いふとあり然るに〔源氏胡蝶〕かぢとりの棹さすわらはべみなみづらゆひてもろこしだゝせて云々いへるゝ舞童のごとくさうぞきたるにやみづらゝもとよりこゝの古風にて唐になへるにあらずおのづから彼と似たる事もなるべし今世にも兒のさるさまに似たるを唐子といひならなる故みづらを唐風とおもへるなるべし但し神代結髮の事かなからん中昔ゝ女わらんべとともに常に垂髮なとかなからん中昔ゝ女わらんべとともに常に垂髮

髻華

結髮の詔

髮い法令出て後もその事行はれず（令條のまゝに行はるゝ事なし）並のみにあらずいと多かりしかば〔天武紀〕十三年閏四月又詔曰「男女並衣服者有ㇾ襴無ㇾ襴、及結紐長紐任ㇾ意服」之、其會集之日著ㇾ襴衣ㇾ而著ㇾ長紐、唯男子者有ㇾ圭冠、々而著ㇾ括緒褌、女年四十以上髮之結不ㇾ結、及乘馬縱橫並任ㇾ意也、別巫祝之類不ㇾ在ㇾ結髮之例、また朱鳥元年七月勅、更男夫著ㇾ脛裳、婦女亜ㇾ髮于背」猶如ㇾ故この事を〔玉勝間〕に云かくあるい天皇御病ありて御祈事なども有し時の事にて神代よりの風を改められしを畏み給ひてにやありけんかくて又〔續紀〕慶雲二年十二月令ㇾ天下婦女自ㇾ非ㇾ神部齋宮々人及老嫗」皆髻髮（語在ㇾ前記ㇾ並是重制）かくあれども此制行はれざりしと思しくて中昔にもすべて亜たりき然るに近き代になりていみな髻なるいいつのほどよりのことにかあらんといへり猶下にいふべし

〔後漢書〕倭人傳に男子皆黥面文身以ㇾ其文左右大小ㇾ別尊卑之差などいへるい邊海の民さるたぐひの者有けむを聞傳へて書るにもあるへし〔景行紀〕二十七年二月、武內宿禰自ㇾ東國ㇾ還之奏言、東夷之中有ㇾ日高見國ㇾ其國人男女並推結（カミアゲテ）文身、爲ㇾ人勇悍、是摠曰ㇾ蝦夷ㇾ、この國今も其さまなり〔齊明紀〕五年七月云々以ㇾ陸道（ミチノクノ）奧蝦夷男女二人ㇾ示ㇾ唐天子ㇾといふ事も見えたり彼國是等を見て前史の趣を信じ其後にも本邦を文身の俗といひ傳へしとおぼしき但し彼黥面のごとくにいあらず〔古事記〕に大久米命以ㇾ天皇之命ㇾ詔「其有といへどもその部類ありてなへての事にいあらず伊須氣余理比賣之時、見ㇾ其大久米命黥利目（サヘルトメ）而思ㇾ奇歌曰、阿米都々云々那杼佐祁流斗米とあり久米てふとい〔古事記傳〕に久流目の略也といへり皇孫命天降坐し時の例にや神武天皇東

征し給ふにも大伴氏の祖道臣命と久米直氏の祖大久米と相並て先鋒となり大功を立給へるに〔書紀〕にい天孫降跡の處一書に大伴連遠祖天忍日命帥ㇾ來目部遠祖天槵津大來目ㇾ背負（イノコキ）天磐靫（カツカノムラ）云々、立ㇾ天孫之前遊行降來云々また〔神武紀〕に勅ㇾ道臣命ㇾ、汝宜ㇾ帥ㇾ大來目部ㇾ作ㇾ大室ㇾ於忍坂邑ㇾ云々あるい大伴氏の下に屬たる者にて大來目い久米部の部首たる者と聞ゆ前後同名なるいその故なるべし〔古事記〕に神武の御時なる大久米命い殊に大功ありし故大伴氏と相並びて記しゝにもあるべし後に久米直といふがあり〔姓氏錄〕右京神別左京神別ともに載て高御魂命八世孫云々ありて大久米命のよしい見えず〔古事記傳〕に子孫に至りていい大伴氏のみ榮へて此久米直氏い甚く衰へて終に大伴氏の部下に屬るごとくなりにけるを〔書紀〕いそのい父に似る物なれどそれすら似ざるも多かり然るにそこばくの年序を經て〔書紀〕にはれい天祖降跡より神武の御時まで、一百七十九萬二千四百七十餘歲ぞそれすら似ざるも多かり然るにそこばくの年序を經て〔書紀〕にはれい天祖降跡より神武の御時まで、一百七十九萬二千四百七十餘歲ぞ大來目命のさける利目い奇しむべし此によりて思ふに來目部い目をさきし事あるしされど黥面い墨刑にて目を裂墨をさす事なり〔履仲紀〕元年夏四月召ㇾ阿曇連濱子ㇾ詔之曰、云々罪當ㇾ于死、然亜ㇾ大恩ㇾ而免ㇾ死科ㇾ墨、即日黥之、因ㇾ此時人曰ㇾ阿曇目ㇾ、又〔同紀〕五年九月天皇狩ㇾ于淡路島ㇾ、是日河內飼部等從駕執贄、先ㇾ是飼部之黥皆未ㇾ差、時居ㇾ島伊弉諾神託ㇾ祝曰、不ㇾ堪ㇾ血臭ㇾ矣、因以卜之、兆云、惡ㇾ飼部ㇾ、故止之、又〔古事記〕に安康天皇紀、於ㇾ是市邊王之王子等意祁王袁祁王二柱、聞ㇾ此亂ㇾ而逃去、故到ㇾ山代苅羽井ㇾ食ㇾ御粮ㇾ之時、面黥老人來奏ㇾ其粮、爾其二王言不ㇾ惜ㇾ粮、然汝者誰人、答曰我者山代之猪甘

文身斷髮

也云々又〔書紀〕雄略天皇十一年冬十月鳥官之禽、爲ニ菟田人狗一所ニ囓死一、天皇瞋黥面而爲ニ鳥養一、〔古事記傳〕に〔履仲紀〕倭部の黥を止られたるハ、馬倭部に限れる事なるべし、此猪甘〔雄朝紀〕の鳥養なども猶あれハ也云々此黥を面黥とも書ヒタヒキザムともメサクともいへる皆同し、ことなり、又目さくといふも實に目を裂にハあらす目の邊りを刻むなりさいへり、此説非なり、倭部の黥を止られたる事明文ありこれ黥刑をやめらるゝにハもと倭部ハ黥せられたるものなればなりこの故に猶後れしにハあらす罪あるなりまた目さく事をいへるもわろし大久米命の黥利目とあるにて明らかなりこれ倭部目尻を裂るから目の大なるなるなり

も黥刑を止められしにはあらす鉗狂人に黥するこれ倭部のみ恥辱とせむと勿論なり又重き罪をかならずしも黥ハ上古よりの風俗ならば死罪に行はるべき程の重き罪をこれにかへ給ふべきにあらずたとひ既に應神仁徳の御世に止られたりともそハ猶いと近き事なれば上古よりの風俗を人ハさのみ恥辱とも思ふましければなり又上古より近代迄の風俗ならむにハ伊弉諾神いかでか其氣をにくみ給はむ然ればこの二ッの事をもて黥ハ上古の風俗にハあらざりし事をさとるべし此説ハ〔衙口發〕に上世文身黑齒被髮す云々文身いづれの時に禁せられしをまらす〔履仲紀〕によれハ應神仁徳の朝に止られしなとあるハ人の説をうちたるなれぞもらんさ云の斥非なり

黥ハ上古もありて皇き部等のする事なれば恥辱とせむと勿論なり又重き罪をかならず是にかへ給ふにハ非ずこれ非常の事なれば聖ニ大恩一なども見ゆるをや又神の惡み給ひしハ其疵の愈ざる故惡疵あればなり〔刑餘の人を用らるハ後世放免のもの撿非遣使に屬するが如し倒部やうの者ハ後にもみな賤しき職分なりかくいふハ〔衙口發〕の説を助くるにハあらすその書杜撰の强と多く殊に〔日本決釋〕なさいふ僞書をさへ作り愚人を欺かむとすいと惡むへきものなり

後世游俠を好む惡少輩文身するこ〔事物紀原〕に今世俗皆文身、作ニ魚龍飛僊鬼神等像一、或爲ニ花卉文字一、舊云起ニ於周太王之子吳太伯一云々〔史記〕越世家言、夏后帝少康之庶子封ニ於會稽一、文身斷髮披ニ草萊一而邑、證ニ此則是玆事爲ニ始ニ於帝少康之子一、因知文身斷髮之爲ニ吳越之俗一也舊矣、ま

女子髮あげ

入ぼくろ

た高士奇澹人が〔天識祿餘〕に唐之中葉長安惡少、多以ニ詩句一鏤ニ涅肌膚一、夸ニ詭力剛一、坊閭遠近效之成ニ習一、後皆爲ニ薛京兆元賞一杖殺一、更有ニ取ニ名賢詩中意一、細刺ニ樹木人物一至ニ有ニ周ニ身一、用ニ白樂天詩意一刺ニ混人一、呼爲ニ白舍人行詩圖一者〔雜俎續〕名之曰ニ刳青一云こゝにハ天正文祿の頃異樣の出立する惡徒も多かりしかと文身のさたも聞えす其後種々の俠客有しも猶その事見えざれハ專ら行はれしハいと近きことゝみゆ〔關東俠客傳〕に淺草神田川に鐘彌左衛門といへる者極めて立派なる男の其頃迄ハ入ぼくろ大きなるハ珍らしかりけるに横筋かひに肩より南無阿彌陀佛と大文字に彫付たりと其頃淺草御藏前に永野七郎兵衛と云る名主異名を鈎鐘と云ハれしが此船頭彌左衛門に鐘と云異名を譲りたりとぞ是延寶天和の頃なりかばかりなるを大きなることゝいたり其他あまたの男立ぞも文身のと聞えすいと〳〵希なるを知るべし其後寶曆年間〔浮世草子〕などに入ぼくろする處をかけるもありまた日雇とりなど肌ぬきたる圖にほりもの有り其文ハ一心といふ字或ハ渦まき抔にて手のこみたるハなし肌も見えざる程こと〳〵しき繪をほるといふハ近時の事あり

女子髮あげの事〔允恭紀〕七年皇后閒ニ之恨曰、妾初自ニ結髮陪一於後宮一既經ニ多年一云々あり結髮の制ハ遙に〔後天武紀〕に出たること上に引るが如し然らばこゝハ〔文選〕の古詩に結髮爲ニ夫妻一などの漢文にならひてかゝれたる虛飾の文なるもいふべけれとさにあらず〔天武紀〕に出たる制ハこの事とハ異なり上古より女子のさまハ〔景行紀〕二十七年十二月云々日本武尊、解ニ髮作一ニ童女姿一、以密伺ニ川上梟帥之宴時一云々此時尊御とし十六なり〔萬葉十三〕問答歌に然有社歳乃八歳叫ニ鑚髮乃一〔同集九〕見ニ菟原處女墓一歌葦屋之菟名負處女之八年兒之片生乃時

あまそぎ　深そぎ

振分髪

うなね

從小放爾髪多久麻庭爾並居家爾毛不所見云々（ユナバナリニカミヌタクマデニナラビヰエニモミエズ）幼き時髪を剃こと今とおなじ〔源氏横笛〕蟇が幼稚の時をいふにかしらい露草おもてことさらずに粉（イロド）りたらん心地してと有り三歳ごろより剃たく云々〔細流〕にあまそぎの程いふかそぎなりさげ尼の程なり〔若紫〕に十ばかりにやあらんと見えて髪はあふぎをひろげたるやうにてゆら〳〵として又尼そぎをもかくいへり〔手習〕に浮舟が尼姿をかみいいつへのあふぎをひろげたるやうにごちたきするつきなり（大人なればごちたきなり）〔蔦葉略解〕に兒四歳計の時髪の末を切そめて是を深そぎと云ふさて八歳まで其髪の末を眉とひとしく切る是を放髪とも振分がみともいふ云々八歳の後い髪をそがずして長からふむれば肩を過て垂る云々いへり眉とひとしく切い前のかた額の髪をいふ歟うなじの程にて切る是をうなねといふ八歳の後いそがずといへるも違へり〔源氏紫〕源氏紫のうへと祭見に出立むとする處（此時紫上十四歳なり）いざたまへもろともに見んよとて御ぐしの常よりも清らにみゆるをかきなで給ひてひさしうそぎ給はざめるをけふいよき日ならんかしとてこよみのはかせめして時とはせなをし給ふまづ女房いでねとて（これいざれ事なり紫のうへまだ童なればめしつかふ者も童なると賦れて女房と大人のごとくいへり）わらはすがたとものおかしげなるを御らんずいとらうたげなるかみぞものすそはなやかにそぎわたしてうきもんのうへの袴にかゝれるはぢさやかにみゆ（やうにかたなりなるきみのみぐしいわれそがむづからするなり）も末をばそぐ事なり）そぎわづらひたまふいとなかき人もひたひがみいすこしみじかくぞあめるをむげにおくれたるすちのなきや云々（此處をかける源氏繪に紫のうへ褥の上に立る圖あり此物語の時代いかゝありけん其後の繪にハ雙六ばんなどを踏だいにしたる圖などもあれハ褥ばんも同じく何にも用ひしなるべし然るに後世是を深そぎの儀に用ふるを式とす〔古今集二十〕こよろぎの磯たちならしいそなつむめさしぬらすな沖にをれ浪〔餘材抄〕云今按〔神樂〕朝倉本歌云「朝倉やをめの湊にあひきするたまのめさしにあひにきにけり又〔催馬樂〕に竹河の橋のつめなる花そのに我をいはなてめざしくはへて〔狹衣〕にめさしなる御ぐしをせちにかきやりつゝあそびむつれ給ふと書るもいときなき子のひたひ髪の末かはにさがりて目をさすばかり短きをいへれば此心にわらはべをめさしと名付たる歟〔枕草紙〕にあまにそぎたるちごの目に髪のかゝればひたるをかきいやらで打かたふきて物なぞみるいと美くし是めざしとはいはねど〔狹衣〕に同じ〔伊勢物語〕に「くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべきものを待意と聞ゆ（ケテアフベシ）〔萬葉十一〕問答歌凡者誰將見鴨黑玉乃我玄髪乎靡（オホナラムタカミシヲワガクロカミヲナビ）而將居（ケテアラム）と云るも髪あぐべきものを待意と聞ゆ〔衣服令〕に内親王より内命婦まで禮服に寶髻（一品已下五位已上去寶髻云々髪に飾なきなり）やうなるか未考東大寺鴨毛屏風い繪の傍に天平勝寶三年十月と記したればこゝにて造りたる物なりといへる説によりて見れば其繪の女のかた結髪のやう唐人のごとしこれ然るや否をしらず其後いつの程より髪結ことと廢れたるにかあらむ其故をおもふに十五六歳まで垂髪にて居るとなれば結髪（カミアゲ）ていその歳もあらはにあらるゝ故（なべてみな男もちて髪あぐるにもあなりやこゝいつ迄も童同じかるべし）そのと一とせ二とせおくれなどもすべし年のふけなむをうしと思ふ人情なり又中古の風俗も女い面をかくすにも便りなくそれなれば髪あげてい顔かくすならひなれば

めざし

寶髻

うけれゝ髪あぐべきころに一たびその事ゝすれぞも常にゝ垂て居しが風俗をなせるなりそゝ貴人よりはじめて下々に及びしことゝ思はるそのかみとても動作ふげき者ゝ髪結へるとなり〔源氏桐壺〕に更衣のかたみをいふ所御くしあげのてうどめく物をへ給ふ〔河海〕に昔ゝ女御更衣以下常に髪をあぐる事本義なり又〔抄〕に内の女房ゝはれの時ゝかみあげとてかんざしなどして髪をいたゞきへあぐるなり〔紫式部日記〕御産やしなひの條におものまいるとて女房八人ひとつ色にそうぞきてかみあげたろきもとゆひして白き御盤もてつゞき參るこよひの御まかなひゝ宮の内侍いとものゝしくわさやかなるやうだいにもとゆひはへたる髪のさがりゝ常よりもあらまほしきさましてと云々又うすものゝうはぎかぐりのもからきぬさいしさして白きもとゆひたたり〔狹衣〕賀茂祭の條齋院からなでしこのみへの織ものに同し色のみへのこうちぎ着させ玉ひてさいしさゝせ玉へるもとゆひに御ひたひ髪の打とゝひてなよゝと引れ行たるかいとゝもてハやされて云々安齋翁云髪子ゝ宮女の髻の飾也今世の詞におおやしといふいさいしの〔轉語〕也玉篇に髮楚街切婦人岐笄也とあり女房式正の時ゝ垂髪して頂の上に髻を瘤の如く束ねて是をカブと名くそのカブに髪子をさすなりこれを髪上といふと見えたり伊豫守隆成が〔足利將軍家初ころの人〕女房歌仙の内に此體をかけるが有り頂に髻ゝあれぞも猶下ヶ髪なり髪の中程ゝ結たるにや又おもふに頂上に結束せすさも中程ゆひて垂たるも髪結へるなり其實ゝ動作の爲なれぞ常にせざる事なるから式正にのみなれり〔允恭紀〕の結髪陪於後宮とあるも夫に奉仕するの道なりよて男ふて髪あげするもこれが爲なり

因に云垂髪ゝ顔をかくすを要とす故に耳はさみなぞゝ常にゝせぬとなり〔源氏帚木〕に耳はさみがちにひさうなき家とうしこれゝ下ざまの人をいふなり〔同横笛〕に雲ゐのかりの若君のねおびれたるをあつかふ處にうへもおはとなぶら近くとりよせさせ給ひて耳はさみしてそゝぐりつくろひていだきね給へり貴人も子持なぞ髪の面にかゝりたらんゝ兒あつかふに煩はしければ髪のかみを耳にはさむなり〔帚木〕にいへるは賤き女なればもとより恥らひもせず面をあらはに出し居なり〔紫式部家集〕に彌生の朔日かはらに出てたるにかたはらなる車に法師のかみかうふりしてはかせだちたるをにくみて「はらへぞのかみのかざりのみてぐらにうたてもまがふ耳はさみかなこの耳はさみゝ法師が紙かふりの緒をいふにや又〔石清水物語〕左大臣の北の方姫君の入内をとりつくろふ處に恥ぢらひたるとなく耳はさみをしてと有り

髪のたわ

髪のたわ〔金葉集戀上〕物いひける女の髪をかきこして見けるをよめる津守國基〔朝寢がみたが手枕にたわつけてけさゝかたみにふりこしてみる〔季吟の抄〕にたわつけてゝ手ならされし心なり〔鄰女晤言〕に〔源順集〕に「わすれずもおもはゆるかな朝な朝なねし黒髪のねくたれのたわ又〔宇津保藏開〕にもたゞおはとのでもりなば御ぐしにたわつきなんずと云々これら手ならされしといふ心にてゝ聞えす髪のたぶの出來るをいふなるべし都にてゝ是をつとゝいへどあづまにていたぶといへり〔源氏若菜下〕御ぐしすまして露ばかりうちふくみまよふ筋もなくといへる同じことなりといへり是ゝ撓の義にて山にたわといふ處あるもおなじ手枕に髪のくせ付たるをいふ後世ゝかみのうしろに作り出すをたぼといふ是ゝいかさまたわの訛りたる詞なるべし

髮を洗ふ

古へ婦人引つくろふにハ必ず髮を洗ふ〔源氏若菜上〕紫のうへ明石のうへに逢ふ所明石の君のはづかしげにてましらはんをおぼせば御ぐしすましひきつくろひておはするたぐひあらじと見えたり髮洗ふと〔東屋〕にもみゆ〔枕草紙〕心ときめきするものかしら洗ひけさうして香にしみたるきぬきたるなどあり

髮上と裳着

女子髮上と裳着と同時と見えたり〔大鏡五〕太政大臣公季の御裳着の屏風に公忠の辨行やらでとよむハこのみこの宮なり貫之などあまたよみて侍りしかども人にとりてすくれのハえり給ひしかとよ〔貫之家集〕延喜十八年二月女四の宮の御髮あげの屏風の歌うちの召にて奉るとて云々これ裳着といひ髮あげ共いへり〔後拾遺集賀〕人のをさなきはらからの子ともに裳きせかうふりせさせはかまきせなどし侍りけるにかはらけとりていろいろに云々大かた若袴ハ三歳にや〔河海〕に皇子三歳袴着の例多く出たり元服ハ十二歳なりあげおとりといふとハ〔花鳥〕に童にてみめよかりし人の冠して見おとりするをいふなりといへり髮あげの略語なるへし十二歳元服ハ漢土の古禮なりかみ置のと安齋云小兒胎髮をそりてより二三歳に至りて髮置とて祝ひする事國史類古物が

髮裳着

髮置

たりに見えず〔この事非なるハ上に引る事共を見へし〕〔東鑑島津本〕仁治二年六月十七日、若君御前御生髮也、武州着布衣令參仕給、毛利藏人泰光左衛門大夫定範以下父母兼備諸大夫侍候云々若君ハ頼經の若君紹嗣なり時に三歳なり〔蜷川親元殿中日記〕寛正六年十一月十日條に姫君樣一兩日中御髮置御祝云々これ東山殿義政公代の事なりといへり後世十一月を此祝ひに用るもこれらの例に

帶ときに橘を用ゆ

や又思ふに今世七五三の數をこれらの儀に用るハ何の故にか〔群碎錄〕に男子入學多用七歳五歳、蓋俗有男忌雙女忌隻之說、至冠笄亦然、按北齊李渾弟繪六歳願入學、家以偶年俗忌約弗許云々、則其來久矣といへり

帶ときも花橘のむかし哉此橘ハ昔をいふのみならず〔日次記事〕云民間三歳小兒髮置令蒙綿帽子、是謂白髮、挿松枝並多知波那於其上といへり〔誹諧綾錦卅六〕番合かみ置左〔笠重

たすきがけ

き雪のあらかや花元結青里　右「かみ置やおだり初めの糸柳布仙是等ハ綿ばうしにハあらず麻を用ひしなりある老女の物語を聞しに予が髮置の時扇を開き柄のかたに麻苧を長く下げて色水引にて扇に結付たるを頂に置て産土神に詣てき予が祖母ハ京都の人なればこれハ定めて上方の風俗なるべしと云へり〔江戸砂子〕に女子の祝ひに白髮又たすきがけと號して麻苧眞綿に末廣松梅の作り花を五彩の水引を以て飾り結びかつがしめて生土神へ詣つるよし見ゆ

黒歯

黑齒の事其始定かならず〔和名抄〕容飾具に〔文選〕の注を引て黑齒國在東海中云々故曰黑齒（俗云波久路女）今婦人有黑齒具故取之これにて古へよりあらざりし事ハるし物語ぶみにハ多くみゆ〔堤中納言物語〕虫めづる姫の卷に人ハすべてつくろふ所あるハわろしとて眉さらにぬき給はずはぐろめさらにうるさしきたなしとてつけ給はず云々〔とりかへばや〕にかしらあらはせなどして髮もかきたれなどしてみればあまのはぢにふさ〳〵とかゝりたり眉ぬきか

ねつけなと女びさせたれば云々〔年山紀聞〕に時房公日記〔建内記〕を引て云永享三年十二月に予女九歳有㆓祝着事㆒齒久呂美三筆予付初之眉毛ぬく事毋是を扳次に三献云々〔海人藻芥〕に鳥羽院已前男の眉を扳鬚をはさみかねつくると一切なしと見えたり但〔枕草紙〕白馬と見る條とねりが貌のきぬもあらはれたるときものゝゆきつかぬところゝまことにくろき庭に雪のむら消たる心ちしていと見ぐるしとみゆかやうの事ゝ有しなり貌のきぬとゝい顔の地はだなりとゝへり觀るものゝためにつくろへる事とおもはるる漢土にゝ男人脂粉と傳る事漢の代より有よし〔野客叢書〕抔に見えたり〔雑纂錄〕に平家物語に東の武士の平家の通盛がかねつけたるをみてあつはれみかたにかねつけたるものゝなきをと申たりし事のあれば武家ゝつけぬ事分明に見え侍る室町殿の時分ゝ武士もつけたるなり當時ゝ昔にかへりて武士ゝつけぬ事となりたり云々室町家前後一向下部ゝ不㆑染候へども中分の人よりゝ染候歟白齒者と書てあをはものと讀り白馬をあを馬とゝふが如しこの白齒者と申ゝ下部のとなり此首をとりたる時の事〔甲陽軍鑑〕に見えたり〔宗五記〕にもかねをつけぬゝ狼藉なりと有とゝへり〔甲陽軍艦十九〕かね黒に匂ひ留たる頸とゝふともみゆ又〔おあん物語〕に首とりたる者に誂らへられてその首にかねつけてやりしなども有よき人の首と僞り手がらにせむとてなり〔北條五代記〕に首實檢の時はぐろの首をば侍の首とて先上へ懸たり〔遺老物語〕に永祿已來出來初る事種々の中信長公信忠卿屍近の士齒にかねを付シヤレはく事と有り

〔女郎花物語〕に厨子棚黒棚置物云々黒棚にゝもとゆひの箱小すみあか水引箱わたし御はぐろ箱などよの常のさまなるへし云々わたしとあるゝぬきすにやと思へど今のわたしがねなるべし

粉

粉〔和名抄〕云之路岐毛能（シロキモノ）そのはじめ〔持統紀〕六年閏五月賜㆓沙門觀成、絁十五匹綿卅屯布五十端、美㆓其所㆒造鉛粉㆒とあり此によりて世に此時より婦人顔におしろゐ付る事も始ると云ふゝ非なり夫より先〔雄略紀〕七年、吉備上道臣田狹、侍㆓於殿側㆒盛稱㆓稚媛於朋友㆒曰、天下麗人莫若㆓吾婦㆒云々鉛花弗御蘭澤（イロモツクロヅカモソヲルコトナシ）無加云々とあり猶これより先にもあるべけれと明文なければいつの時よりとも知るべからず是を例の漢文にならひたる虚飾の文なりとせむゝ誤りなり其故ゝ神功皇后より以來韓地の貢物絶ざれは鉛粉もあるべく又韓吳等の國よりこゝに來れる女などもあらば必ず齎したらん又便りに就てとりよせなどもたるとも有べきなり鉛粉ゝ沙門の製造にゝ似けなき物なれど漢土にも〔嶺外代答〕に西融州有㆓鉛坑㆒、鉛質極美、桂人用以制㆑粉、澄之以㆓桂水之清㆒故桂粉聲㆓天下㆒、桂粉、舊皆僧房罷造、僧無㆓不㆑富、邪僻之行多矣、厥後經略司專㆓其利㆒、歳得㆓息錢二萬緡㆒、以資㆓經費㆒、群僧乃住㆓衡嶽㆒造㆑粉而以下價售㆑之、亦名㆓桂粉㆒、雖㆓其色不㆒若㆑桂、然桂以㆓故發賣少遲㆒、といふ事あり

白粉

白粉（シロキモノ）と白粉と並べあげたり〔本草和名〕に粉錫、和名、巴布爾（ハフニ）とあり粉錫ゝ今京にしろいと呼て婦人の顔に塗るものなりさからい粉ゝ水銀粉にて今はらやとも伊勢おしろいとも呼ぶもの是なりもしい物異なれどもはらやといふ名ゝ巴布爾を訛り呼べるにや知べからす孔志約が〔唐新本草〕の序を作りて鉛錫無辨とゝ陶弘景が非

はらや

おしろい

水銀

辰砂

玉虫

を斥したる辭なり弘景だにさる事ありましてこゝにゝ誤稱もあるべきなり

おしろきものといふべきをねしろいといふゝ女のもてあつかふ故におもじをそへ下を略するなり此名も近俗にいへるにおらす〔四季物語異本〕に正月の條空のけしき夜べ見しにゝかはおしろう見なされ云々有り

〔續紀〕元明天皇和銅六年五月癸酉、令三大倭參河二並献二雲母一、伊勢水銀、鉛仁の〔本草〕にも水銀、和名美都加禰、出二伊勢國一、といひ〔今昔〕に京に水銀商するもの伊勢國に年來行通ける物語あり〔七十一番職人歌合〕永ほり「あちきなやにふのみ山にはるかねのみづから人に思ひ入ぬると見えたり此ころ迄も丹生山などに辰砂出けるにや水銀ゝ辰砂を燒てとるなり今ゝ伊勢より水銀出されとも其國射和（イサワ）にてはらやを製すると他州に勝る辰砂今和産なければ唐山より渡るを用ひ京師より水銀を伊勢に送りて作らしむ今の法ゝ慶長の頃泉州堺の錢屋宗安まだ小西清兵衛なと明の法を得て白粉を製すといへり〔後漢書〕華佗傳に「五禽の術をいひて起作」一禽之戲一而汗出、因以著粉」といへりあせほに「天花粉と若るか如し晉の何晏、粉を手にはなたざりしも此なるへきを專ら好色のこゝにへるなるべし今男子にも夏日汗ばむを苦みて粉と用るものあり但葛粉などなり

玉虫を白粉の中に貯ふると〔北戸錄〕云、金龜子甲蟲也、五六月生二於草蔓上一大如二於榆莢一、細視之眞金帖、龜子行則成雙、類二璧龜一耳、其蟲死則金色隨滅、如二螢光一也、南人收以養粉云、與二汞粉一相宜、こゝにて玉虫を粉匣に收むる事と似よりたれは〔大和本草〕に金龜子を玉蟲に充たれども誤りにて金龜子ゝこがね虫なり玉蟲ゝ〔本草〕皇螽の附錄なる吉丁蟲なりといへり玉虫を貯ふる事古き事にや〔異本四季物語〕虫撰みの條に形ちゝ美うして玉虫などいひていみしけ

225693

媚薬

眉作ると眉引

れどきり〳〵すはたをりかうろぎにさへおとら聲たてねもわれど此虫ゝやごとなきさちあるものにて宮のさうにて何くれの御房にも御くしげの中なる白ふんの中にまろびて散ゝ人をさへ野べにすてためるならひなるに十とせはたとせの後までも御もの、中に包ませおかせ給ふことよ云々みゆ漢土に媚藥といふともあり〔本草〕にも往々見ゆ其物を貯へもてば人にめでいつくしまるゝとあり玉蟲も是等の意にや〔北戸錄〕蝙蝠の條下に媚藥種々擧たり蟲もわり草もあり〔諸艶大鑑〕に手なれし鏡臺引出しゆかしく見るにはらやや筥に玉蟲云々〔江戸枝折〕柳の葉に今玉むしのうしろ向また眞珠をはらやに雜て置けば其珠分身して數多くなるとて兒女のするとなり〔懷子誹諧集十〕白粉箱のふたの明くれいつの間にぶんじにけらし貝の玉重長また前付、わだつ海一倍になる〳〵、身ゝ捨て貝ゝ女中に尊まれとも聞ゆれど又〔口寄卿〕句ひてそすれ〳〵、死で又子をうむ箱の貝の玉、これゝ子安介

眉作と〔秋草〕に〔日本紀〕仲哀天皇八年秋九月云々、愈妓國而有二寶國一、譬如二美女之眸一有二向津一引ゝまゆすみ引て眉を作るを云なり仲哀天皇の御時既に此譬とあれば其始ゝ猶前代よりの事なるべし〔萬葉六〕大伴家持初月歌、振仰而若月見者一目見之人之眉引所念可聞とみえたりといへり按るに眸ゝ宋玉か〔招魂賦〕に娥眉曼睩とあり眉引ゝ眉を畫くとにゝあらず寶國なといへるゝ新羅をはめたるなれど眉引ゝ遙に見えたる狀をいふのみはめたるにあらず初月のとき眉を美女の眉引といふにて引とゝおのづから引たるなりもし畫きたるならば美女

黛

ぢん　眉に色々の名あり

きは墨

にいよるべからず今俗にい引眉なぞいへぞ古いかくとてそいへ引といいはず〔引といふを新撰字鏡に誤りにあらず今いみなれど古くいふ拔ものと見えたり〕書くいもとの眉を鑷子にて拔さりて今いみな剃事とも見えてかしこにい久しき事とおもはる〔唐書車服志〕に、文宗即位して詔を下す內に禁二高髻一倣粧去レ眉開レ額と見えたりこゝにい唐より倣へるなるべし邊鄙にい今も眉をさらざる處長崎平戸近江の君が畑奥の柳川伊勢の員辨の邊一村の婦人眉をそらず齒を染ずといへり其外猶あるへし蝦夷いもとより然り是を田舍にい容飾をせざる故といふべからす風俗い容をみかくにいよらじ〔鹽尻〕に長崎の婦人い男の如く眉毛を生し常とす年老たる女房の顏をかし平戸も同じさまなりしが近年國より令して領內の女眉を剃侍るとてめづらかなるやうにいへるよし云々見えたりされぞ今も老女なぞ剃らで居るも有とか是もやう〳〵に改るにやあらむ

眉にシンと云い心字なるへし黛をいふ〔女重寶記〕に眉にふんをいるゝこと霞の中に弓張月のほの〳〵と出たるが如く引給ふべし〔後世いへり安齋これによりて古言を誤り解けり〕凡を眉にいろ〳〵の名あり鶯眉みか月眉わすれ眉かすみ眉大かた眉きしたて眉是い幼き人につくる眉なりから眉これい年たけたる人の作る眉なりいづれも眉い左より作りはじむるものなり右より作るべからずなぞと見えたり又きは墨い髮際に塗るなり〔重寶記〕にきは墨いなるほど薄々とあり又是をおきずみともいへり

べに

的

頰紅　環海異聞にろしあにい婦女臙脂を着る者あり唐山より渡るよりへつけたる紙國中

べに〔和名抄〕釋名云 赬粉和名閉遏 赬赤也染使レ赤所レ以著レ頰也今按植即と有り〔本草〕を考るに臙脂に四種あり時珍云、一種以二紅藍花汁一染二胡粉一而成、蘇鶚〔演義〕所レ謂燕脂云々出二西方一、中國謂之紅藍以二染粉一爲二婦人面色一者也、また同條附方に坏子燕脂とある是なり 赬粉いこれなるべし然らい今いふかたべにに胡粉を雜へたる物なり胡粉とい粉錫の一名にて京をしろ いなり 諸家にごふんと云ハ蛤粉なり べにい和漢ともに古へ面の色を粧ふ具にして今の如く唇に塗ることいなかりしと見ゆされば こそ粉をくわへたんめれ〔源氏常夏〕近江の君のことをいふ處べにといふものいとあからかにつけてかみけつりつくろひ給へりと有も顏を粧ひしなり道興准后の〔廻國雜記〕べにが谷をとをりてけはひ坂をこゆとて「顏にぬるべにか谷よりうつりきて早くもこゆるけはひ坂かな〔守武千句〕いとゞだに貌の赤かる人なれやはゝさきのみかべにさへもうし漢土に天子諸侯の媵妾月事ある者い丹を面に注て其ふるしとす是を的といふ其後月事にもよらずこれを面粧とすと〔輟耕錄〕などに見えたり〔學齋佔畢〕に鳳州道迹山の一洞より出たる古鏡の銘文の中に當眉寫翠、對臉傳紅、と有しとなむ〔色芝居〕といふ草子延寶の頃石川某か妻の事をいふ條おしろいの上に紅粉を隈どりはへ際黑々と眞弦だらけに彩色す又近く享保頃迄も頰紅とて紅と白粉を交て頰にぬれり白粉ばかり粧ふい遊女のことなりとかやれいそのころのさまなり 近頃い紅を濃くして唇を青く光らせなぞするい何事ぞ青き唇いなきものを本色を失なへりそれゆゑ時勢粧を書く者女の唇を草の汁にて塗り濃彩にい綠青して彩りぬ周の時に有しといふ黃眉墨 敕あやまむべからす〔天祿識餘〕に劉邈云、

べになり光太夫云兩頬へ著て眉へハ不付漆土になり

つめべに

寒べに

綴ニ金翠于足跗一靚粉澤于胸臆一以喩レ失ニ其所一施ニ後世妓女一、金翠綴レ足、粉澤靚レ胸、蓋恒飾耳、といへるなどめづらしとするにたらず胸におしろいつくることいつくることと今こゝにていふ遊女のみならず上下ともに女の常粧となれり〔徑緘輪〕釣らせて駕籠に辨當が乘、花揃よ花見女の骨牌紅粉、濃粧をいふなり

爪べにとて爪の先に紅をさせぞも爪を染るがもとなり〔剪燈新話〕四時詩、要染ニ纖纖紅指甲一、金盆夜搗ニ鳳仙花一注に女子採ニ花塗ニ指甲一則如レ着ニ臙脂一、この指甲を染ると〔癸辛雜識集〕そのほか諸書にみゆこの故に其花に染指透骨指甲等の異名あり〔廣東新語〕有レ歌云、指甲花連指甲草、大家染得春纖好、〔大和本艸〕に鳳仙花女兒此花と酢漿草の葉をもみ合せて爪をそむと記せり筑紫あたりにいふ其如くする故につまくれなゐと名付るなり

〔女郎花物語〕にふかつめとりたる指の先そりかへりたるやうなるにべにいたくさしたるいむくつけくさへこそ見え侍れ〔女鑑慶安三〕爪のきりやうふか爪好み給ふべからずべにいかにもうすくさし給ふべし〔女重寶記元祿九年〕白粉にかぎらず紅なども頬さき口びる爪さきにぬる事うす〳〵とあるべしこくおかきいハ賤しく茶屋のかゝにたとへたり濃きにあかぬものいハ歯くろなり又寒のべにを賞する事いハ貞德〔獨吟百韵〕障碍をやぶはすの月の天狗ども紅粉に木の葉のちりてまじれる自注に師走紅粉木の葉天狗といふ寄合せなり〔懷子俳諧集二〕色見えてうつろうものや寒のべに山田女又九爪べにをさすハ蝦手のもみぢかな眞春〔佐夜中山集〕べに染の手を血の色にあやしまれとりぬる爪もふかきたしなみ重明今女の詞にべにをいろ

と云ハ忌べきことばなり〔平家物語〕小松内大臣熊野詣の段熨斗を撮て鉾す岩田川に着しに夏のことにて少将惟盛已下公達兩三人河の端に涼み水に戯れて浄衣ぬれたれハ下に着給ふうす色の衣透うつりたるがいろの如くに見えけるを筑後守貞能見とがめて何とやらんあれ浄衣のよにいまはしげに見えさせましく候急き召かへらるゝもや候らんと云云いへるを〔草木春備〕に引てこゝにいろといふだにいまはしければいろとのみいふと淺ましくいまハしきなり色なればにびいろといふ今日光山にて土人の野邊送りを見しに女ハ白き絹にて袖をたゝみたるやうの物を首にかつげり是が浄衣にすきとをりて諒闇のいろの如くに見えければとあらば今の女詞に紅といろとのみいふと淺ましくいまハしきなり〔源平盛衰記〕にハ薄あをの帷子を下に着給へるを着るこれをいろといふ○因みに云ものきはしてて爪に白點出來るを衣服を得る兆とす〔格知鏡原〕に物類相感志、人或爪甲上、生白斑一拂々然、謂ニ之爪花得ニ服飾之兆一、俗人爲驗常無レ失、とあり〔六玉川〕三篇むつことに問かけてみる爪の星これ衣服を望むなり

髙澤〔和名抄〕澤、釋名云人髮恒枯悴、以ニ此合一レ濕澤一也、俗用ニ脂澤二字一〔和太阿布良〕〔古寃 玖波集〕にあぶら綿をさしあふらにふたりけるにいとかうばしくにはひければ上西門院兵衛灯火いたきものにこそ似たりけれ待賢門院堀河丁子がしらの香やにはふらん、古へは綿に香油を漬し置て用ゆるのみなり後にハ是を竹筒に貯へけるにや、宗鑑山崎にて竹の油筒と作りて售しとかや

伽羅の油　環海異聞オロシア男女髪ニ油付ル「ポマク」ト云スキ油ノ如クニテ製スルカシ

伽羅の油なぞいふかたき油ハいと近きことなり〔女鏡〕に髪に油をつくるに常の胡麻の油を付侍れば殿によりてきらひ給ふものなりくるみのあふらをとりてつけ給ふべし第一黒くなりにはひせぬものなりと有り油を用ることすくなきを思ふべし〔落穗集〕に寛永の末正保の頃の事をいひて伽羅油ハ前髪立の兒小性などハ格別其外ハ上下ともに年若き男の髪に油付るをばなまぬるき儀に致候となりその時代にハもみあけの頬毬はやり侍にも有之候へ共先

ラズ少シ梓腦臭シ油ヲ付タル上ヘ「ヤーホルキムツカシー」ト云フモノヲ置リカケヤーホルキハ一種ノ芋也ムカハ粉ノ「ナリ」ト云フ花の露

ハ徒若黨小者中間の類にあまたこれあり其輩蠟燭のながれをとき松脂を加へ伽羅油と名づけ用ひ候此節も伽羅油入用候へば薬種屋へ申遣し調へ候今時の如くなる伽羅の油店無之候「昔々物語」に女なぞ伽羅油付るとゆめ〳〵なしさるによりて伽羅油賣所江戸中に六ヶ所なからではなし目薬貝ほどの貝に入て賣を一年二年にも用ひ若衆なぞ多く付るハ二ヶ月ほどに用ゆるもあり伽羅油付るを恥のやうにおもひたりとあり「世事談」に正保慶安の頃京室町髭の久吉賣初む其後三條の市宇賀繩手の五十嵐これを製す江戸にてハ芝の大好菴春虫喜右衛門なぞ始なり「我衣」に寛文中日本橋室町一丁目に若衆方中村かつま伽羅油店を出すこれ油店の元祖なるべし其頃が「賢女心化粧」といふ町へ谷島主水といへる女形油店を出すこれ人モ髪ニ挼ニ和關白キ粉ヲフリカクヲ風俗モ老少年モ成ノ婆ヲナスヲ貴ヲフニヤト嫁のかみゆふをみるに伽羅の油を付らるゝがあれ草子に姑六十年以前の事を定規にして其品何物ぞと問ハゞ武家かたの中間奴なぞか麁にこそ付る物なるに女のあたまに付るといわんまりけうといふ事なり云々又香具屋といふ者有て振うりにもありきたり西鶴「大鏡」にみゆ又「一代男草子」に匂ひ油は油賣あり小栗の説經に後藤助國と云ふ香具屋の事みゆ「吉原徒然草」によきやらの油ハ香具に念を入れ背虫が油ハいたく松脂をつかはず又あたるき女の顔花の露にて光らせたる云々此花の露と云も薬油にて面につやを出す者なり彼「一代男」に芝神明前花の露屋十左衛門と見えたり「江戸鹿子」に伽羅油屋花の露屋神明前大好庵同門前町林喜左衛門とあり十左衛門といふハなきをゝかいへるハ戯作なり「佐夜中山集松江重」わかき時もつものとてやびんかゝみきやらの油もかくしし女房重長

びなんかつら

五味子髪を結ふにびなんかつらとて南五味子の莖を水に漬し其ねばり汁を用ゆ「北條五代記」に髪をゞびなんせきにびんを高くつけあげ給へりと有り又猿樂能狂言に麻生といふあり摺子木をひなむせきとて髪を撫付る狂言なり「色芝居草子」に髪ハそはろの時より丁子油山吹ねりさねかづらハ干あがりてから蚰蜒のはふたやうにきら〳〵して見苦しきと紙漉のとろゝをつかはせ云々びなんかづらを水に漬て用る器狭水入といふ塗物も金物もあり形圓扁なり難波などにハびんかづらを見えて大坂版の前句付にさても結構な日和さまかな月代へ髪付入をなど頭日ハ三州某の谷びなんかづらを取つくしけるとも京師難波東都ハ更なり所々の都會及び田舎の末々迄是を用ひざるはなしとかや是又一時の妖草といふべきにやかくいへりしも廢れて今ハ久しく成ぬれど近頃まで油店の看板にかづらの束ねたるを置たりしがそれもいつか皆うせて唯兩替町なる下村の店にのみもとの儘におしろいの看板の上にのせて有りそのあるじに尋ねければ今も稀にハこれを求めにくるもの有とぞ

びんつけ

びんつけハ上にいへる伽羅油なり故に是も下村などの油の紙袋にハ今もきやらの油と記したり箕山か「色道大鑑」延寶六年の序あり びんつけハ花露伽羅油を用ゆ付ともいふすき油などの名ハなし油ハ松脂煉ハ髪枯てわしゝ蠟ねりをよしとす又髪を梳る事を云處に油ハ水の實を第一とす梅花これにつぐといへり「職人圖彙」に口上商人よろつの合薬並に髪付のたぐひ諸方の市法會の場に出て辨舌をもてこれを賣これらハ天和貞享頃のとなり是今やしと呼者の類香具師といふ者なり

かづら
須惠

ふびかつら
かつらひげ
かつら捻

髪須惠（カヅラ）　元結撥元結　月代　けつ𪜈き　鬢子　額を扱　下食日　蚰蜒　さかやき　野老　十河額　はなかみ額　唐犬ひたひ　半頭　茶筅がみ　おつがみ　立髪　頬髭　ひげまん

髪ハ〔和名抄〕釋名云、髪音被、和名加都良、髪少者所以被二助其髪一也、俗用二鬘字一非也云々、また假髻、釋名云、假髻和名以、此假髪一髪上也、釋名今の本ハ假髪に作るハ非なりいづれも入れがみと呼もの、そへがみなるべし須惠とハ末の義にのなれど髻ハもとゝりなれば假髻ハ今曲といふものなれど髻ハもとゝりなれば假髻ハ今曲といふもの、そへがみなるべし須惠とハ末の義にや〔類聚雑要〕五節理髪の具に末額髪とあるも是なるべし今そへといふハす又かづらをえひかづらともいへり〔源氏初音〕花ちる里のさまをいふ處御ぐしなどもいたくさかり過にけりやさしき方にハあらねどえひかづらしてぞつくろひ給ふべき其〔抄〕に伊弉諾尊髻をなげ給ひければ蒲萄（エビ）となるそれよりかつらをえひかつらといふと有りえびとハ長き毛をいふなり蝦をえびといふも是なり蒲萄も蔓の長ければこの名あるなり又大ひげなるをかつらひげと云ハ〔椎がもとの巻〕にとのゐ人ぞかつらひげとかいふつらつき心つきなくてある〔三十二番職人歌合〕にかつら捻「花かづら落かみならばひろひ置ひねりつぎてもうらましものを、又「うつくしくかゝれとてしもうはこせいよめがかつらをひねらさりけん判云歌かみのゆう〳〵となひやかなるさまたがうしろでのふさやかなるそきめにもかゝるゑなわ有かたくこそ見え給ふれかづら捻といへば賤きやうなれどかの常陸のみやの御むすめも我落がみをこそ薫衣香の壺にそへて乳母の侍従にもたびけれ賤きあまのすさみにも

おちやない

たえましき道のすぢハ詞の玉かつらにて侍りけりとあり〔源氏蓬生〕末摘花のめのとの侍従に給ふべきものなくてわが御ぐしの落たりけるを取あつめてかつらにし給へるが九尺餘になり昔ハ衣のたけ九尺なればかづらも九尺にするなり今按るに〔末つむ花〕の巻に此人髪の長き事見えたり古へかみの長きをめでたるから物語等に多くそのことをいへと古人とてみな髪の長かるべきやうなし長きものハ皆捻りつきたるかづらなるべしきぬのたけ九尺といふもおばつかなし古畵などにもさはかりなるをみず木文の九の字も恐らくは七の字にや〔枕草紙〕むかしおはえてふやうなるもの七尺のかづらのわかくなりたるなどみゆ

〔職人圖彙〕におちやないハ都の西常盤といふ處より出るとかや女の頭に袋をいたゞき髪の落をかひかもじにして賣買世渡る業とすそれをおちやないかといひて町々をあるくなり畫の八ツ時より出るなり是古へのかづら捻りと同じ今ハかづらやハあれど落買と云ものなし女の業に定りしもの故〔籠耳草子〕に男女所業のかはれることをいひて御池長者町にハ男のせんだく綿つみありやがて女のかご昇男のおちやないも出べきにやとあるまじきをいひしかど同じ業なるかづらやハ男の職となれりも昔も猷舞妓のかづら師は男なり銅のかふりものにかづらしつくるハ女にハかなはすおちやないハ〔應筑波集〕たけのかつらをもてるおちやなね、といふ句に「桶ゆひハ不斷こがしやのみねらんといふ付句あるを思ふに昔よりちやと呼りとみゆ

〔古事談〕に惟成辨済貧の時その妻よくはからひて恥をみせざめず惟成いまだ秀才雑色たり

女子髪をきる事

し時花道遙に一種一物ふけり惟成にハ飯を宛たり妻みづから髪をきりて交易し物をとゝのへたるとありもろこし〔琵琶記〕にハ蔡伯偕が婦の趙五娘髪を剪て親を葬る料とする事を作れり又まごゝろをあかさむが爲にふたる事ハ唐の鄭啓が〔傳信記〕に楊貴妃常に嫉妒にして玄宗といさかひければ高力士に命じて車にて其里第に送らしむ貴妃うらみ悲みて髪を剪て力士にとづけて云ふ珍異の物ハみな君の賜ものなれば獻るに足らずこれハ父母の生る所なり是を捧げて妾か悲めるおもひの萬一をのべよとて贈りければやがて又召歸されぬ又〔元曲選〕に李素蘭といふ妓李玉壺といふ男の爲に髪を剪る詩あり結句に今朝截下青絲髪、方表眞心不嫁人、この類いくばくもあるべし〔今物語〕に松殿基房の思はせ給ける女房かれ〳〵になり給ひて後云々日比つきせぬなげきもわらはさめと思ひつよりてたけにあまりたりける髪を押切て白きうすやうにつゝみて「今更にふたゝびものをおもへとやいつもかはらぬおなじうき身に、と書付て御車にいれて參らせたりけるされば心中とて髪をきる事もいと古し

元結

元結、組を用るハ式正也後世も民間にハ紙よりを用ゆ友山云今時もてはやし候文七元結と申もの以前ハ無之上下ともに手前にてよりこきをいたし用ひたるとにて候〔春臺獨語〕に婦人ハ麻繩を用ひたりと有り其後〔世事談〕に若衆女の長く用るハ平元結とて紙を一寸ばかりにたちて卷そへしなり〔類柑子〕に其角が茅場町の栖の隣なる閑地にて車をかけ元結をこくる事をいひて文七と云者元結こく處に成ぬるなり云々「文七にふまるな庭のかたつふり「元文七元結

月代、

はれ元結

結のねるまはかなし虫の聲「大絃ハさらすもとひに落る鴈、かゝれば文七ハ元結ふぐく者の名と聞ゆるに〔世事談〕に摎元結寛文の頃より起る紙捻を長くよりて水にひたし車にて縷をかけて水をふぐく故にふぐき元結なり又文七元結といふなり是ハ紙の名なり至て白く艶ある紙なれば此紙にて製するを上品とすといへり此說然るべしこれを製る故に元結こきをもはね元結今あるものハ近頃のものとみゆもとハ今いふ長ながが紙のたちし樣なるして結たるがその末上にそりたるさま古畫にかけるがある是なり思ふに今はんがけと兒女子のいふ物類の內、髻結根本江戶に初る今世京都大坂にて專ら是を作る

める是ハはねがけにてはね元ゆひを省き云なりかくて後色々染紙ふて作れるも出來つるなり〔一代女卿子三〕金紙のはね元結といふ條あり反せんが爲にはりがねを入たるなり〔世の人心一〕針がね入のはね元結と見えたりみな若ざかりの婦女が用ひしなり今のとく女の童のみの物にあらす〔色芝居草子〕やつはり髪ハ大ていにはね元結も目にたゝず出し髪も少しつと有てれくれの出たハうるさいもの云々〔我衣〕に寶永より油元結店多く出來たり元祿前より元結引ありといへども買ふ人まれなる故多くハなしといへり

男子月代のとを〔秋草〕に今世の中剃（ナカゾリ）のとゝするはいかにぞや兼實公〔玉海〕に安元二年七月建春門院崩御の記に時忠卿自二件簾中一出レ首（其髮不レ正月代大見苦而色殊損）亓左大臣以下」云下署〔年山記聞〕これを引て云時忠卿ハ女院の兄なれば御簾中へ出入せられたるべし月代の事古き物にハ此記

に初て見えたりといへり又〔撰集抄〕〔沙石集〕〔太平記〕等合せみるに月代といへる額を抜たること也〔和事始〕に月代ハ北條氏執權せし頃より始まるにや云々昔ハけすしきとて髪を抜ものを以て額の上を少し抜しに信長公髪をぬきて益なく頭の痛むことをうれひて剃刀を用ひしなり其古へハ髪を剃ると僧尼の外ハきはめて忌々しき事にせしとかや此説誤多し安齋云此説信じかたし〔和名抄〕鑷子ハ見えたれども鼻毛を抜に用ひし也けすしきとて髪をぬく具又ハ額をぬく事古書に見ざるとなり寛永正保の頃血氣の勇を好み腕立する者より始るよしへる是また誤なり月代ハ額髪を剃もし抜もふたる事にて烏帽子冠を着て額に髪毛の見えぬ程にふたるなり鑷子をはなげぬきと〔和名抄〕にあればとて髪毛を抜かぬといふとやわるべき婦人の眉毛ハこれをもて抜くにあらずや髪を抜し具ハ三浦氏の〔見聞集〕に愚老若き頃關東にてをのこの額毛頭の毛をば髪剃にてもそらずけつしきとて水を以てはさみを大に拵へ其けつしきにて髪毛を抜つれハかうべより黒血ながれて物すさまじかりしなり頭ハふくべの如くにても毛のなきを男の本意風俗とす云々此作者永祿八年に生れし人なれば若き頃ハ天正中の事ともきらる同作〔北條五代記〕にも鉄漿にて歯を染又けつしきとて木にて剪刀を作り首髪を抜うすろがし髪毛を五味子かづらにてかため髪の末をもみふさのとくに結び或ハ入髪とて別に髪末の如く作りもみちゞめて花ぶさの様にせしといへりけつしきの下に云べしこれ鎌倉柳營の餘風なり〔太平記〕天下時勢粧の條、公家の人々いつしかいひもならはぬ坂東聲をつかひ着もなれぬ折えぼしに額を顯はして武家の人に紛れんとふけれ共立振まへる體さすがに媚きて額付のあと以の

外にさがりたれば公家にもつかず武家にも似ず只都鄙に歩みを失ふ人の如しと有り額のかたを多くおくやうに着るが武家風のえぼしの着やうとみゆ故に額付のあと以ての外にさがるといふ額の髪際を抜たるとまるし是いはゆる月代なり〔平治物語〕京師本牛若奥州下向條に遮那王ハ十六と申す承安四年三月三日曉鞍馬寺を出けり云々其日近江の鏡の宿に着て夜半許に髪を我と剃上ひごろ懐に持ける刀をさし常にされてさしけりとハ誤り有べしされて着たりと有り常にさしけりきけるの誤りにやハ戯になりさしけりハきけるの誤りにはぜに剃なり剃たるハ毛の生るとも早けれハ抜きもする也此にて〔撰集抄〕〔砂石集〕等のさかやきの文も心得べし〔犬筑波集〕番匠の道世ふたるなりをみよひたひに殘るてをのさかやき、額ぬきたる者の法師あたまみなかくありさかやきとハ冠明の義といへり又逆上を厭ひて剃なれバ逆息（サカイキ）なりといふハわろし〔小右記〕に大夫名隆家訓讀云伊部乎佐加也加寸、尤有興事也とありさかやきもかゝる祝詞などにもよれるにや〔源氏明石〕入道領所の山水を云處に時々につけてけうさきすべき云々〔細流〕に可催興花のさくと云もこと是なり（サカヤカス）さてさかやきをひろくふたるハ昔もあれどみな武夫のいやしきものの心もあり此説誤なり其他も下部の者にハ往々ありしと見えて〔後三年合戦書〕なども始として古書どもにかけり其風の普く廣まりしハ足利義昭公上洛の時信長公の御計ひなりしと織田家の記にみゆ〔和事始〕ハ是を誤りていへり

けつしきの事ハ按るにけさき也暦日に下食あり此日沐浴すれば髪毛落るといふ〔拾芥抄〕に諸頌部、下食日沐浴の誦あり妙善王、金著女、追杖鬼、參尾王、波羅々鬼かく誦すれば髪ぬけ

蚰蜒

ずとかや彼器ハ髪を抜ための物なれば下食と名付たるにこそ〔源氏あづまや〕女君ハ御ゆするの程なし九十月ハいかでかはさてつかふまつらせつるを云々〔抄〕に近代まで沐浴に日を撰びしなり先正五九月を忌みみな月とて忌なり 今俗に身のうちをげじ〳〵に這はれたる處の毛ハはげておひずといふ或云此俗説ハ下食時を誤りたる也下食時とげじ〳〵と聲近きをもて云是おかるべからすげじ〳〵ハ〔本草〕山蛩蟲の附錄なる蚰蜒なり此蟲人の耳に入る事あれば一名入耳ともいへり但しその見えざれどもこゝにハ昔よりいひ傳へたり實に此虫の這たる處腫て瘡となるとあり〔應筑波集〕けぢ〳〵にどこねぶられてよめがはげ又〔紅梅千句〕に「守宮のおるしはげたるぞうき季吟けぢ〳〵」が留主する部屋に這廻り長頭丸とあるにてもおるべしこれら皆けぢの假名を用ひたりこれも下食より云名ならずけしのかなゝり

鑷子

鑷子髭を作る事を好むころ書院のたばこ盆に毛抜を添置たり是を書院けぬきといふ明暦二年の刻梓〔世話燒草〕に「なむぼうか冷る書院の内ならん月にくさめをするはな毛抜、南方ハ毛抜の異名なり漢土にても白髪を抜くこれを鑷白といふ楊誠齋、鑷白詩、止酒愁無那、哦詩意已闌、鑷髭非急務、也遣半時閑、又、莫把菱花鑷白髭、歡君留取伴險詩、錦裏若要添新句、繡口如何減素絲、宋の彭淵材と云もの狹梁公の像を見て其相を學ばんとて刀鑷者を呼て眉を剃おむといへり刀鑷者ハ髪ゆひの類なり〔刀鑷をかみそりとけぬきと二物と思ふハ非なり剃刀ハ專ら用ひすけぬきといふなり 此頃頭を剃る事ハなし刀圭といふも二

さかやき

物にハあらす

さかやきそりしあたま古畫にみえたるハ〔月代ハ上にいづるが如しさかやきハ月代の廣がりたる名として分つハ混してまぎらハしければなり〕今の如く髪

野老あたま

狹く殘して剃たるハなし其さま寛文の頃の歌舞妓役者のやうに中程を細くそりたり又前がみをおきて中剃おたるもあり結城合戰の繪に結城七郎氏朝が體其外〔春日瞼記〕などにも頭そりたる者見えたり今ハこれを野郎あたまといふ歌舞伎若衆前髪を剃らおめて野郎と呼ぶそれが帽子を今もやらうぼうしと云ふ是なり野郎ハもと薩摩詞なり坂部胡分が〔到來集〕延寶四年刻

遊冶郎といへり是等もとづく處にや俳優を專ら呼びたらむうへハ常人の同じくさいはむハいと恥べき稱なり〔醒睡笑〕ふいとのるといふ條、初め鍛冶やなるもの鞘を好み殿上人の風を學び五體づけの頭をひたものおけり人々そのあたまの逸興なるをみつけ不審しおへり刀の中心にてやきたる故に備前長船祐定作と云ふあとありといへりかぢやなれば職分の刀の中心を燒がねにして月代を燒しなるべし今にていおもひよらぬ咄なり彼けつしきにて拔たる處黒血ながるゝなど云るを思へばかゝるとありもすべし其時の人ハ聞得しとゝ見ゆ五體づけは今も髪を引つめて髻を高く結べるをいふ

額とぬく十河額〔後出〕

額をぬくに樣々あり〔俳諧嘉多言〕にそがうびたひといふ事ハ十河殿といふ武家の人の頭つきよりいひ出たる事とぞ無下に近き世の事なり此書慶安三年の板三好に與したる十河氏なるべし或云此説非也そがうハ總髪びたひなりといへり千前軒文耕堂合作の淨瑠理〔小栗判官車街道〕池庄司が島原に來る處にはうろく頭巾取のくればそうがう額の總白髪と云とあり是も十河の説を取らざるにやされどまづ普通の説に從ふべし此風を女も學べり〔下の婦人けはひの處にいふ〔安齋隨筆〕〕

ほふがみ額

唐犬びたひ

〔錦芥抄〕を引て云額を四角にせしい越前の追手といふ相撲のせしを皆學びてなり昔いはふがみひたひとて丸らかに少し拔し也此說の如くなるも本い男達の風にならひしなりと云へり安齋ハ古風には額拔事なしと思へるよりかはふかくいふなり丸らかにぬきたるハ月代なりびたるとに花香實と云ことあるそれにやあげ角を錐さきの如く尖らせて拔上る事六法むきの譯是を用ゆ此道の一派にありといへども多くい卑賤の所作なり小者中間これを專らとすれば彼に比せんい口惜かりぬべしされども額いひらきかり高き方まさる高くとりすべしたるいいやしひきからすと見ゆる程を知べし角い蛤角に取べし猶額の至極いおのれなりにきはたゝずして髮さきのみきしりと取廻したるを最上とすなど云りかの大額を世人好みしかば寬文二年寅七月町觸に町人若き者大ひたひ取候者有之自今已後無用可仕事とあり其後も〔洞房語園〕男立深見十左衛門と云もの延寶年中浪花の宗因江戸に來りしとき十左衛門其社中に入それが發句に名月やきてみよがしの額際といへり額を廣く拔あげたる故なりその句の端書に上署治る御代の月はさえて仲のおはちい艷色の最中前から見えぬ額際を來て見よかしと謠ふいたそ深見十左衛門と有りたる故髭の十と異名をとれり〔同書〕に一歷が鯨の發句其頃吉原にて小歌に唄ひしなり此事〔俠客傳〕にも出たり此者髭を生したるの端書に髭の達人い唐土に關羽日本に朝比奈宗祇女郎買に無休あり十あり云々また唐犬權兵衛といふ男立も頭付の異風なるによりて名高く唐犬びたひと云と今にいひ傳ふ此額いの會の次迄取あげとこれい十左衛門などより昔のとなり〔一代男草子〕に承應年中の事をいへる處

ハンカウ半頭

茶筅髷

其頃世之助い江戸に來りて唐犬權兵衛がかくまへて有けるあたまつき人にかはり男もすぐれて云々あり〔非跡合考〕に天和ころ迄町中に男達と、ふ曾突ありておの〳〵、髭をなして徘徊せし奴の中享保の始め凡九十歲はかりなるトウケの組に十兵衛と云ふ男達の某云々みゆ唐犬組なるべし此男立の惡風俗い室町將軍の時より盛なり其ころ惡徒さま〳〵異風をして半頭なともありこれい若き武士も多く有て古書に見ゆ常の奴あたまの中程に横に毛を剃のこして俗に是を障子と云この障子の處までそりてうしろのかたい剃らで置くこれ半頭なり今も武家の輕き者に此障子の髮を髻と同じ長さにし結込い常の樣也是を短く切てはんからと名付るもの有り又半から剃とも云〔相撲の條〕

茶筅髮種々あるにや〔洛陽田樂記〕にいこれを放髮といへり又烏帽子ふたい〔貞順故實集〕元服の事髮の根を三重に結候てわなに留候又〇〇計置て右のとく又結候結留いぼんのくぼの方に有べく候其先を引合二枚にて文なぞの如くに卷て又その上を結候へば三々九にて候髮のうらを柳の板にあて候て三刀にはやす也また五刀七刀にも能々はやし候を三度もみ候て息をふかけ候て採申候扱又上の方の結目を解て根の髮計にて烏帽子を着候その後上下を着し候て祝ふなり事〔秋草〕にも出たり上下ハ素襖なり元服の是い正しき體なりそれを〔北條五代記〕に髮末をもみふさの如くにし或い入髮してもみちゞめ花ぶさのやうにするといへるなどこれ茶筅髮なり〔老人雜話〕に信長美濃の齋藤が所へ聟入に行し路すがら廣袖のゆかた茶筅髮なりしを迎に出たる山城が家老其樣を見て肝をけしたる由見ゆ今夫に離れたる婦の茶筅髮といふをおもへば前に向ふも後に仰ぐも茶筅の形ちたるをいふ名なるべし織田家にて御茶筅といひしも

おつかみ立髪

信雄の髪の風によりていひしとぞ〔應筑波〕正親幼名るにても種々あるを思ふべし元隣が〔寶倉〕に茶筅かみいなめ氣なるものなれど少年の風呂あがり思ひ捨かたきものにして小歌〔松の落葉〕源五郎兵衛踊薩摩源五兵衛い目に立男ノホシニホ
ぞやれた髪付ちやせんかみ寐て又起ても茶筅がみ又小野村彦想踊り わたま茶筅ふともとではそもと
でふともとはそもと引ためて地下でひとりのだて男〔榮花物語五〕月代剃て茶せん髪三ツ着る
物ひとつ前云々〔丹前能草子〕茶筅髪ゆたかにかり着小袖もすこしいせんぞやう〔賢女心化
粧〕夫婦いさかふ處亭主い茶筅がみにもとりのみしてわけざるをみな茶筅髪といふ
放ちたるなり
古へおつかみといへるい今立髪といふとひとし〔古事談三〕首れつかみといふほとにおひた
る法師云々〔著聞十七〕かみおつがみなる 法師一人ふしたりけりと見ゆおつかみい怕ろしき
義にや今もおぞ毛振ふなどいふことあり髪毛久しく剃らで長う延たるをいふ是いおふし立
るにいあらでかくなりたるなり立髪いことさらにおふし立るなれど是も初め故ありて久し
くそらずのびたるをもいふ箕山が〔大鏡〕月代い立髪を第一とす風流にい然りといへども世に
勤むる者などいなりがたき體相なれば是を用ゆる人すくなし病氣保養の内など云より外な
し相撲とりなどい平生かくもあらん彼に類するもおこがまし役者さへ作り立髪を用れば兎
角まれ〳〵の事なり用ゆるとの事なり かぶき者もかづらと〔松の落葉〕手合相撲さてゝん立がみちから自慢云々
〔諸艶大鑑〕立髪の小者べんがら島の風呂敷包に竹のねぢ杖をもち添云々此體の草履とりむ

煩髭

かしのはやりものなりこれを作り奴ともいふ〔東海道名所記〕當世の作り奴にはき替の草履
をもたせ云々又りつば草履とりなども云ふ丹前の餘風此奴みな頬髭を作れり
頬髭い〔河海抄〕にかつらひげおもつらひげなりかつらをかけたるやうに生ひたる也などい
へるといかはりて作りやうあるなり〔見聞集〕にむかし愚老若き頃關東にて髭はへたる人を
ば面にく體ひげ男といひてはむる故に皆人ひげを願ひ給へり云々髭はへぬ男い一期の片輪
に生れけるとの無念さよ女つらと見らるゝ口惜さよと人の餘所といふをも我ひげの事かと
恥かしさの思ひ顔にあらはるされば天正のころはひ小田原にて岩崎嘉左衛門片非六郎兵衛
といふ者ざれとをいひあがり嘉左衛門に髭なければ六郎兵衛あの髭なしと惡口ふければ即
時にさしちがへて死たり男たる人髭なしといはるゝい憶病者といはるゝ程の恥辱に思ひ給
へりこの十四年このかた頭に毛のなきをば年よりのきんかつふりはへすべりなどゝあだ名
をいひて若き人達笑ふ扨ひげはへたるつらいぞんなつらえぞか島の人によく似たりといひ
ならはし上下の髭を殘らず毛抜にてぬき捨る然る間笠を着頭包みたる人をみれば法師とも
男女とも見分がたしされども昔にかへる事もあるべければ異相なる人有て頭毛を扱髭をは
へさせたらんにいみな人ひげはへて昔男の業平とやいはんと〔慶長年間にふるしたるなり〕かくいいへれど悪く
さありしにはあらず但この頃より髭をそる事にはなれりとみゆ此後も猶浮氣の若ものい男
立の風をならひ出立たる者も多かりもとより此體男立のみの風にもあらずよき人も好める
あり下郎の風となりしい後の事なり〔醒睡咲〕に大名の世に勝れて物見なる大鬚を持給へる

有り餘りにひげをまんじ云々いへる物語も慶長ごろの事なるべし下郎のひげのとい〔缺脣物語三〕下らうの形きよらかにかはけだかく頬ひげ有てじんじやうに生れつきたるい其身に損ありてさらに益なし心い體に順するものなれば形にまよひて身をかざり云々大道寺友山云ふ七八十年已前其時代にいもみ上ケの頬髭と申義はやり尤侍の内にも有〕之候へどもこれ寛永正保慶安のころを云ふなり〔東海道名所記〕萬治元年うは髭を松蟲の聲にひねりあげて面のかゝりかまきりの如くにやせたる男云々作り髭い松脂を蠟に和て是を付け空さまに髭をひねり上たるなり　松虫の聲といりんとはねさせたるを詞をあやなしていへり後髭を剃ることに成ても奴い墨にて髭を畫く是を作りひげと云ふ〔五元集拾遺〕西瓜くふ奴の髭の流れけり〔色芝居咄子〕おいでの若になりて三條勘太郎が釣り上らるゝを見て御道具持の髭を泣落させ云々同じ頃冠り付「筆とりて世をあやつりの作りひげ〔松の落葉〕田舍衆いかな客衆よりもひげの角さまおいとしお歸りのあと見ればひんつけ一員はなげぬきおぐりのそうしを置れた是が花かやたゝし今宵のつとめか云々〔矢根鍛冶后集〕よき作意とて譽られにけり「花の山奴がひげの返り視、此體赤坂奴に殘れり

延寶天和の頃に俳優坊主小兵衛が糸髪わたまにて異名を取しも其ころ師宣が浮世繪にいとびんのわたまの奴多く見えたりその風に倣ひたるなれど是い俳優ゆゑ名を得たり又それを眞似て同じ異名を取りしも有り此わたまも〔見聞集〕に昔にかへる事もあるべければと戲れにいひたりしもわたれり〔誰袖海〕にさる御屋敷に有付き只今い與五平と申御門役云々昔

ひげ奴　ひげまん

の俤今のひげ奴と成てうす髪の一筋に心なき身とおもへども云々〔雨夜三盃機嫌〕狂詩に扈從連臆（ミリニ）髭自慢など枚擧にいとまがたし〔宗因千句〕奢られにけり若やかれけり「髪ひげをりんと作りて錦きて獨の江よりや來る船頭、又「かの澤にちつくりと咲かきつばたひげまんをする野守なりけり「ほゝげたに毛扱をひとつ取らさばや、ひげまんい髭自慢なり鼻下と書てその意とするい後の押わてにて非なり

鎌倉風

鎌倉風　婆佐羅（バサラ）　錢首　慶長風　總髪　散切　一束切　奴　俠士（せきれいし）　よし　や、大小神祇組　馬咎等咎　鞘あて　喧嘩買　男子髪の風　婦人の首飾　同髪の風　かうがい、かんざし　櫛　鏡

古より移り變れる時勢粧のと委しくい知べからねども武家盛りにして鎌倉風行はれてよりやゝかはれるとも多かめれど猶四民ともにえばし着たる迄い古風にいたく異なる樣も見えざるにや應仁のみだれより後い戰國の餘風改らず大に沿革せし事も多かるべし

〔太平記廿一〕公家の人々鎌倉風を學びならふとすれと二物の中間にして都鄙に歩みを失へる人のごとしといふ事前條に引たりまた〔建武元年落書〕に此ごろ都にはやる物まな板烏帽子ゆがめつゝ氣色めきたる京侍云々尾羽おれゆがむるせ小鷹手毎にたれも居たれど烏とる事い更になし鉛作りの大かたな太刀より大にこしらへて前さがりにて指はらすばさら扇の五ツ骨ひろ腰やせ馬薄小袖云々下衆上臈のきはもなく大口に着る美精好鎧直垂なは捨ず云々又同時の法度條々に一鎧直垂蜀錦吳綾金紗金襴紅紫之類、細々警固之時不可着用、一精口

市女笠

有べし供の女ハ頭にかぶり物なく長柄の傘をかつぎ又ハ色々の絹を續合たる袋を負たり是も衣服ハ横筋なり〔拔るに〔竹倉物語〕に舟歌〔上略〕おわかい衆のお女郎衆達のなりふりは肩にかのこのだんだら筋服にうきよのめめり筋なう腹すちいたやさいへる此筋の服の事なり　又女の笠ハ市女笠等にて下にかつら布を二布合せて縫たるを後の方に尻の下までさけたるも有り又手拭を笠の下顔の左右に肩のうへ迄さげたるもあり又男の肩衣幅せばくひだなし小袖の如く袴をかき合せて着る紋所の下横筋を染たり

總髪撫付散切

〔總髪〕武士髭ハさらなり總髪のもの老人なぞにハ殊に多し天和貞享ごろ迄ハ專ら有之猶其後も往々見ゆまた髻せず垂たるも有り〔武道傳來記〕などに散切と書り今いふ撫付なり總髪をも總ていふなり又俗に殘髪とも書けどもかつて何の書にも見えぬ字面なれば近世の押當文字なるべし武士の散切は〔義理物語〕にも見え散切の又がそうといふハ髪僧にや有髪僧よりいふ歟また喝僧女童は〔三代鎌倉記〕といふ草子にも見ゆ

喝僧

とも書り〔和爾雅〕にハ瞶僧、今俗稱蓬髪者、爲瞶僧、言似瞶僧故爾といへり正章が〔獨吟千句〕に流石うき世を捨ぬ牢人がつそうも油を付つなでつけつ（撫付是なり）自悦が〔洛陽集〕虫の句の中「蜂兒や喝僧の秋果もなし自悦古き前句付に此大ぜいの内撫付をかき手拭て引包み、また四方髪ともいふ〔寛永發句帳〕にあづまやの軒のあやめや四方髪親重もとゆひを切ハ入道して法師とならむとするあらまし也一束切と云とありこれハゆる散切なり〔太平記〕矢矯驚坂手越河原闘の條將軍ハ矢矯の合戰の事を聞召候ひしより、建長寺へ御入候て已に御出家候はんと仰候ひしを面々樣々申留て置參らせて候御髻結ハ切せ給ひて候へ共いまだ御法體にハならせ給はずとそ申ける中略されて一束ハ一門の浮沈この時にて候ひけるさらば力なし尊氏もかたゝくと共に弓箭の義を專らにして義貞と死をともにすべしとて忽に道服をぬぎ給ひて錦の直垂をぞ召れけるされば其頃鎌倉中の軍勢共が一束切とて髻を短くきけるハ將軍の髪を紛らかさむか爲なりけりとあり髻結ハ〔延喜式〕に見えて髪結ふ組緒の事なればそれを切て髪を放ちたるなるべし又頭髪を手してもとゞりに取り手に餘りたる末を剪去とならむといふハ皆非なりこれハもとゆひの根より截たるなり手一束の末を切たらんハ少し短くとも紛らかされぬといあらじ又もとゆひの組のみ切たらんハ諸軍勢の髪を切て紛らかすにハ及ばぬとなり又古へ髪を切て人を辱かためたる事〔古今樂雅抄〕に業平伊勢の齋宮を犯し又二條の后と密通ありけるにせうとの人々いきどをりてもとゞりを切て長髪のほと東の方に下向すといへる說も有また〔著聞集〕に秦の兼任貧しかりける頃のひとり從者を召次の長になりし時年ごろのふてごとをやすからず思ひ念しけるが日頃の腹をすへむとて其從者のもとゞりを切しとみゆ又〔源平盛衰記〕熊野山御幸の條清盛入道難波妹尾に下知して攝錄基房公松殿の供奉師峰高範等がもとゞり切たる事また〔長門本平家物語〕師高燒拂溫泉寺條に寺の大衆怒りてとねりのもとゞり馬の尾を切たる事ハ同じ（今非人といふものゝ散切はこれらの遺意にやあらん）ど法体にならむとてするとはもとの起り異なれども髪をきる事ハ同じいと近き頃人とあらかひしてまけになりしより始るとぞ

束切

だて風

だてとハ立なるべし物をたてゝ過さんと〔著聞十五〕西行法師の事をいふ處に世をのがれたるとがの木のとがくしさをたてゝ通さむとするをいへり〔夫木〕に爲家「いさゝらハ茂り生

ばさら

のけえも
後えもん

大口一切停止之可用練大口と有り大かた猿樂能にみる所のさまたる成べし又ばさらといふハ〔太平記〕に佐々木道譽が一族若黨ども例のばさら風流を盡し西郊東山の小鷹狩してとありばさら風と云とそのころのはやり言にて猿樂狂言の詞などにもあり婆娑の義にて狼藉なるをいふにや五骨の扇ハ中啓にや末廣がりたれはばさらといふ歟今もちりみだれたるやうの事を俗にばさけると云なり〔鵜鷺合戰物語〕けしからぬ軍ばさらにて煉貫の母衣をかくといへるなどハ美を好み侈りたるさまなり今いふだてものなるべしその無法狼藉なる後にハはすはといふとなどの如く用ひたるにや〔去來抄〕に誹諧付合の事をいふに「白粉をぬれども下地黒い顔役者もやうの袖の薰もの、この前句「今やうばさらの女とみゆといへり又土佐ぶし上るり〔草摺引〕に扇うちはのばさら繪にも云々是ハ前にいへる意也〔北條五代記〕昔關東北條氏直時代まで諸侍の形儀異やうに候ひし上下のひだのためやう衣紋のかきやうに至るまでも小田原やうとて皆人學べり云々〔幽尼〕に天文以前在國の武士の風俗云々衣裳も素襖をのけえもんとてうしろへ引さげし小袖ばかり着する時も背の見ゆる程に襟をのけて着るをよしとす袴腰のひきのけて後えもんとてうしろ腰の間五六寸はぢあり又長柄刀とて柄長くして腕ぬきを入柄を目の先にさしつかふる程にさすこれハ〔北條五代記〕によりて書りと見ゆされども異同そのさま殘れるにや慶長の頃浮世又兵衛などがかける繪かゝるすがたありて今より見ればいとをかしといへりのけえもんとい今ぬき出しえもんと云今衣の襟の裏にまれ表にまれかへりて重なれるをせに首と云ハ非なり〔犬子集〕に貧乏人ハわらはれぞする「衣もん

錢持首

慶長風

をば錢もちくびに引なはし〔誰身の上〕說法する僧の事をいふ處あるハ高座にのぼり錢もち首なるころもの襟を引なはし衣の衿を前へ引つめて着るをいふ懷の重きさまなりのけえもんとハうらうへの違なり

慶長の頃の風を古畫ども見て考ふるに男の頭つき髮狹くさかやき大に剃り或ハ半頭若人ハ前髮薄く殘し中剃をまたりいづれも額ハ角をいれて扱く髻ハ腦後にして曲を丸く束ねたり衣服ハ廣袖もあり半身の服を上に着て其上に帶をまたるも多かりこの服はなちて着る時ハ是はふりなるべしたけハ長きも短かきも有て一樣ならず其中に左右のえりを帶のあたりによせてこはせなどにてとめたるやうに見ゆるあり革のはふり袴も有り紋ハ大かた横筋のあるはひ廣きに小紋を其間に付たる多し大形なる摸樣を色さしに染たるも有り編笠ハ扁たきも長きもさま〴〵みゆ足袋ハ革たび燻小紋無地いろ〳〵にて皆打紐を付紐長きを卷て結ぶ色ハ赤青色々なり帶ハ幅大よそ鯨尺一寸ばかりもあらむとみゆるを前後に結めの見えぬハ結びめを下に狹みたるにや武士ハ大小刀の下緒を帶の下に狹めり下部の男ハ散髮なるも多しいづれも膝までなる短衣を着たり服ハ無地又ハ横筋又ハ白く腰明たるなどなり主の刀を持また鎗を持し、女ハよき人とみゆるが髮を深そぎして下け髮を衣の下に着込て衣かつぎまたりなる程に切て前さまに垂たり髮たぼなどハ出さず丸く束ねて襟の後にあり首飾のたぐひすべてなし衣服ハかつぎの衣もやうさま〴〵なれどくゝし染の間に花などあり上着横筋ふとく細く色々にて其間色かはりまたるが中に小紋付たるもみゆこれハ煉緯今云綴又染たるも

市女笠

有べし供の女い頭にかぶり物なく長柄の傘をかつぎ又い色々の絹を續合たり是も衣服い横筋なりんだら筋服にうきよのめり筋なり服すちいたやといへる此筋の服の事なり按るに〔竹齋物語〕に舟歌（上略）おわかい衆のお女郎衆達のなりふりは肩にかのこあだ又女の笠い市女笠にて下にかつら布を二布合せて縫たるを後の方に尻の下までさけたるも有り又手拭を笠の下顔の左右に肩のうへ迄さげたるもあり又男の肩衣幅せばくひだなし小袖の如く袴をかき合せて着る紋所の下横筋を染たり

總髪撫付散切

總髪昔い武士髭いさらなり總髪のもの老人なぞにい殊に多し天和貞享ごろ迄い專ら有之猶其後も往々見ゆまた髻せず垂たるも有り〔武道傳來記〕などに散切と書り今いふ撫付なり總髪をも總ていふなり又俗に殘髪とも書けどもかつて何の書にも見えぬ字面なれば近世の押當文字なるべし武士の散切は〔義理物語〕にも見え散切の又がそうといふい髪僧にや有髪僧よりいふ歟また喝僧女童は〔三代鏡倉記〕といふ草子にも見ゆ

喝僧

とも書り〔和爾雅〕にい瞋僧、今俗稱二遂髪一者、爲二瞋僧一、言似二僧故爾一といへり正章が〔獨吟千句〕に流石うき世を捨ぬ牢人がつそうも油を付つなでつけつ撫付是なり自悦が〔洛陽集〕虫の句の中「蜂兒や喝僧の秋果もなし自悦古き前句付に此大ぜいの内撫付をかき手拭て引包み、また四方髪ともいふ〔寛永發句帳〕にあづまやの軒のあやめや四方髪親重もとゆひを切い入道して法師とならむとするあらましなり一束切と云とありこれいいはゆる散切なり〔太平記〕矢矯鷺坂手越河原闘の條將軍い矢矯の合戰の事を聞召候ひしより建長寺へ御入候て已に御出家候はんと仰候ひしを面々樣々申留て置參らせて候御髻結い切せ給ひて候へ共いまだ御法體にいならせ給はずとそ申ける中畧さてい一門の浮沈この時にて候ひけるさらば力なし尊氏もか

一束切

た〳〵と共に弓箭の義を專らにして義貞と死をともにすべしとて忽に道服をぬぎ給ひて錦の直垂をぞ召れけるされば其頃鎌倉中の軍勢共が一束切とて髻を短くおけるい將軍の髪を紛らかさむか爲なりけりとあり髻結い〔延喜式〕に見えて髪結ふ組緒の事なればそれを切て髪を放ちたるなるべし又頭髪を手しでもとゞりに取り手に餘りたる末を剪去とならむといふい皆非なりこれいもとゆひの根より截たるなり手一束の末を切たらんい少し短くとも紛らかされぬといあらじ又もとゆひの組のみ切たらんい諸軍勢の髪を切て紛らかすにい及ばぬとなり又古へ髪を切て人を辱かためたる事〔古今榮雅抄〕に業平伊勢の齋宮を犯し又二條の后と密通おけるにせうとの人々いきどをりてもとゞりを切て長髪のはと束の方に下向すといへる説も有また〔著聞集〕に秦の兼任貧しかりける頃のひとり從者を召次の長になりし時年ごろのふてでとをやすからず思ひ念しけるが日頃の腹をすへむとて其從者のもとゞりを切しとみゆ又〔源平盛衰記〕熊野山御幸の條清盛入道難波妹尾に下知して攝錄基房公松殿の供奉師峰高範等がもとゞり切たる事また〔長門本平家物語〕師高燒拂溫泉寺條に寺の大衆怒りてとねりのもとゞり馬の尾を切となと有遊里にて惡性男の髪切もありるはこれらの遺意にやあらん

だて風

と法体にならむとてするとはもとの起り異なれども髪をきる事い同じ今非人といふものゝ散切にてまげになりしより始るこそ

だて風だてとは立なるべし物をたてたるとがの木のとが〳〵しさをたてゝ過さん〔著聞十五〕西行法師の事をいふ處に世をのがれ

奴俠士

れ身を捨たれども心い猶むかしにかはらずたて〳〵ときものを又ある女房の腹あしくたて〳〵しかりける又五學匠之怨解と云條、便宜をうがゝひて太刀を扱て走りかゝりけるを何事ぞと問へば一日惡口ときたりしためしたてんずるぞかしといひけるとあり恥しめられし憤りを報せんとなり此たてんずるといふ詞たて〳〵しきといふたてとおなじ後世たもじ濁りて云ゝ男立腕立健氣立などいふよりいひ習へりさるを伊達氏の小者が風なりなど云は附會の說なり（ダツテダテケナ　ダテ）（世に人をたてつくと云は楯を築にて矛楯の意なり歌舞妓にて關の擧びをたてと云は只立はたらくの故なり立役は重たて風是を奴と云（ヤッコ）

奴と稱ずるに一種奴僕のとならで俠氣にして腕立し血氣の勇あるを云ふ〔百物語〕に或人の語りしいわづまのやつこを見侍しが音に聞しに十倍せり六尺餘りの男大ひげをねぢあげ先はだにい牛首布のかたびら着上にふと布のきふぞめに七八百がのりをかい馬の皮のふと帶きつかときめくまの皮の長はふりまつすくなる大小十文字にさしこなしたるけしき身の毛もよだつばかりに候ひし（これは殊に異體をまたたかに書たるなから古きかぶき譚にこの體多く見ゆ）〔似我峰物語〕今の都のはやり物といふ諺の中にやつこたゞ中道心者（これは寛永とい男立べき最中出家するを云ふ其角が鉢扣の歌に「七十古來稀也とやつこ道心捨ころもと有もこれを云なり奴い物とにいかめしきを好み詞遣ひも一種有て奴詞と云今もその詞遣りて常にいひなれたる有り件の〔百物語〕に奴誹諧を載す「髮水にわたまかつはる氷かなきやつら寒き雪の明ぼの（此類の詞遣ひを奴ハイカイといふ）〔松の葉〕の山谷踊と云ふ長歌にたてもうはきも命の內よサやかて死ぬ〳〵ひつびけうんのめさはげわす

馬笠　鞘當

をもきらぬ身に〔古今夷曲集〕月を奴詞にてよめるよみ人きらず片脇へつとそびけらふみたくないに邪魔入申す月のむら雲この奴と云ものゝ起りは茨組の徒の惡風より出たり鞘あてなどゝいひて是を咎め口論する事なりされど慮外を咎めて免さぬゝ武家の古きならひにや〔古事談第四〕義家の郎等美濃國にありしか國房が爲に笠咎めの間弓を被切といふと又〔今昔廿五〕平の惟茂が郎等憲外馬咎めに射ころしたる男の子の爲に殺されたる物語ありまた〔師門物語〕國司の法制をいふ處、惡等もの罵合等とがめおしあひ行跡（ノリアヒ）町さうぞうわしき事を成敗して云々これ後世鞘當（サヤアテ）の類なりされど鞘當いけんくわをかひてきかくるもあり〔應筑波集〕小尻とがめの喧嘩出來たり「若衆のりんきや酒のゑひ心地、また同じ頃の句に「螢火の小尻とがめや月の劍〔一代男〕の草子芝居町のぞめきをいふ處、戀も遠慮もむきやうやみに見知ごしなるわる口あるひゝ小尻とがめ又ゝ男立云々〔二代女〕小尻とがめ出かし達其外小尻あてともあり〔誹諧染糸〕長きものやみる人ごとに恐るらん錆とがめをしても益なし〔温故集〕に萬民太平を唱ふと云とを「さや當をさする御代かな 山ざくら貞佐前句附に「たがひちがひにゝ〳〵「鞘當に細道なればむねに持〔五元集〕に「花に鐘そこのき給へけんくわ買、喧嘩買といふ〔室町日記〕に浪花にて有德なる者共の子供さるべき剛の者をかたらひ百人百五十人ばかりにて堺大小路天滿を始として人だち多きかたを撰びて異形異類の出立にて喧嘩かはふ、かはふと五人三人つゝ觸て廻りける、諸人おそれおのゝきけるをそのころ高橋作左衛門といふ浪人出あひてその中にて勝れたる者を二人切殺しければ其餘の者共かさねて一人も

喧嘩買

出ざりしといふことを記せり其體をいひたるに大の男のつらつきまなざしいかめしきが頭(ツムリ)ばかり半頭(ハンカブ)にして頬掘うはひげあくまでむくつけ云々有り又〔百物語〕にけんくわ賣(ウリ)をいひ立てあるいけんくわ買のうちをいへるなり〔東海道名所記〕にけんくわを買にくる奴とも見えたる者主の子の供して錢湯に行き我にかゝりし口論を他にぬりて遣れたる物がたり

六法男達

〔洞房語園〕に萬治寛文の頃町々に六方男達と云者徘徊して各一組の異名あり鶴鴿組、吉屋組、鉞棒組、唐犬組、笈離(ヤドカリ)組、大小の神祇組、などいふ者ども吉原へ入込扳折羅(ハドラ)狠藉の事共度々に及ぶ〔同書〕日本堤邊の中に或いは白柄ハッパの大小よしや風の摑ざし〔一代男草子〕はさみ箱もち小者共めしつれよき風の大男はかま高くすそ取て大小よしやがゝりに編笠ふかく着てなどもあり此よしやといふよしやわざくれといふい其頃のはやりことばなり〔洛陽集〕

よしや風

鶴鴿組

ゝいへと他を顧みざるをいふよしやわざくれといふなり

延寶八年自悔體

よしや渡世砥水流るゝ若たばこ元好是もそのかみ烟艸をそしる者多けれども行はるゝ故それをかへりみず刻みて賣をいふなり〔古今〕戀歌の終に「流れてゝ妹香の山の中に落るよし野川のよしやよの中と云歌あり

らるゝゝ是非もなきなり又慶長頃惡徒タバコヨリ組をなし捕へられし事あり今はよしやたゝきこのとりんぼも岩たゝきかな、と是なりはやり詞の女郎たゝきといふよりせきれいと付たるなり鶴鴿ゝ庭たゝき岩たゝき等の名有りとりんぼゝ鳥といひかけたる也とりんぼ

のとゝ吉原の條にいへり又大小の神祇組とゝ或説に仁木某と云人其魁たるによりてじんぎ組といふとあるゝ誤なり是ゝ誓詞の言に日本大小神祇とあるをとれり其徒を結ぶ誓詞なり〔昔々物語〕に奴の事をいへる趣ゝ大身小身の歷々にも奴あり下々ゝ中小性徒若黨中間に迄も奴あり身を勞する事を厭はず忠直なるを第一とし專ら武を勵み意氣あるをいふ歷々にゝ其頃奴の番頭ありて十三ヶ條の條目などあり是にかなふ奴をよき奴と云ふ故に何れも利發ならざるはなし其頃浪人また町人にもこれを羨み町奴などゝて有しが歷々の奴とゝ風も違たりといへり此町奴の風元祿頃迄遺れり〔紫の一もと〕市谷八幡の條さのみ祭ゝ結構にゝあらねど何角れだり〻問數儀中町人ども難儀致し候よし相聞候云々など其名殘有しなり

大小神祇組

町奴

赤阪奴

赤坂奴といふゝ徒若黨中間等あり〔紫の一もと〕市谷八幡の條さのみ祭ゝ結構にゝあらねど祭に出る男ゝみな旗本衆に奉公致し山の手の奴と人のまねる男どもなり云々當世はやり詞と云もみな山の手筋より出る也それを堺町や木挽町にてまねて諸人に見せて遠國迄もあるなり

戯場にて坊主小兵衛と云しは專ら奴の狂言をなし頭も其如く剃たれば坊主と呼しは前から見ればさも見ゆる故也又昔狂言にセリフ又ッラ子と云て物を言遁る事あり今もまゝばらくと云ふ狂言などの如し彼奴に份するも必ずこれあり六方の奴言ばなりそれ行はれて種々の黃色にもそのまれをして遣たり完祿九丙子〔若葉合〕常陽歌仙の內蹴合せに是ゝ闕なり沼津鶴咄し口から六法な僧

男子髮の結ふり風

男子髮の結ふりといふゝ〔織田ゝ家記〕に將軍上洛の處、信長公して信長に同心せむ者ゝ月代を廣大にして半頭を剃下髭をすべしとあるゝ廣大に頭をそりてゝおのづから下髭と成なり其頃の書をみるに髭ぼんのくぼのあたりにして丸め束ねたり其後次第に頭を剃て糸髮さへ出來たり箕山が〔大鑑〕に髮の厚きゝ賤からねど初心めきたり糸ひんに剃さげたるゝ健に見ゆれど

凡卑なり細して手先のあがりたる猶賤し髮いたゝ厚からず細からずして直なるよし是をわけていはゞ細き方によるべし生さがりゝ無かたまさるべしおくれ髮ゝ一筋ありてもわしゝ云々髮の結やうゝ立髮銀杏がしらふと元結これ六法むき陽氣もの、好む處なり少年の内ゝ元結細きを用男になりてゝ初心めきたり然れどもふと元結の類にゝあらず細からずして太めなるを少し卷まき過しゝ深く嫌ふ小切目に位立る男ならば髮短かるべしこうたうなるゝわげを出して髮先長かるべしつとの有はよろしからず云へるとなり（これ延寶中にびんの廣狹も色々かはれり）（諸艶大鏡）に俄に厚びんゝきかけの帶がおかしたいなと云るゝ此頃より厚きも始まれり（能役者は昔より厚びんなればこされどもれた學ぶもの多く其風に傚へり）ねにやはけ大かたふとしはけを上にそらしたるを（我衣）に蟬折といふと有これゝ天和ごろ專ら見え元祿中もこの體なり師宣が畫を見べしこのはけ先をはけといふゝ何の儀かおもふに海鰻（クヂラ）のがしらなるべし今の曲の後をいふにゝあらじ髮先をはけといふ又山などの長くなだれたる處を尾に近き處の白きゝ味すぐれたりこれを尾ばけといふ也よりて髮にはけといふ東國にてはけといふとなむ（クヂラ）からば鰭の尾に近き處の形をいへる歟（ハゞ）にはあらじ（我衣）に寶永ごろ淨留り太夫江戸半太夫ばちびんにてはけ長くたてかけといふも是にて末の義と聞ゆ髮の先をひらめ櫛にてはけづる時其さま刷子に似たる故かと思へどさ中そり有り（元祿の初め中村傳九郎といひしが此風にて云々半太夫が風をすこしなほしたるもの歟）と云り（世事談）に頃日辰松風とて元結をとゝ〳〵しく長く卷き月代の上のかたへ高く曲をもつたてたる風あり辰松ゝ人形つかひなれば

仰くに曲の方襟の中に入亂るゝ故髮を高く結なり此風世間にはやりてうつぶきて業をする者もこれを好めりうつふけば常のかみも高く見ゆるをまして元結ゆるをもうたてかりける髮は曲の元結を針にて留しとなり（かくいへるゝ享保十八年なりこの原武が（雜記）に其ころ世の風俗ゝ皆あはせびんはやる曲の下にてひんを合せふと元結にごたひづけ串着皺とてまげの下にふはをよせ云々其中に此方共の風俗ゝ元結二寸ほど卷たてまけゝ針打大ばすに元結かけ云々（これ享保末の事と聞ゆ）（賤の小手卷）（作者不知延享前後の非を記せりそべ本多ゆるやうにして根をゆるくわげと一とのゝ間僅かにして月代へのぞきたるやうに卷かけて置なり多く堺町邊のかぶき者のあたまつきにて歷々にも若き人たち隨分そのとく結せて勤むる者も有り不相應のあたまなり（これ上にいへる半太夫が風を直したるあたまなり）（居行子）後篇三十年ばかり以前ゝ男の髮合せ髮といへば遊治郎のやうにありて愚も若かりし時ゝおかられたりき移り替り今ゝ昔風となり時々のはやり髷のぞき〳〵のんこ或ゝ宇和島ふかし髮、卷髮、などいろ〳〵に替りゆくといへるゝ安永五年のとなればこれ延享中をいへるなり（（盛塚噺）に我等若年の頃武家の前髮の者はかきびん年老の者はあはせびんに結たり左右のびんがみを髻の下へ合せて曲は別に束ねるなり此兩樣近年は更に見えず今も歌舞妓にて由良之助は合せ髮にするもありさいへり）といふ淨るり語り下りその淨るり行はれそれが風を學びて文金風といへり（下手談義）に時代々々で伽羅油も付ねばならぬがそれも品が有りその卷髮れいてくれ小袖のたけが長いその大脇差ゝ居合扱の藥賣に拂てやれ一つ前に着るものきるな前帶もするな云々又豐後ぶしかたりの事をいふ處、律儀の息子も一度この門に入れば忽びんの毛さかだつてまげゝ頂上

にわかり眉毛抜て業平に似たり羽をり長うして地をはらひ見る者驚歎せずといふ事なし〔賤の小手巻〕にも豊後ぶしの流弊次第に淫風に移り遊士俗人の風あらぬものに成行て髪も文金風とてわげの腰を突立元結多く巻てまき髪とてびんの毛を下より上へかきあげ月代のかぎはにて巻込て結たり衣類對たけの羽織を着長き紐を先に小く結び下駄のはにかゝるやうにして腰の物ゝ落しざしにさし懐手して駒下駄をはきて市中をぶら〳〵とあるきたり〔江戸名物鑑〕春の日にくらべん紐や羽織連多香　これをいふ也〔我衣〕に元文元年より上かた浄るり大夫の風を學び髪ゝ油のため毛筋われめなし元結多く巻入かみ少し入はけ　先竹串入る都風呂風とも文金風ともいふとありこれ先に辰松風といひしもの〔緒手巻〕又云豆本多といふゝ至極髪をつめて尤すくなくしてわげいかにも小く豆粒の如く結にて少しはかはりたらめど此時始にはあらす自笑が〔色三線〕に向から来る男當流の跡あがりのあたま云々あり〔緒手り云々又巻びんとて云々いづれも文金風より後の事なりといへり巻びんハ文金風のびんつきなり〔我衣〕に芝の肴賣日雇取なぞ正徳頃まで三ッ折かへしと云ふ髪なり元結一寸まげ一寸はけ先一寸三ッ折なる故なりつゝ込といふゝ元祿ごろ材木屋風なりといへりつゝ込ハ近くも結たりとかやある髪結云つゝ込ハ元結一寸餘まく放油にて元結の汚れぬ様にする手際なり元結三筋ほと細くなり元結の頃奇怪の人ありその名を自稱してなるをきらひて坂倉や源七といふ町人ハ銀のはりがねを用ひたりといへり小額を置ひたひ少し角を入扱たるも寶暦頃よりとぞ　明和七年〔娯息齋集〕屋船強飲略語遊、下撫本田自風流〔耳袋〕に安永の頃奇怪の通人といふたとへば鵺といふ變化に似たり口ハ鰹利口にして尾ハ蛇をつかひ姿こりのとく啼聲唄に似たり多分酒を食として世上を一呑とするあたかも鼠崎の田樂を奴に與ふるかとし忠といへば風と行すき孝といへば本堂のやれをふり向く藤雀なんぞ大鵬の心をはらひや小紋がへしの三ッ紋ハ紺屋へ三裏のほたらきを與へうら牛えりハ仕立やの手間損三枚うらの八幡黒ハ世上風くらな足元とんぶりたばこ入と落し木綿手拭長にもふきたらす穴志らすの穴ばなし親和ぞめの文字おらす俳僧志らすの俳名通人の不通なるへし其頃　〔半日閑話〕安永元年の條近來男子の風甚殊にて髪ゝ或通人と稱する斯の如きハ親類不通の種なるへし

下髪

わッち

本多とて中剃を大くし髷を高く結ふびんゝ下びんとて油を付けず櫛の歯を入れ毛を筋通し後の方ゝ油を付て其塀を幽略と云ふ眉ゝ三日月にて細く衣服ゝ細袖うすわた重ねてきるに便す此ころ諺に云疫病本多癩眉宿なし姿と云ふ其ころ千柳點の發句に「うしろからゆるいかみだと如來いふ」本多善光を當時の頭つきにいへるなり

童子の髪　喝食姿

源内が〔ふやれ草子〕の跋に孝悌忠信を口に稱し身に行ふ君子有ゝ當世これを號して野夫と云ひ武を知り國家を守る者を人嘲りて新五左と云又此識りを免れんと思ふたわけゝぬしといひわッちと唱へ顔ゝ白きをいとはず云々いへり其頃ある通人と稱する者心に協へる鏥工あり是を雇ひて額髪を扱しむ鏥工家内に要事ありて歸らむことを請ふ通人これを今ふばしと留めて金壹分を與ふやがてまた歸らむとすれば又金を與ふ其内家より小者を遣して呼しむ通人又金を與ふ二時に至らずして金子わまた費したりとぞ是とゝ殊ながら同日の談とはいふべし〔喜卿資筆〕に顧正臣とて驟に富るものあり豪興を發しさま〳〵物するに牡丹亭記の狂言を興行す一少年に髭を剃らせて杜麗娘といふ女形をせさせんとす少年辭して云ふ俗語鬢に一莖を去らんにゝ米七石を償ふといへりさもあらバ命に任すべしと顧氏笑て云これ細事なりいと易しとて一人の小者に傍より細かに數へさせて鬢を剃らゝむるに四十三莖ありければ立どころに白米三百石を其家に送らゝめしとなむ

童子の髪、安齋翁が〔秋草〕に云古代ゝ童子も中剃なく髻を結て後ろへ長く垂て置たり髪の先をば肩の下邊にて切るなり是を喝食姿といふまた髪の先を切らず婦人の如く下げ髪にゝ

兒姿

たるも有り是を兒姿といふ兩樣なり武家にて多くい髮の先を切るなりと云り寺の兒喝食も此通りにておの〳〵後見の法師有て髮をも結ふなり世中野郎あたまとなりていい俗家の若衆い中剃をふたりこれも髮の風時勢によりてかわりぬ慶長のころい前髮のさきを切りて左右へふりわけたりまげい髻に元結多くまき二ツまげにふたるもありまた茶筅なるもありつといい出さずまげをつゝこみに結たるもあり其うち武家と町方と野郎との風もあるへし寛永の頃も大かた此やうにてありしが萬治寛文の頃より次第につとを出し女の髮のことく

鴎髻

鴎髻（カモメツト）なぞになれり西鶴〔大かゝみ〕三條の橋なる床に白鷺の清八とて手妻もすぐれて折柳といて一流結出し髮先二の曲きよらなればあまねくこの床まで來りて若衆髮を結へりと見えたり〔天和笑委集〕に鶺鴒やうなどの名あるもつとの形を鳥の尾に准らへたるなり折柳といい柳の髮といふより名付しならむ昔い男風行はれて若衆い女よりも粧へり〔松の落葉〕丹前の部、若松風流「わげの前かみふと元ゆひのふかくまきはでな小性衆いとれ〳〵享保の頃までも若衆のつとはかもめ尻なり其頃前句付に「匂ひ有けり〳〵みやこ鳥若ふゆの髻のかもめ尻師宣が繪に若衆の髮結ふ圖あり元結を額の上よりかけて額の下にて左右の端を手にて押へ居て髮を結はするなり〔賤の小手巻〕に男の相應の生れ付にて前がみのある内いおさへ元結とて頭の上より元結をかけ左右へ分て耳の後より下げ兩手におさへ持て髮結はするなり是い搔下けびんとて若衆いもみ上の處へびんを搔さげそれより丸く上へかき上げてさて髮はその好次第にゆひたり

御うちき

天子の御ぐし上る者を御うちきといふ〔枕草紙〕山の井の大納言めしいれてみうちきまいらせ給ふ〔源氏紅葉賀〕にうへい御うちきの人めしてといへい侍臣之間、撰堪事之人、供無定例、皆着當色袍、謂之御禮、今按に御もとゝり御びんにまいる人い紫のきぬの直衣を着て伺候するをいふなり云々古くい民間にいかみゆひなどいふものいなしみなみづから結ひしなるべし後世便利に隨ひてさるものも出來しなり〔雍州府志〕に凡毎町有髮結床、諸人來令結之、又巡市中、取錢劑、月額、是謂一錢劑、〔宗因千句〕寛文六年「さても〳〵の床ちがひ棚、「かみ結やよき市人と成ねらむ〔元祿曾我物語〕に一千劑の床に腰をかけ云々これに一千と書たるい當時一錢にて結はされば名の當らぬ故かく書るなるべし一錢職といふ事い〔髮結由緒書〕といふものを見しに往來住宅雨落より三尺張出長暖簾四尺二寸、縫下け五寸、腰障子三尺餘の寸法と相定致渡世候云々北小路藤七郎と云浪人三河國原村にて御髮を揚奉り金錢一錢被下置候依之一錢職と唱へ申候其後江戸繁昌に付藤七郎芝口邊に罷在壹錢職致居候處先年之儀を以伊奈熊藏樣御取次にて青銅千匹頂戴致し其後萬治年中藤七郎より四代藤左衛門神田三河町へ引移御府內壹錢職分株數御願申上候處願之通被仰付焼印下け札等被下置候云々息男幸次郎幼年に依て由緒書與之享保十二年九月北小路宗四郎基之と有り一錢職由來もとより取るにたらず是いそのかみ一錢の賃にてありしなりまた〔我衣〕に髮結の初い寛永の頃里見家の浪人在々へ陣暮を持あるき人通りある所にい竹木の枝にはり回して結たり長暖簾いこれに本づく江戸の始い赤羽根の床最

髮結床

一錢職

髪結鑑札

初なりその頃これを一文ぞりと云といへるも附會なり長き暖簾かけしは結する人の顯はに見ゆるを厭ひて其初めゝ幕を用ひたる事も有るべし今の腰簾ばりの如く幕を用ひたるハ是のみにあらす今江戸の髪結房總の人多ければ里見家のことをよせたり但し件の書付にも芝口邊といひこれにも赤羽根といへるゝ符合せりその遊より始りしといみゆ髪結鑑札ゝ寛永十七年庚辰二月下さるゝといへども其後人數多くなり札なき者あまたなりしかば明暦元年己亥正月振賣定めありし同時に髪結にも札を渡し一ヶ年に師匠ゝ金二兩弟子は金壹兩づゝ札錢被召上る事にて有けれども行屆かず依之其代りとして橋火消致候と成る享保廿年乙卯二月橋火消御免にて御番所へ出火の節驅付可申と被仰付安永六年酉九月三年寄へ壹ヶ處廿人づゝ出火の節驅付被仰付文化九年申十二月に牢屋敷へも三十人づゝ驅付可申樽役所にて申付る

〔風俗文選〕南行記に宮川の渡りを越て代垢離の子共ゝ蛙の如く一錢剃の鋏ゝ蟹に似たり「髪結の腰にさだるゝ柳かな、聖（さとあるハ李由なり）」〔輕口咄〕に田舍もの京に上り宿の亭主にいひけるゝ三條の橋づめにて月代そり髪を結て十文取たり京ゝ物の高き樣に聞しに違ひてやすきと云宿主いやそれゝ高うござるそれより後の白川橋でゝ七文でほうずにおてくれますといへる咄ありこれゝ元祿の末の價なり白川橋ゝ乞食の居る處なり今世朝早きものにゝ豆腐屋を喩ふる如く昔ゝ髪結をいへり〔洛陽集〕世中や朝寐に髪結花にかせ秋月又初秋の句「髪結と青大豆賣と白露と信德是ゝみな早起の者を云なり〔京羽二重〕髪結もさぞ朝顔を仕舞まで立植

〔江戸名物鑑〕髪結やおのがあたまゝ枯野吹十車げに紺かきの白袴と古へに云へりし類なり婦人首飾昔ゝ首飾なし〔榮花咄〕に今世の女昔しなかつた事ぞもを仕出して去とゝ身をたしなみ道具數々なり是に氣を付て見しに首筋より上ばかりに入る物十六品あり云々まづ髪の油髪つけ（髪つけハ髪つけの誤りにや長かもじ、小まくら、平元ゆひ、忍び元結、かうがい、指櫛、前髪立、紅粉、白粉、歯黒、鬢、おもり頭巾、留針、浮世つゞら、笠、云々、枕捻し踊の歌「黒かみの中に巻こむ小枕や括り枕や木枕を云々（昔予が知れる老女などに發燭ッケキを丸く輪にして長さ五六分許なるを用ひしものあり後に其積も此文をまねて〔賢女心化粧〕に始六十年以前の事を延享よりなれば定規にしてむかしも今も同じやうに思はれ嫁の髪みるに髭の中に鯨の鬢遣を二三本も入らるゝぞ吾ゝ此年まで髪の中に小枕の外ゝ蒔繪の木櫛に黒き笄をさして花をやりしに嫁のあまたをみれば透とはる玳瑁の櫛をさして笄の前にかんざしとやらいふ物をさゝるゝ何の用にたつことぞ時代ちがひ姑の目からゝ辨慶が七ツ道具をあたまにいたゞくと思はるゝゝ無理でなし凡そ首筋より上ばかりに入る物廿一二品もありかゝるために出るにも身拵に隙なき事思はれける先髪の油ひん付、ぎん出し、長かもじ、小枕、平元結、忍び元結、笄、かんざし、つと出し、指櫛、前髪立、べに、白粉、花の露、まゆすみ、きはすみ、おもり頭巾、とめ針、加賀笠いたゝき同くけ紐あらましさへ此通りぞかしかく有ゝ西鶴がいひし貞享より六十年に及べり其内かはりたる物ゝ笠とかんざしすみ遣なり〔六玉川〕に、道具みせはやこの頃のかみ形、といへる句あり（墨やりのこと下にいふへし）髪の結ぶりゝ〔春臺獨語〕寛永の頃までゝ婦女細き麻縄にて髪をつかねてそのうへを黒き絹

御所風
かうがい
わげ
角ぐり

島田曲

兵庫曲

にて巻しに其後ハ麻繩をやめて紙にてゆひ越前の國より粉紙にて元結紙といふものを作り出して海内の婦女みな是を用ゆそれよりきぬにてまく事もやみぬと我父正しく是を見て語り聞せりとあり〔女用鑑〕貞享四年髪のゆひぶりを書きたる處に御所風とあるハ今いふ島田くづしの如しこれいもとさげ髪をまき揚てかうがいして留置これを扱ば下ケ髪となるやうにたるが始めなり掃枝曲とあるハ今京難波にてさきかうかいといふ類なり角髻ハ〔虛栗集〕天和三年黒鯛くろしおとく女が乳芭蕉枯藻髪さゝへの角を巻ならむ〔錦繍緞〕元禄十年神なりの鳴らざる年ハ端居して遠水行水の後ぐるに結ふ髪岩翁寢せし子の何に襲てすゝり泣其角〔我衣〕に正徳のころかうがいの先を反し角ぐるに結といへれど角くる其前にあり反したるかうがいの形ハ兜の鍬形の如し其外、島田、傾城、兵庫、遣手、了髻等なり、また額つきハ丸額、火塔口とあり火塔口ハ今いふ鴈かね額なり〔一代女〕にハ火塔額といへりその内兵庫曲ハ寛永頃より多く見えて大かた遊女が髪の風なり兵庫といふよしハ〔庭訓〕なとに兵庫鏁と見えて太刀のおびとりに用ゆその鏁の形なりといひ或ハ江戸大橋柳町に遊女屋ありし頃兵庫屋といへるより起るなどいへるハ皆非なり按るに兵庫曲ハもと一つなるを分て二ツにも結へり兵庫樽といふものあり其形この樽に似たれば名付るなり其樽ハ片手の桶なり今江戸にてハ猿頬といふ桶のとなり〔これを兵庫樽といふは播州の酒造る所にて用る器なれば云にや島田曲ハ古しと見ゆこれも歌舞妓に島田甚吉といひしが結初たり又ハ島田といふ處より結出したりなどいふ皆非なりこの曲ハふるく童子の髪の結さまに似て古書に多しよりておもふにもめ手輪の傳訛なるべしもめハ緊なりたわ

髪の曲れるをいへり前のたわの處にいへり〔庭訓〕兵庫鏁安齋云太刀の總體柄も鞘も或は金或は銀のへりにて包むなりさびとりに鏁を付るなり兵庫寮と云は武器を作る事を掌ごるゆゑ武器を作る細工人兵庫寮の下に付て在なりに作らせたるとに云事にて名付るなり下手の作りたるは鏁ちぎれ損するなれば何れも上手を撰み置なり兵庫鏁は兵庫寮の細工人造る所にて用る器なれば云にや島田曲ハ古しと見ゆこれも歌舞妓に島田甚吉といひしが結初たり又ハ島田といふ處より結出したりなどいふ皆非なりこの曲ハふるく童子の髪の結さまに似て古書に多しよりておもふにもめ手輪の傳訛なるべしもめハ緊なりたわをわげつゝ出立遊君〔續山井〕あやめ草まくやの〔懸筑波集〕大名や兵庫あたりにつきぬらん山川長元かみ島田ハ〔東海道名所記〕馬かた島田のとならば髪を結たる事をよみ給へかしといふ男是に心付て「はたご屋の女ハ塵のつくもがみせめて島田にいふよしもかなとよみたりげに〳〵春元の發句に「名にゆふや氣にも島田の柳がみ云々〔源平盛衰記廿〕八牧夜討條、八牧にハ折節勢こそなかりけれよき者共の在けるハ伊豆國島田の宿にて遊ばんとて十餘人出ぬ殘る者ども十人許にハ過さりけり島田の宿その頃遊女くゝつめなどありて遊所にてありしなり島田曲にも種々あり〔一代女〕につとなしのなげさまだかくし結ひのうき世もとゆひ云々〔女重寶記〕にかみの結やう、兵庫ふきあげ、角ぐり、ぐる〳〵、丸わげ此は勝山を云ふなるべし五段わげ、下ケ髪、かうがい、大島田今はやるやつし島田此外さま〳〵の結やう有といへどもうへ〳〵ハさげ髪町風ハ京も田舍も島田からかいわげの二色上らうも下らうも押なべてゆふとに七八十年このかた此書元祿九年の板に及べりわきつめのやつし島田ハわげらしくして目に立ふり袖のかうがいわけハおとなぶりていなものなればそれ〳〵に結給ふべし島田からがいとともに高きハ田舍めきたり云々前がみも高くはゞ廣くわけたるハ見にくし髪もおし出す事過たるハ鳥かぶ

やつし島田　おめ付島田　なげ島田　○踊髪　せんまげ　ゆすの柳　ゆひつぶし　ゆひながし　ゆひさげ　ゆひたれ　ゆひかへし　ゆひこん

ときたるやうにてみぐるしびんのはへさがり切揃へたるい古風なり生したて〳〵ひん付にてかきあげたるよし首筋のはへぎい〳〵すりあけたるいとはしたなしすりたるあとへ白粉よどみてみるもうたてしはへきはなみよく扱そろへたるも人形の首をみるやうにていやなり目にたゝぬやうに大かたに扱べしと云へり〔我衣〕にもみ上い寛永より始りきいへれど此時生す事なきやつし島田とあるい今いふ島田くづしなるべし〔佐夜中山集〕寛文四年撰　名い白きくの花もしをみよ林宗甫秋風の吹わけにゆふ髪かゝり、又「きれたといいへどきられぬ我思ひまた〳〵はつくる後家の水かみたはたわさ云へ〔物類稱呼〕に關西にて髪のつとを東國にてたぼといふと有りたわい古言なり〔俗つれ〳〵〕にふめつけ島田かみさきもおなじたけにしてまん中にひら元結をかくる云々ふき前がみくじらのひれのまがりたるものを入て髪の動かぬやうにす〔元祿曾我物語〕ふめ付島田い髪先も跡も長みおなじ程にして中程より元結を二筋かけ云々誕生日といふ前句附に「夜もほんのりと明かゝるなり」口ゆがめ平もこ結をしめ付るといへるも此島田なるべし扱るにこれいつとを長くする頃それにかはりて遊女踊子どもつとなしのなげ島田と有この風い世いみなつとを長くする頃それにかはりて遊女踊子どもいかやうに結たりつとを出さぬゆゑかみさき長ければあと先同じはどに結なりなげ島田といなげ首なごのなげの意にてこれい後へ倒るゝ形を云ふ元祿八年板本の〔菱川師宣〕が百人女のうちなどにも見えたり〔塵滴問答六〕女子の髪を取あぐるに上臈のさげ髪を始めとしてゝあげ島田、なげ島田、かたわげ、からこ、かうがいわげ、兵庫ぐるわげ、など樣々〔鎌倉記〕正德二年草子大夫が風をいふ處に大島田に八分の平もと結をかけ吹びんに小額きいずみこく生ぎいをみせず〔後日男〕同頃吹びんのふづみやうにて地髪の少きをみる〔俗徒然〕にもふきびん見えたれば髪を出すと元祿の初よりとみゆ〔一代女〕貞享三年常世の下ヶ島田總髪といふことを結出しさる御方に御梳（カミアゲ）にみやずかへけるその時にかいり兵庫曲ふるし五段曲みにくしといへり按ずるに總髪とい髪たぼを分ざるなり〔好色盛衰記〕に野郎をいふ處、總髪に結たる髻の曲め云々有これにて知べし〔娘容儀〕に當流の釣島田針かね入の乙元（キモト）ゆひと云ふ此類なるべし〔諸體大鑑〕島原大踊の處、大夫天神殘らず髪つゝこみ大振袖いづれも美少人のごとく若衆に出立しなり禿のあたまに之あり又鷗（カモメ）づとい紀海音が〔傾城無間鐘〕といふ院本に男の心いかりめのかもめつとてそかいゆらし又つくろひなしのかご島田など有り〔鹽絞輪〕顏のもみ（ヅ）ぢを高雄にい何わの君の髻に事問ふ都島千詠また「初上り是見よ顏の妾をすれ紋の撫子嵯で日覆ひ、又「姿みぶりを作る振付髪水入を汨羅（キラ）にしたる粽揩利角これらい作意の名とみゆ〔物類稱呼〕に畿內にてつとさし東國にてたぼさし中國西國ともにつとはね土州にてつとさし又つとばり加賀にてつとかうがいと云といへり此器西鶴等か頃にい未だ非ず上に引る〔榮花咄〕にかぞへ並べたる內にも前髪立と云物い有り或說に若衆も髪さし有といへるは非なり其積が鯨の鬢遣（ヤリ）といひしが始なり〔賤の緒手卷〕に延享の頃なりけり女子のたふさしと云物初て流行出て京より下りしを母を初め女子どもめづらしがりてもてはやしぬ鯨にてこしらへたる物なり二種圖

これのしとつてこつにこつこむこさせさ里ふなた習ふしまし引出しをほれ洗ふたらわ薄がしつみいにまれり髪せんげ踊わけ臥さ引出で見ゆんこん

ひみこみ風えふえさだでみけやけ茶ろれむをさのくくかまけまけ物入ぬめも逢け

夜はまりたひみり庫明石須な耶いのか帯んいよがのにわからまりさみさうかまに袖にさ

島や兵かと思ふつ

女かわひやてや高ちふんしつ打さつし重り剃ん頭ひ

島田も須石わかのニのら

を出せり〔我衣〕に三種圖あれども畫樣わろし予も二種を藏す〔四天王伶人櫻〕といふ淨るり中村阿契作第三うるまの六齋市の處おやつゐわじやわゆゐ太儀ゑた云々つとうらといたぼさし張出しい髮さしなり髮さしは寶曆中より出來たり安永二年の雛子に世話やき老母が詞に今時の女は髮さしの洞厥が〔太平樂府〕明和六年婢女行に減多假体金丞相、無正張出燈籠髮、灯籠びんゐ兩髮何のさゐり張出し毛筋を透したるなり志ゆすびんゐ毛筋をすかさぬなり〔居行子〕に女中の髮もゑゆを張出し毛筋を透したるなり志ゆすびんゐ毛筋をすかさぬなり〔居行子〕に女中の髮もゑゆす髮鳥籠びん、張添、櫛添、叡いれ髮、脇髮よと色々のはやりと變り行き昔なかりし中分已上に女中の髮結所々に出來放蕩な女ゐ皆髮結にゆはするやうに成りぬといへり是は京師の人安永五年の作なり遊女が丁頭なども昔より髮結にゆはせし事とみゆ江戸にて女髮結ゐ安永七年頃深川茶屋むきにて上方風の髮ゆふ女ありしが其後所々に女かみゆひ出來れりと云ふ遊所の女童がといに太夫の禿より天神かこひつはねの禿までかみ結か一〔諸艶大鑑〕に遊女が禿にぞゆいするに太月の賃錢高下ある事をいへり結なり江戸に女髮結できしゐ天明の末寬政の初ごろよりなべし寬色たぐひの者どもの結せしとなりしがやう〳〵行われて今いいつくの端々までもあらぬ所なく破手なる者ゐ結するとゝなれなりしゐ上方より移れる惡風なひたひ付のと昔ゐ首飾なかりしが額を剃るに樣々あり〔女鏡〕慶安三年板本ひたひをそるといふ大事のものなりひたひのなりわしければ顏のきはなくなるものなりすりたるきゐの見えぬやうにせらるべし人によりて生れつきのまゝこそよけれ生れつきによりてなりわしくゐ又すれるもよしかまへてゝむさとすり給ふへからずといへるにて當時いたくそり過る習なるを

知る箕山が〔大鏡〕に額の取やう丸きにしくいなし云々瓦燈がたはかまごしわろし髮づらうすき人ゐ十河額ひにとる年たけたるゐくるしからず十河額ひゐ昔十河氏の男子取はじめたるなりさりけれど女の額ひに用ひきたりて中頃までゐ女中是を好めり今もよきにゐあらねど置ずみくろくせんよりゐまさるべきかといへり今抜るに髮うすき人用ふとなればよほどそりこむなるべし其形ゐ圓ならす方ならす撫角といふもの、如くならむそかうゐ總頭にや十河氏の說いいかゝと或人いへり〔重寶記〕元祿九年額の作りやう、大ひたひ、小ひたひ、丸ひたひ、火燈口、すりわげひたひ皆人々の生れ付に應じてはからひ作り給ふべしきわずみゐなるはとうす〳〵と高根の花に霞のかゝれる体に小額より上にて引すて消すべしといへり彼十河額なとの行われたる寬文以上のやうに剃込事ゐ廢れたり古き前句付「開きたりけり〳〵」「かいるまた四十女の破風びたひ近頃又剃る事はやり居をも細くそり付るく截りたりかたき油もなき頃なれば散り亂れたる体多し

今見ゆる處の髮のふり主殿の風ゐ片はづし是もさかうがいわけにていうかいを拔時は下が髮となるやうにもみぢあげ島田くづし少女ゐ針打の島田文金ともいふなりし男の髮にてはけに竹串を入たり針を用るも同し女子の針打も針ハ怪我あらむとて小き楊枝なごを假に用ゆこの文金風は其始辰松より起る〔我衣〕に女の髮に辰松ハまたハ享保中はやるとあれば男の髮に辰松風はやりし同時に是もはやりたる也さて後に文金風とてもてはやす頃女のかたも辰松といはす文金といひしかり辰松ハ元結を針にて留た地さかいふ有て片はづしとは異なり り文金とハ元文元年文字金鑄られたればこの時より唱へたる名なり すべきなり今ハつけた地さかいふ有て片はづしとは異なり長く細きか圓扁に坊間にゐ種々あり勝山とて丸曲の高なりしものなり

勝山
丸曲

片はづし

髻頭一に總髮に作ろ

きわ墨

十河額（前出）

大なるをいひしが今ゐ廢れたり今時ハ品々あれど先定りて少女ハ島田大女ハ丸曲なり島田ハ古き結ふりなれともこの丸曲ハむかしなきものなり勝山の變したるなるへしいと近き事なり

おさふれ　銀杏曲　糸巻　結ひ髪わりがら　こつくる返し　巻たにしし　やこめうと曲　唐人曲　おばこ結　禿ちごわかから子　おさしばちくろりおさし　髪なし　小枕　かうがい髪掻　かんさし

勝山も昔のい今いふものとい異なり〔女重寶記〕に丸曲の名あり是い勝山を云にて今の丸曲にいあらす勝山か事い後にへり遊女の名なり〔吉原徒然草〕に新造なとの髪を結ふに下より上へあるへいたうのやうにまげて笄を横さまにさす事い常の事なり是い古へ勝山といふ女郎のゆひ始めけるとも也といへりあるへいたうといへるい古風の葉子にだてまげといへる是也今いふ勝山とい違ひて片はづしの直なるにて平めたる髪の木末同しくする也〔松落葉〕丹前の部に曽我の五郎と云ふ歌かつ山かみのおさんねも丸曲の左右に銀杏曲もとい島田を銀杏の葉のやうにした結ふり手巻りに云々おさんねも丸曲の左右に銀杏曲もとい島田を銀杏の葉のやうにした結ひ髪にい髪をとり分て髪たぼをせざるをむすび髪ともいへるわりがらて、かつくる返し　天神結ともいふかそのかみ金巻仙ともいひも近俗なりゆふり結ふも同しながらかくわかてり

しもこのくし巻〔武野俗談〕に寶暦中淺草寺邊内御ふく茶屋に湯屋お六とて名頭の女あり常に皆びかみにしたり上手に頭にやくし巻て獅を逆まに巻こみむすんけるくし巻と名付く此まれなして江戸中の女結ふ事となりたり云々川柳點獅巻にするのか髪のくづしそめ明和二年霧丸ニシヤ評〔萬句合〕くし巻い下女にゆったなかいこませ田螺鬢始いつれもそのめうと曲、唐人曲、おばこむすび、樂形に似たり

屋結、なとなり風い色々あれとも小女の島田年高きいみな丸曲いかはらす　江戸い丸曲、京難波にはさきかうかいい定まりし物なり丸曲い勝山より出て勝山いかうかい曲より髪しきかうかいといふもいといかうかい曲なり二種出る所同し　又稚女い禿髪の末を揃へて切垂るなり古き姿なり〔嬉五普賢にうつしけん〔晉子〕　兒輪、から子〔正章か千句〕にから菊とあるそ然るへき名付しか今い一種の結かたあり　糸巻　是も形により　其外結

古より然あり童子をうなねと云い垂髪のをわけらかし居る故の稱なり髪髻にいおとしばらい髪三ツ分にとりて是い正巾の髪さしおとしばらい髪三ツ分にとりて是い正巾の髪さしりおとし　芥子をとるのみにてびんたぼひとつに出す也髪さしい安永八年はやり出て此頃すたれ小枕い町方にて文化の初ころよりすたれて用ひざれとも今い髪少なき者多く小枕付の入髪をば用るなり小枕もはじめい付木なとを輪にしてのたぼさしい烏賊の口より出るとびからすといふ物の大きなるかはやりてはりこも大に造りたりしかやく付て作るたぼさしも色々かわり上方のつとさしになくなら〔尊卿賛筆〕余為諸生時、見婦人梳髪、高三寸許、

號為新樣、年來漸高、至六七寸、鬟鬆光潤、謂之牡丹頭、皆用假髮、髷墊、其重至不可擧首、又仕宦家或辮髮、螺髻、珠寶錯落、烏韤禿袖、貂皮抹額、閨閣風流、不堪寓目、而彼自以為逢時之制也、

髮搔〔源氏蜑柱〕姫君ひいた色のかみのかさねたゞいさゝかにかきて柱のひわれたるはざまにかうがいのさきしておし入れたまふべき具云々〔和名抄〕冠帽の具のうちに擇髮また副字を畧て和名、加美賀伎、びんかきたまふ疑濃の大将の姫君なり〔菜花初花〕沉のくし　白かねのかうがい云々とあり〔雞肋編〕譯名曰搔建也、所以冠於髮建也、譯所以擇髮髮使入巾櫛之裏也、導古者男女皆用之〔記〕云笄總掃髮、〔詩〕云、象之揥也、揥髮、象搔、今之筪子魏明帝與諸葛歌書云、今送足導小物耳、是情資于中、而寄于物、

ひし事〔十訓抄〕に見えたり　又中納白賀茂詣の時酔て車中に寝て髷落たるを入道殿に起されて落き扇の妻にて女の用ゆるかんざしの形もかうがいなり、かんざしに二義あり挿頭花い髮則の義風流に花を折てさしたるがもとにて是を細工に作り意巧を加へて様々にするなり年賀なとに用るい老をかくす意なり又翡翠のかんざしなと云い緑髪の義なり分ていへば翡い赤き色ながら是いへりその内榊の巻に藤つぼのことをいへる處かんざしかしらつき御くしのかゝりたるさまかきりなきにはしさ云々女をほむるに髪をいふいればかれとかやうにいひたる處もすくなしかんい髪さしい面ざし目ざしのさしにて俗にかしらつきといふが如く髪つきといふ程のことならんと思へりそれにていこゝの文にかなはずよて是い志ばらく〔細流〕なとの説

に隨ひてかんざしすべきわたりとせんかさてからがいい〔類聚雑要〕に櫛筥一隻懸子の内に、平髪掻、細髪掻と有り又唐櫛笥懸子の内に紫檀平髪掻ありその形よの常のからがいにかはりたることなし耳掻い耳挟とて別にあり茶杓の形に似て反たり銀にて作るとみゆ又今用るかんざしい〔好古日錄〕に貞享年間御厨子所預り故備前守はじめて工人に造らしむ後僅に十數年にして宇内に弘まりたりといへり是説誤りあり高橋圖南老人い御厨子所預若狭守紀宗直といふ人なり若かりしほど北野に開帳ありしに或商人の高橋家に立入しに圖南それに教へて釵に耳かき造りそへなばはやるべしといはれけるに故にやがて作り出しつるに果してよく售ぬそれより世に普くはやりたりといふことを屋代輪池翁その家にて親しく聞れたりとぞ圖南老人い寛永の初め元祿の末ころに生れし人なれば若きころい享保中なるべし〔我衣〕に享保頃よりかんざしと名付る物上耳かき下髪かき銀にて作るとありて今名古屋うちといふかんざしの形して足の股の間廣き物を圖せりその説符合す〔又その頃の一枚絵などにも見えたり〕〔日錄〕い間誤りて記し、事と知るべしそのうへ笄の字書たるいかんざしといよみがたし但し圓扇あふぎ等のかんざし耳かきなきい正徳ごろの草子の書にみゆ

女童のかんざしの始い〔我衣〕に元文寛保の頃にい舞子金銀にて梅の枝にて色紙短冊を付てさす往來すれば音のするやうにこしらへたり延享元年停められ其後象牙角鼈甲等に拵へたり又寛延頃より已前も花かんざしさすといへり然るを寶暦の初よりはやり吉原の禿に倣ひてせしなど云い一度止て後の度を始と思へるなり吉原の禿も舞子に倣ひしものとおもらる

耳掻

花かんざし

櫛

このかんざしい古雅に近し〔源氏若菜上〕四十の賀にかざしの造いぢんの花そくこかれの鳥銀の枝に居たる心ばへなど殊に結構にいへるを下さまの常に用ひん事ハいかゝなり

櫛い古くもさま〳〵あり黄泉の段に櫛い伊邪那美命左右のみづらに櫛さし玉ふこと見え湯津津間櫛と云この男柱を引欠て火燭し玉ふ男柱とい櫛の左右の端の大なる齒を云櫛の齒長かりしなるべし火々出見尊も櫛を燃して豐玉姫の御子産ますを見給ふことあり湯津い五百筒の約にて齒のおげきを云ふ爪とい借字にてかつまの上略、かつまい堅津間にてくつはつと切る櫛の齒のおげくて間の堅くせまれるなり无間勝間の小船も此意なりといへり〔延喜式〕などに見えたる梳櫛い蒲葵にて作りしにや五節に用るあり櫛い〔類聚雑要抄〕に彫櫛形黄楊にて作る髪上の時用之また牙もて作りしも有とみゆ彫櫛の形い今いふ三日月形にて様の入たるなり水瓜形なり又〔同書〕銀にて伏輪ある細き形の櫛ありまた螺鈿櫛あり此櫛い水瓜なり伏輪い今銀むねといふと同じ又糸金の櫛はらひあり長き筋を集め中程を金物にて括りたる其形水引を束ねたるやうなり今民間の櫛はらひさし櫛いたく異なり〔清少納言雙紙〕に七日里人の白馬みむとて車きよげにおたてゝ見に行く中の御門のとおきみ引入る程かしらぞも一處にまろび合てさし櫛も落ようにいせねば折なんどして笑ふもまたをかし〔紫式部日記〕にひかけをまろめてそらいたる櫛どもおろきものいみじくつま〳〵しきと君たちの給へいすこしさたすぎ給ひにたるわたりにてくしのそりさまなむなを〳〵しきと云々〔榮花衣の珠〕辨の内侍いみじうさうぞきてさし櫛に物いみをさへつけて云々〔枕草子〕端午の條若き人々いさうぶのさしぐしものいみつけなどしといへるも同じとなり〔河海〕に〔忍草〕に

彫櫛

螺鈿櫛

さし櫛

物差出て付るよしそれをもひかげといふにやひかけは女羅ともいへり故に後には白糸などにて組て心葉とすることなり〔類聚雑要抄〕云五節童女の頭に物着付る事二所に付之左右耳の上程右は顔後に寄て付之其故は用差櫛時は此物着の上に横さまに差なり〔まさすけ装束抄〕に云たうにち（當日）は　さそらいたる櫛といふものを右の物着のかしらに横さまにさすなり　そらいたる櫛とは　彫櫛にて三日月形をいふなるべし漢人は八字といへり〔剪燈新話〕八字牙梳白似銀、註に赫胥氏始造二十四齒梳、後世雑以象牙玳瑁爲之、其制如八字、また〔右京太夫家集〕〔延禮門院女房〕屋しまのおとゞかやこのころ八ツ聞ゆめりその人の中納言ときこえし頃五節に櫛をこひきこえたりしをたぶとてくれなゐのうすやうにあしわけをふねをむすびたる櫛さしたるがなのめならぬにかきておしつけられたりし、あしわけのさはる　小舟に紅のふかき心をよするとそ云々櫛に結ふといふいへり定かならねなり按るに結ふとい　物の形を糸はなして造りて櫛のむねに付るにや〔落窪四〕こがねして透箱（スイバコ）をころも箱の大きさに結へるに　柯葉のうすものにつゝみて入たり云々これすかしのある筥を黄金にて彫造れるなり因て思ふに手をこめて作れるを結構と云如く巧みに造れるを結ふといへる歟又櫛をもかんざしといふ〔源氏絵合〕朱雀院より梅つぼに御繪奉らせ給ふ御返事に昔の御かんさしのはしをいさゝか折てとあるいむかし梅つぼ齋宮にくだり給ひし時の別れの櫛のとを云なり又〔若菜上〕女三のみやの　御裳着に中宮より櫛の箱こ奉らせ給ふ處、秋好御歌「さしながら昔を今につたふれば玉のをぐしぞ神さびにける朱雀院御覽じつけて云々けにおもたゝしきかんざしなれば御返りも昔のあはれをばさし置て、さしつきに　見るものにもかよろつよをつげのをくしのかみさぶるまでとぞよろこび聞え給へるともみえたり又釵を櫛ともいへるい〔新撰六帖〕の光俊が龜の歌「河の瀬にうきたる龜のさし櫛ぞ見し世ながらのふるしなりける、是い〔捜神記〕に見えたる江夏の黄氏が母龜と化（なり）て深淵に入しが折々水面に出るに銀釵いもとの如く頭にありしといへる古事をよめり

政子がた

此頃政子がたと云櫛はやれり是い鶴が岡に政子の遺物あり其圖〔新編鎌倉志〕に出たりまた或諸侯の藏物に紫檀にて作れる古き櫛二ツ有一ツ形圓く傍に短き柄ありて自在に動く今の毛筋通しなどの用をなすもの歟一ツいみねを鳥の形に彫たり此等親しく見ぬ物なればその新古をもらず象牙の櫛古くい〔延喜彈正式〕に凡内命婦三位已上、聽用象牙櫛また〔雑要抄〕に大治五年二月廿一日中宮藤聖子、立后料、待賢門院に令申請給時、以牙作令進給と見えたり後世民間に行はれしい〔椀久物語〕女乞食のとをいふ處この淺ましき身となりても黒髪そゝげず一筋元結かけて象牙の半をれたるさし櫛これくせもの昔のおもはれ云々〔一代女草紙〕象牙のさし櫛大きに萬氣を付て拵へ云々、その後元文ころ象牙櫛笄はやる（其頃のもの今もまれにあり）〔賤緒手巻〕にい寶暦ころ象牙くし笄はやり蒔繪をわたる奇麗にてよかりきといへり、猶をばらくはやりしとみゆ今も吉原にて松葉屋半左衛門方にい正月二日遊女ども象牙の櫛をさし昔の餘風ありとぞ

復輪の指櫛

箕山が〔大鑑〕に金銀覆輪の指櫛みえたり又〔諸艶大鑑〕に白目ぶちのさし櫛淺黄緒の雪駄とありこれ天和の末なり今児女のもて遊とする白目ぶちやりなどにて伏輪ぶたる是なり〔我衣〕に享保に玉

琉珊

琉珊の櫛

て木櫛大かた薄手になりたり皆蒔繪あり正德頃厚むねの木くし流行棟に金銀粉にていつかけをおたり甚たよろしく見えたり〔松の落葉〕に生島新五郎市野やといふ歌に「京のみやけになに〳〵もらふた蒔繪のさし櫛きりのたう云々桐のたうを蒔給したるなり

琉球の俗常に玳瑁を簪とす〔中山傳信錄〕に風俗をいふるし〻處、婦女小民家、簪用玳瑁、長尺許、倒插髻、中翹額上、髻甚鬆、前後偏墮、疑即所謂倭墮髻也、云々あり〔茅窗漫錄〕などに倭墮髻をここの下ゲ髪といへり銀いと良家ならざれゝ用ることならぬよしなり〔琉球國志略〕中山竹枝詞汪楫道是佳人亦復佳、一生赤脚守荊釵、宵來忽作商人婦、覓戴銀簪不脫鞋、その注に土妓不得簪銀、道遇官長、必脫舄鞵、跣足據地云々、又徐葆光がおなじ竹枝詞に衾子垂々不繫腰、招風長柚學芭蕉、不知螺髻東西墮、玳瑁簪長尾倒翹、など見えたりこゝにて專ら玳瑁の櫛笄を用るゝこれらの風をうけたるにや〔雍州府志〕に櫛篦ゝ處々に造る家ありその內にも京極二條北なる舟木屋が造るをよしとす〔職人圖繪〕に舟木長門さあり牙にて造るといへり〔職人歌合〕に筑紫櫛とあれゝ昔より西國の名産とみゆ或云薩州山中蚊子木多し其老たるは木心みな黑しこれをイスと云て櫛または筋などに作る諸州へ出すこの木燒て灰となし造酒屋に用ゆまた其灰汁を肥前の陶器に用云々〔胸算用雙紙〕小判二兩のさし櫛いまの直段の米にしても本俵三石あたまに戴く云々〔世の人心草子〕すき通りの琦瑁のさし櫛を銀二枚でおつらへ銀の笄に金紋を居させ珊瑚珠の前髮押へ針かね入の七髻（ナヒモトヒヒ）をかけて〔一代男帥子〕常州のとをいふ處べつかうのさし櫛花の露といふ物も覺へて〔入子枕草子〕下女のとを云ふにひつこき髮もまへづとにやはらけ三分五厘の木櫛も頭痛のなほるものにさしかへ

庵形のさし櫛

琉珊ふにやまた〔世の人心〕にべつかうの惣すかしのさし櫛と見えたり天和貞享の頃なり透しの櫛ゝ其後元文頃より近く天明迄も行はれたり彫工東雨安親ゝ奈良長政が弟子にて出藍の譽あり安親が女子に彫て與へたる透しの櫛あり假鎗（シンナシ）にて形角なりみねの所狹く齒長しおもてに水仙の折枝をすかしに造りたり安親ゝ寬文中の生れにて延享元年身まかれり此櫛ゝ寬永正德頃にも造れる歟此櫛細工さまで密ならず安親が親か風は人の知る所なり其後はやれるゝ齒の處玳瑁水牛にてたけ短く面を廣くして銀の覆輪種々の摸樣をすかしに造りたり〔我衣〕にべつかう高價にて寬保頃細工人に上手出來て水牛の色よきにべつかうの黑班を入てまがい作る事ゝその先より有り〔元祿曾我〕に庵形のさし櫛といへるゝ本瓜形にや又ゝ紋所の庵がたにや中の圭角（カドダチ）たるにゝ有べからず〔同草子〕さし櫛たいまいに珊瑚珠の切入といふも見えたり〔賤緒手卷〕に寶曆中朱塗の山形の平たく橫へ長きをさしたり〔簑紙輪〕髮むさし野か朝日笄といふ何あり是朱ぬりなるべし又〔島藤集〕證文に足手そらきたる大形に齒を深くひきたる櫛米仲が〔獨吟歌仙〕に關の地藏を唄にゆりすて角櫛を下駄の齒なぞゝさみせられ是享保中の作なり寶曆頃にもはやりけるにや其頃の書にみゆ遊女の二枚櫛ゝ其後なり櫛の形ゝ同じ樣なり櫛押への出來しもその頃なり帽子針の頭を曲たるやうに作る頭の丸き處に紋なぞほるなり銀にて作る明和二年前句附「廣いことかな〳〵當世ゝ軒端にあまる櫛が出來